【完結】精霊とか知らないけど、たぶん全員抱いたぜ ［土道 age21］

くろわっさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デート・ア・ライブ　×　メンズナックル　なＳＳです。

原作よりも五年早く五河士道が生まれ、数々の名言で有名なメンズナックルの愛読者になってしまっていたら、というお話。

伊達ワル男となった士道が、精霊を口説きまくる激モテ列伝！

ガイアが俺にもっと書けと囁いている――――

※メンナクが濃すぎて士道の性格がオリ主レベルの別人になってます。

目次

第1話　俺の行き先？あの太陽にでも聞いてくれ ―― 1
第2話　この俺と対等に話そうったって無理だぜ ―― 16
第3話　生き様を例えるなら、妖精姿の可憐なる野獣 ―― 29
第4話　もっと強気でいい、俺にはその価値がある ―― 38
第5話　千の言葉より残酷な俺という説得力 ―― 54
第6話　迷うな！悩むな！俺という正解だけを見ろ！ ―― 67
第7話　伊達ワル・マイスターはただ君臨するのみ ―― 83
第8話　この瞬間、世界の中心は間違いなく俺 ―― 100
第9話　伊達ワルに性別は関係ない！ ―― 113
第10話　来いよ、何処までもクレバーに抱きしめてやる ―― 134
第11話　圧倒的な包容力でオマエの全てを包み込む ―― 153
第12話　お前の失った愛の全てがこの胸にある ―― 166
第13話　ヤバモテミッションを抱いて

ナックル戦士参上 ―――――― 179
第１４話　俺の心を奪いたいなら死に物狂いで来な ―――――― 191
第１５話　ガイアが俺にもっと輝けと囁いている ―――――― 203
最終話　精霊とか知らないけど、たぶん全員抱いたぜ ―――――― 220

第1話　俺の行き先？あの太陽にでも聞いてくれ

――――メンズナックル。それは伊達ワルを志す漢の聖書（バイブル）。何者にも曲げられぬ己を貫き、自らの流儀（スタイル）を魅せ誇る。その輝きは、この壊れた世界で何を示すのか――――

３０年前、ユーラシア大陸中央部を突如襲った超大規模な空間震動現象。１億５千万人の死傷者を出した〝ユーラシア大空災〟と呼ばれる災害を皮切りに世界中で同様の現象、通称〝空間震〟が観測されるようになった。

一時は落ち着きを見せていた空間震だが、５年前より日本を中心に再び発生するようになっていた。

そんな変わってしまった世界。その日本の一都市、天宮市では変わらず朝を迎える一人の男がいた。

「太陽は今日も俺を照らすためにやってきたか。その殊勝さは誉めてやってもいいな」

お天道様に傲慢な評価を与えるのは顔立ちの整った青髪の青年だ。目覚まし時計が職務を全うし、響くベルと共に起床して、いの一番に口にした台詞とは思えない。

青年の名は五河士道。都立来禅高校に通う二学年の生徒だ。但し、既にわかるように何処にでもいる普通の高校生とは少し違う。

ひとつ言えるのは彼がお兄系ファッション雑誌〝ＭＥＮ，Ｓ　ＫＮＵＣＫＬＥ〟の愛読者であるということだ。

「おにいちゃーん！朝だよー！ってやっぱりもう起きてる！」

元気よく甲高い声を響かせて士道の部屋のドアをノックもせずに開けてきたのは、真っ白なリボンで結った真っ赤なツインテールを揺らす女の子。彼女は士道の妹の五河琴里だ。それも何時ものことなのか、彼は妹を一瞥すると軽く挨拶を済ませて再び窓から太陽を見上げる。

「朝からたそがれちゃって、おにいちゃんは相変わらずキザなのだ。ホントに早起きだから起こしがいがないよー」

「コペルニクスに地動説を説いたのは俺だぜ」

「またスッゴい嘘ついて…まったくおにいちゃんは何処にいこうとしてるの？」

誰にでもわかるような妄言を琴里は軽く受け止めているが、実際あまりにも堂々と言い切るものだから困惑していた。それでも士道はぶれることなくスカした態度を崩さ

ない。かなり痛々しい中学二年生がよく陥る精神疾患――通称、厨二病――を患っているようにも見える。
「俺の行き先？あの太陽にでも聞いてくれ」
……本当に何処にいこうとしているのか。その答えは彼のみぞ知る。

† † †

支度を済ませて、朝食をとりながら士道と琴里はテレビを見ていた。流れるニュース番組では雑多なニュースと共に空間震の話題にも触れていた。
「最近また多くなってきたよね、空間震」
「俺という史上の存在にこの世界が震えあがっちまってんだ。皆には悪いとは思ってるよ」
「ッ！……もし本当におにいちゃんが空間震の原因なら、世界中から命を狙われちゃうよ。そんなのやだぁ」
琴里は一瞬だけ渋い顔をして言葉に詰まったが、すぐに士道の冗談に合わせておどけてみせた。そして、そんなことよりと言いながら直ぐ様話題を変える。
「そういえば今日は始業式だけだから、お昼までに学校終わるよね？」

「おう」
「琴里、デラックスキッズプレート食べたーい！」
琴里は満面の笑みで騒ぐ。ファミレスのキッズメニューを本気で食べたがるその姿は中学二年生の１４歳とは思えない。幼さの残りすぎた妹に対して土道は考える素振りをした後に答えた。
「今日は用事があるからパスだ」
「えーー！やだー！やぁだぁ！デラックスキッズプレート食べたい！食べたい食べたい！」
土道の拒否に全力の駄々をこねくりまわす琴里。もはや五歳児と言われても違和感のない程の見事なまでの駄々っ子っぷりだった。
「はあ……用事が終わったらいいぞ。そんなに時間はかからねえからな」
「やったー！」
根負けした土道はやや呆れながら、妹のワガママを聞くことにした。琴里も現金なもので、了承が得られた瞬間に小躍りするかの如く喜びだした。
そして琴里はいだすらな笑みを浮かべると土道の方へと向きなおす。さらに可愛らしくウィンクをしながら一言。
「愛してるぞ！おにーちゃん！」

「おう、俺も愛してる。琴里」

空かさず士道はウィンクを返しながら答える。照れさせようとした筈の琴里は、逆に耳元まで顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。急遽始まった愛してる合戦は、兄の方がどうやら一枚上手だったようだ。

「先にいくぞ、琴里。じゃあまた昼にな」

琴里が惚けて機能不全を起こしている間に、士道は食事の片付けを終えてリビングのドアを開けていた。そしてそのまま止まることなく家から出発していったのだった。

「行っちゃった……まったくもー。妹に言う感じの愛してるじゃなかったよぉ……」

にやけた頬を抑えながらモジモジと身体を捩る琴里。彼女が家を出るのはもう少し後になりそうだ。

† † †

学校へと向かって五河士道は歩いていた。何気ない登校風景だが、士道のそれは何気ないとは言い難かった。

「あ、五河さんだ。今日はひとりなんだ、珍しいー」

「でも相変わらず全身真っ黒だよ。てかアレ制服って言えんの？」

「まじひくわー」

士道の姿を少し遠目に見ながら好き勝手なことを言うのは、同級生の仲良し三人組。話した順にポニーテールが特徴の亜衣、肩まで伸びたショートヘアーの麻衣、黒髪ロングで眼鏡をかけた美衣の女子グループだ。

麻衣の発言の通り、士道は制服姿とは言い難い程の真っ黒な格好をしている。黒のスラックスに黒のシャツ、黒のネクタイ。そして極めつけは黒のブレザーで、その材質はまさかのレザーだ。

改造制服というには剰(あま)りにもやりすぎである。だがこれこそが彼の流儀であり、それを曲げられる者はいない。

「士道さん!おはようございます!!」

そんな士道に駆け足で近寄り、斜め４５度の最敬礼決めて挨拶する男子生徒が現れる。顔を起こすと逆立った黒髪の短髪が際立つ彼の名は殿町宏人(とのまちひろと)、こう見えて士道の同級生である。

「おう。おはようさん、ヒロト」

「今日もバッチし極ってますねえ、士道さん!」

朝イチから士道出会えたことが嬉しいのか、ハイテンションな殿町。「俺も士道さん見たくなりたいっすわ!」と言いながら士道の隣を歩く。

士道はそんな殿町へ言い聞かせるようにキメ顔で語った。
「一つだけ言える真理がある……男は黒に染まれ」
「うおお!!士道さんカッケー!マジカッケーっす!!」
元々軟派な気質の殿町が、伊達ワルを極めた士道に憧憬を抱くのは仕方のないこととも思える。だが殿町を始めとした同級生は大小はあれど、士道に対して尊敬の念を抱いていた。それには多少の理由がある。
「おい、あれ…五浪(フイフリ)の五河じゃねえか?」
「あ、あの伝説の…!?」
士道を見かけた生徒からそんな囁きが聞こえてきた。
そう、何を隠そうこの五河士道という男は、高校を五浪している。すなわち21歳の高校2年生なのだ。
一つ年上の先輩にすら大層な畏敬を抱くのが学生というものなのに、五つも年上の彼は最早未知の存在とも言えるだろう。
だが彼は年下の生徒に囲まれ、ただひとり浮いた存在であるというのに、他の誰よりも堂々と学生生活を過ごしていた。誰に対しても媚びることもなく、退くこともない。
浪人を経験したことがある者なら解ると思うが、浪人というのは何とも物悲しく、不安に包まれる。学生として過ごす何気ない日常生活がストレスになるのだ。五浪もし

てしまえば常人ならまず耐えられまい。
それをものともしない士道の強靭なメンタリティは、同級生達が敬うに値する凄まじいものだった。
彼の名誉の為に補足すると、別に士道は体が弱いわけでもアホなわけでもない。色々と事情があっただけなのだ。
さて、先程の陰口は無論士道にも聞こえていた。隣にいた殿町が不快感を露にするなか、士道は自信に満ちた笑みで呟いた。
「何時だって何処でだって話題をかさらっちまう。俺の噂は七十五日じゃすまないぜ」
――やっぱりアホなのかも知れない。

†　†　†

校長先生を筆頭に、長いだけで学生には響かない話が続いた始業式も終わり、その後のＳＨＲもたった今しがた終わった。
士道は号令がかかったと同時に立ち上がり、礼が終わっても席に着くことなく、教室の出口目掛けて歩き始めていた。
「待ってほしい」

抑揚の少ない声で士道のブレザーの袖を掴んだのは、白銀色のショートカットの少女だ。彼女は鳶一折紙（とびいちおりがみ）。テストの成績は学年首席で、運動神経も抜群。文武両道を地でゆく才色兼備な美少女である。因みに恋人にしたい女子ランキング3位（殿町宏人調べ）らしい。

「なんだ折紙？」

「今日は始業式だから半日で学校は終わる」

「知ってんよ？たった今終わったからな」

「つまり午後は自由な時間になるはず」

「ああ、だろうな」

「だから、私と一緒にランチに行って欲しい。その後はデートをしにいきたい」

わかりきったことを告げた後に唐突にデートの誘いをかける折紙。話がチグハグなのは、前もって考えていた台詞だったからなのだろう。然り気無い気遣いが出来る士道はそれを察して遮ることなく話を聞いていた。だが――――

「無理だ」

「…何故？」

――――気遣うからといって了承するわけではない。あまりの即答っぷりにふたりの話を聴いていた周囲が驚く。だが折紙は淡々とその理由を尋ねようとする。

士道は自らの袖を掴んでいた折紙の掌を両手で優しくほどくと、折紙に背を向けて言い放った。

「おまえの聞きたいことは俺の背中が語っている」

意味不明である。少なからず言われた張本人である折紙には理解が出来ず、その天才的な頭脳をフル回転させて必死に意味を考えていた。

だが横で話を聴いていた殿町が堪らず「美少女からのデートのお誘いをわざわざ断る理由ってなんなんですか!?」と尋ねる。そこに隠された士道のモテ技を盗もうと必死だった。

「俺を縛り動かせるのは聖書(バイブル)と俺自身だけだ」

それだけ告げると士道は今度こそ足早に教室を後にした。教室に取り残され立ち尽くす折紙。クラス中が士道の起こした一連の流れに呑まれて唖然とした。

「鳶一さんは何も悪くないよ!五河さんが変わってただけだって!」

「五河さんめ!こんな美少女を悲しませて居なくなるなんて」

「まじひくわ――!」

そんな中、亜衣麻衣美衣の三人組が折紙を囲んで慰める。一概に士道が悪いとは言い切れないが、それでも今の対応は彼女らにとっては酷いと思えるものだった。

但し、我が滅茶苦茶に強い士道に何を言ってもいまいち響かないことも解ってはいる

ので、直接文句を言うことはあまりない。

「……やっぱり彼は素敵…」

当の折紙は、うっすらと頬を染めながら士道に握られた右手を擦って惚けていた。

† † †

校門をくぐり抜け、士道は街へと踏み出し始めた。何故彼はここまで急いでいるのか。それは他でもない――今日は様々な事情のせいで彼が待ちに待った――〝メンズナックル　5月号〟の発売日なのだ。

当然、ここまで慌てなくてもメンズナックルが売り切れることは無いし、現代社会ならばネットで事前に予約して配達してもらうことも出来る。しかし彼には己に定めたルールがあった。

〝メンズナックルだけ書店に買いにいく〟〝仕事や学校などの公的行事はサボらない〟というものだ。破ろうと思えば簡単に破れるルールだが、彼は自らを固く律する。聖書（メンナク）を汚すことになるから、と。

故に士道は学校が終わったと同時に最短距離で書店を目指す。こうなった彼は雨が降ろうと槍が降ろうとメンズナックルを買い求めにいくのだろう。

突如響く、人間が本能的に嫌うような物々しくけたたましいサイレン。

少なくなかった人通りの街は途端に騒がしくなり、人々は速やかに避難を始める。このサイレンの名は〝空間震警報〟。意味するものはその名の通り、空間震の前兆を察知し公的機関が発する避難警報だ。

人々は空間震に巻き込まれないために地下深くに備えられたシェルターへと避難する。人だけではない、車が、電車が、場所によっては道や建物ですら、対空間震の最新技術を用いて地下へと避難していく。

「俺がストリートに流れ着いたなら、空間だって震えあがっちまう」

だが士道は避難をする素振りすら見せなかった。目的地へと向かいひたすらに歩みを止めず突き進む。この時士道が何を思っていたのか。自分が巻き込まれるわけがないと考えていたのか。警報が解除された時、一番に書店に着いていたかったのか。それは神にすら解らない。

警報が鳴ったとき避難しなかった人間がどうなるのか。それは至極単純なことだ。災害に巻き込まれるのである。

瞬間、空気が爆ぜた。地面が大きく揺れ動き、建物は耐えきれずに崩れ始める。ある一点に向かって大気は吸い込まれるように勢いよく流れゆく。まるで空間そのものが

揺れ動くような衝撃。そう、これこそが〝空間震〟である。
避難することなく地上にいた士道も必然的にこの空間震に巻き込まれる。しかし、奇跡的にも砕けた建物の破片は士道に当たることが無かった。
それでも暴風ともいえる大気の動きだけは士道に襲いかかる。だが士道は脚に根が生えているかの如く、風に煽られずに直立不動の姿勢を保ったままだった。
まるで災害の方から士道を避けているような光景が繰り広げられる。
やがて空間震が収まり、甚大な被害を被る街の中で士道だけが無傷で立っていた。士道は澄まし顔で空間震など無かったかのように再び歩き始めた。
「疾風に負けるほどヤワな伊達ワルじゃないぜ」
伊達ワルの奥深さが垣間見える。そんな出来事だった。

少し歩いたところで士道の足が止まる。彼が進もうとしていた道はクレーター状に削り取られた様に無くなっていたのだ。どうしたものかと考えるが、そのクレーターの中心に誰かがいることに士道は気が付いた。
黄土色を基調とした装飾された石造りの玉座を足蹴に、紫色のドレスにも鎧にも見える服装の女がそこに佇んでいた。今風の言葉に準えるなら姫騎士というのが相応しい格好だろう。

女はクレーターの上から眺める士道に気が付く。
すると彼女は軽やかな身のこなしで玉座に登り、背もたれの部分から伸びた棒状の物に手をかけ、一息に引き抜いた。
それは彼女の身の丈の半分よりも大きな剣（つるぎ）だった。白銀の刀身に青白く光る模様が刻まれており、鍔は飾りつけられ中心には蒼い珠が輝く。なにより目を引くのは白くぼんやりと光りうっすらと透けた両刃だろう。
触れたもの全てを切り裂くのではと思えるほどその剣は美しかった。
女は剣を携えて士道に向かって一度だけ踏み込んで跳躍した。優に３０メートルはあった筈のふたりの距離は一瞬にして詰まった。
華奢な見た目からは想像がつかないほどの強力な膂力を彼女はその身に宿していたのだ。
剣を正面に構えて弾丸のように飛び込んできた女を、士道はひらりと身を翻して避けた。
至近距離で擦れ違うふたり。時が止まったような刹那、士道と女の視線がぶつかり合う。
頭の後ろで一つに纏められた宵闇色の髪が靡き、紫水晶（アメジスト）に似た美しい瞳が士道を捉えている。

やや幼さの残る端正な容貌は絶世の美少女として士道の魂に刻まれた。

再び時は動きだす。士道の真横を通り抜けた少女は着地すると素早く踵を返した。それと同時に士道も振り向くが、既に少女は握りしめた大剣の切っ先を士道の喉元に突きつけていた。

「お前もか……お前も、私を殺しに来たのだろう？」

敵意を剥き出しにしながら少女は問うた。近付くものを全て傷付けんとする程の殺意を込めた瞳の中には、どこか物悲しい感情が見え隠れしているように見えなくもない。

相対し、命に手を掛けられながらの答えとは。怯え、悲しみ、怒り。どんな感情を抱くのだろうか。

伊達ワルを極めし五河士道からの答えは……

「放っておいてくれ……今日は女って気分じゃない……」

――孤高にて絶世の美少女と、至高の伊達ワル漢の道が、今交わる。

第２話　この俺と対等に話そうったって無理だぜ

崩壊した街に対峙するふたり。片や一振りの大剣を持ち殺意を振り撒き、片や手ぶらで横柄な態度を振り撒く。

「何が放っておいてくれだ、ふざけるな」
「別にふざけてないぜ？」
「お前らが私を殺しに来るのだろう。こちらのことなど知らずに…」
少女は騒ぎ立てながら切っ先を突き付け続ける。常人なら冷や汗が止まらないような状況であっても、士道はその飄々（ひょうひょう）とした態度を崩さなかった。
少女は突き付けた剣を振り上げると、士道の真横すれすれに振り下ろした。大剣からは紫色の光が走り、なぞったかのように破壊の痕が刻まれる。
「この力を目にしても同じことが言えるか？」
「言えるぜ。俺は今、お前に用がない」
「ではお前は何故ここにいる？」
恫喝染みた目の前の非日常をさらりと受け流し、士道は動揺することもなく答える。

暖簾に腕押し状態なやり取りを終え、少女の顔が敵意から怪訝なものへと変わってから新たに尋ねた。

士道が「俺は――」と答えようとした時、微かに聞こえる空気を裂く音。音に反応した少女は士道から目を離し、空を見上げる。

そこには近未来的なボディースーツのようなものを身に纏い、重火器を携えた女性たちが鋼鉄(はがね)の翼を用いて飛来してきていた。その数はひとりやふたりではなく、統率の取れた軍団が突如として現れたのだ。

「来たか……お前のことは後回しにしてやろう」

少女は士道に一旦見切りをつけるとフワリと浮き上がり、空飛ぶ軍団に向かって勢いよく飛んでいった。

「俺と出会えた女が舞い上がるのはいつものことだぜ」

謎の力で少女たちが空を舞い、相対する不可解な光景を見ても自らの魅力に酔いしれているとしか思っていなかった。

でも酔っているのは士道、君自身だ。

士道が的外れなことを考えていた頃、空中では少女と女性たちの戦争(殺し合い)が巻き起こっていた。

少女に向けて引き金が躊躇なく引かれ、自動小銃は雄叫びを上げながら弾丸を吐き出し、撒き散らかされた小型のミサイルが獲物を捉え一直線に飛んでいく。

鉄と爆薬の脅威が圧倒的な物量を伴って少女に襲いかかる。

「こんなものは無駄と、何故学習しない」

少女が左手を翳すと、紫の滲(にじ)む透明な障壁が銃弾の雨から少女を守り、勢いを無くした弾丸は地へと落ちる。

少女が大剣を横凪ぎに振るうと空を裂く斬撃が飛び出し、立て続けに迫りきていたミサイルを切り裂く。裂けたミサイルは獲物に届かずその場で連鎖的に爆発を起こし、爆炎が辺りを包み込んだ。

「はあああああ――――!!」

半透明の緑色バリアが爆炎を押し退けて、光剣を構えた軍団員が叫び声を上げながら少女に迫る。鬼気迫る女を冷めた目で見ながら、少女は大剣で軽く光剣をいなすとすり抜けざまに背中に取り付けられた機械の翼を切り落としていった。

翼を失った者はゆっくりと地面へと落下していった。仲間がやられたという事実に、軍団は少女に対しての殺意を更に強めていく。

天空で繰り広げられる闘争を余所に、士道は逃げも隠れもせず悠々と、空間震によっ

て荒れた街を歩いていた。だが士道が無関心でいようと彼の真上で行われているのは、硝煙と鉄塊が舞い、光線と斬撃が飛び交う無慈悲な戦争である。

「あ、――――」

只の一発の流れ弾。標的を逸れたミサイルが士道の頭上から迫り――――彼は爆炎に包まれた。

†　†　†

『もう絶対離さない。もう絶対間違えない。もう一度知ってしまった温もり。■■■■■にだって絶対に渡さないから。全部私だけのモノだよ。だから――――』

†　†　†

「知らない天井だ……」

士道が目を覚ますと目の前には無機質な天井と釣り下がる蛍光灯が光っていた。分かるのは自分がどこか知らないベッドに寝かされていたということだけだ。

「ようやくお目覚めかしら、士道。どんだけ惰眠を貪るつもりよ」
聞き馴染みのある声に、士道は身体を起こしてそちらを向く。そこにいたのは彼の妹の琴里だった。
普段と違い黒いリボンを着けた彼女は、今朝までとは雰囲気が違った。年不相応な程に幼かった言動は鳴りを潜め、鋭い目付きで刺々しく語気を強めて女傑のような話し方をしている。
「どうしたの士道？何か言いたいことがあるなら言いなさい？」
琴里が兄に対して初めて見せる〝強い私〟。いつもキザで動じないお兄ちゃんが絶対に見せないような慌てふためく顔が見れる。と琴里は心の中で期待していた。
そして士道（お兄ちゃん）は暫し硬直したのちに口を開く。
「琴里、ここは何処なんだ？用事があるからって言ったろ。お前と遊ぶのはその後にしてくれ、な？」
兄はいつもと変わらず、クールで尚且つ優しい態度で語りかけてきた。残念ながら琴里の目論みは失敗に終わったようだ。
「あんた自分の――――」
――置かれている状況分かってるわけ？と問おうとした時に、急にドアが開かれ琴里は思わず言葉を止めてしまった。

ドアを開けたのは薄紫がかった白のロングヘアーを頭の後ろで乱雑に纏めた二十代くらいの女性だ。黄土色の軍服に身を包み、目元には濃い隈が目立つが、それでも一目で美人だと解るくらい整った顔をしている。

大人びた彼女には不釣り合いな、つきばきの熊のぬいぐるみを胸ポケットにいれており、異彩を放っていた。

その女性を確認した途端に、士道の表情はこれまでに琴里が見たことの無いものに変わっていく。

「令音……」

「やあ、久しぶり。シン」

「それは……昔の名前だ。今の俺は只の五河士道さ」

表情に影を落とす士道。対して何処と無く嬉しそうな令音。対照的なふたりの表情はどちらも琴里が知らない顔だった。伏し目がちな士道がチラリと覗くように令音の顔を見る。令音はそれだけで、またも満足げな顔をしていた。

「隈…また濃くなってないか？」

「まあ……お陰さまでね」

少しの溜めの後、含みを持たせた言い方をする令音。何か言いたげな士道は深く息を吐きだすと、ゆっくりとベッドから出て立ち上がった。

「人は過去には戻れない。この俺ですらな」

この言葉が何を意味するのかは他人にはわからない。だが言葉を投げつけられた令音には真意が伝わったらしく、哀しみにも怒りにも見える形相を浮かべていた。

「私は…私はそんなこと認められない。認めていい筈がない。君はシンだ。私の――――」

先程より少し声を大にして話す令音の言葉が遮られる。令音の唇には士道の人差し指が添えられていた。そして士道の瞳は少し潤んだ令音の瞳をじっと見つめている。

「過去を振り返るな。俺という未来だけ見つめていろ」

士道の言に迷いは一切ない。尊大とも思える真っ直ぐな言葉が令音の胸を突き刺す。

戸惑い、苦悩、複雑な感情が令音を揺さぶりその表情をコロコロと変える。そして最後は頬を紅潮させて士道から目を逸らしてしまう。

そんな彼女の姿は誰の目から見てもトキメキを感じる乙女の姿だった。

口を挟むまもなく、琴里は唖然としながらふたりのやり取りを眺めていた。

お兄ちゃんを驚かせようとした筈なのにどうしてこうなった？琴里はそう思わずにはいられなかった。

暫く硬直していた琴里だったが、ハッとして我に返り二人の関係を問いただそうと口

を開こうと思ったその時だった。
　コンッコンッと小気味良いノックの音がドアから響く。
「失礼します司令！不肖、神無月入室致します！」
　軽快な声色で令をしながら入室してきたのは、金髪のロン毛をはためかせた背の高い美男子だった。琴里はなんだコイツか的な視線を神無月に送るが、彼は気にすることなく部屋の中ほどまで歩いてきた。
「変わりないようで何よりです、シン」
「カンナさん！御無沙汰してます。カンナさんも元気そうで」
「カンナ…？さん…??」
　にこやかな神無月の顔を見たと同時に、あの士道が姿勢を正してお辞儀をした。琴里はわけがわからず混乱している。
「アンタたち知り合いなの!?」
「ええまあ、彼がまだボーイだった頃に、少々と。実際会うのはドンペリ（ドンペリオン）の反逆の日、以来ですから…一年ぶりくらいですかね」
「…ボーイ？ドンペリ？」
「カンナさんがいなきゃあの頃の俺はありませんでしたよ。ホント、あん時は世話になりっぱなしだったなぁ」

「ふふふ、今は神無月と呼んでくれて構いませんよ、シン」
「なら俺も士道って呼んで下さいよ」
「ハハハ！」
　乱立していく突拍子もない情報の数々に琴里の頭はパンク寸前だった。だが、なけなしの理性を振り絞り自分を置いて談笑する男どもに問いかけた。
「ハハハじゃないわよ！ちょっと待って。士道がボーイって何!?というか神無月にしろ令音にしろ、どうして士道とそんな親しげなのよ！」
　顔を真っ赤にしながら声を荒げる琴里。士道はやれやれといった調子で黙しているし、令音はそんな士道を横目で眺めていた。そんな中、神無月がここぞとばかりに琴里の前へと一歩進んで紳士的振る舞う。
「いえ司令。私が夜の街の、所謂オカマバーで働いていた頃に知り合った。それだけの話ですよ」
「夜の街…？オカマバーって!?アンタそんな経歴まであったの!?」
「ありましたとも！まあ今となっては良い思い出です。が、あくまでも司令と出会う前の話ですけどね！今は司令の一番の下僕が天職だと自負しております!!」
　ハリの有るいい声で神無月は言い切った。既に彼は地に手足を着けて四つん這いの姿勢で、琴里からの叱咤（ご褒美）を心待ちにしている。

琴里は冷めた目で足元にすり寄る神無月を全力で流す。神無月にはそれすらご褒美と化し、「あはぁ」と嬌声を垂れ流していた。
「それはどうでもいいわ。そんなことより！なんでそれが士道と繋がるのよ!?」
「それはシンが夜都神（ヤトガミ）と呼ばれた伝説のホストだったからだよ」
「は？」
「昔の話だ」
「琴里……まさか、妹なのに知らなかったのかい？」
淡々と衝撃の事実を口にする令音に済まし顔の士道。止めの一撃を貰いどうあがいても理解できないので、そのうち琴里は考えるのをやめた。
「司令。司令！……ご主人様ぁ!!」
「ダメだ、どうやら頭がオーバーヒートしてしまっている」
「とにかくブリッジに行きましょう。士道くんの新しい仕事を説明するためにも！」
機能を停止した琴里を神無月が引き摺りながら、一同は部屋を後にした。
なお、琴里の受難は始まったばかりである。

† † †

ブリッジと呼ばれる場所に辿り着く頃には琴里も頭を落ち着かせることが出来ていた。

空中に投影されたモニターなどの近未来的な機器が立ち並び、半円状に配置された６つの座席にはそれぞれ人が腰かけて何やら作業をしている。

そして一際目立つのは一段と高く設置された他よりも立派な座席だ。まさしくそこは艦橋（ブリッジ）であった。

琴里はその艦長席ともいえる椅子に腰掛け、悠々と脚を組んでチュッパチャプスを口にする。そして改めて士道と対峙するのだ。

内心は未だに落ち着かないが、ここは琴里にとってのホームグラウンド。言わば自分の領域だ。ここでなら遅れをとることなどないと、再び傲慢な態度で士道に話始めた。

「紹介するわ士道。ここにいるのは空中戦艦フラ――――」

「お久しぶりです、皆さん」

「――――クシナスの……ってまたぁ!!?」

またもや琴里の予想を裏切り、士道は自らの部下である乗組員（クルー）たちと親しげに話始めた。「ここで何してるんですか」なんて当たり障りのない挨拶から始まり、気が付けば琴里の知らないことばかりを話している。

士道が乗組員たちと簡単な話を終え、ブリッジをぐるりと一周してくる頃には琴里は

ゲンナリしきっていた。
聴こえてくる話に耳を傾けていた結果分かったのは、士道は男性乗組員とは付き合いで相談相手によくなっていたらしく、女性乗組員とは接客で知り合ったようだった。
無論、全てが琴里の知らない士道のホスト時代の出来事である。

「いかがしましたか、司令？」
気持ち的に一回り小さくなった琴里に神無月が気を使って話しかける。琴里はため息をつきながらゆったりと士道を顎で指す。
「私の領域に持ち込んで、勢いのままにお兄ちゃんに仕事を引き受けてもらう計画が……」
琴里の独り言のようなぼやきは、今日だけで自分の常識を大きく塗り替えられてしまったことに対する怨嗟のようだった。
だがそんな妹の呟きをあの男はしっかりと聞き取っていた。
「この俺と対等に話そうったって無理だぜ」
謎の自信に満ちた胸を張り、腕を組みながら士道は琴里に対して余裕の笑みを見せつける。
あまりにも大人げない士道だったが、伊達ワルに目覚めた兄を嵌めようと企んだ琴里

の完全敗北で、ある種の自業自得とも言える。
それだけ五河士道という漢はオレ流を貫く者だったのだ。
「こんな……こんな筈じゃなかったのにぃ――――――!!!!」
琴里の叫び声だけが空中戦艦フラクシナスの艦橋に木霊した。

第3話　生き様を例えるなら、妖精姿の可憐なる野獣

「私の知らないお兄ちゃんがいたなんて……只の不登校じゃなかったの？」
　疲れた顔で琴里は自棄気味に士道に尋ねる。マトモな答えが返ってくるとは思えないが一応尋ねてみたのだ。
「イイ男には秘密が付き物。勿論イイ女にもな」
　思った以上にマトモじゃなかった。
　当たり前のように琴里の想像を超えてくる士道。だが、そんな琴里に助け船が渡される。
「知らない一面があったのはお互い様だと言いたいのだろう」
「なんで令音が翻訳出来るのよ…」
「ひとえに付き合いの長さ、かな」
「私、義妹なんだけど……」
　助けが来たと思ったら強大さを自慢しに来た黒船だった。琴里は呆れ果てて、だらりと背もたれに身体を預けた。そして頭の中で考えをまとめる。
　琴里は兄に勝つことは不可能といい加減に気が付いた。

　この後のことを考えると話を優位に持っていけるように、会話の主導権を握りたかったが、とりあえず話を聞いてもらうのが先決だろう。そう判断した。

「まあいいわ。本題に入りましょう。土道、あなたをここに連れてきたのはやってもらいたい仕事があるからよ」

「断る。悪いな琴里、今日は忙しい」

「なんでこの状況で即答!?」

　半ば拉致に近い形で連れてこられたにも関わらず、土道は説明を求めることもなく答えを出す。おかげで琴里の予定は駄々崩れだ。

「俺が求め、俺を求めるモノが待ってんだ。今日は帰るぜ」

「ちょ、ちょっと！待って土道！今に始まったことじゃないけど話聞かなすぎるでしょ!!」

　既に踵（きびす）を反して艦橋を去ろうとしていた土道の腕を、琴里は両手で捕まえて引き留めている。それでも身体のちいさな琴里では力が足りず、ズリズリと引き摺られているのだが。

「俺の迸る伊達ワルは、黒部ダムでも止められないぜ」

「つまり…どういうことだっての…!?」

「俺を止めることは出来ない、そう言いたいのだろう」
令音の翻訳の通り、士道は止まる気がさらさらなかった。彼をここまで突き動かすものとはいったい……
「しかし、アレの発売日は２５日の筈……今日はまだ１０日だろう？」
「先月の空間震の被害で印刷所がダメになりましてね。発売が延期になってたんですよ」
心当たりのありそうな令音の疑問に、神無月がさらりと答える。そして神無月は「士道くん、これをどうぞ」とビニール袋に入れられた雑誌を手渡した。
「神無月さん、これは何処で…!?」
「こんなこともあろうかと、今朝がた天宮書店で開店と同時に買っておいたんですよ」
険しかった士道の表情は一転して柔らかくなり、不敵な笑みを浮かべ始めた。というよりニヤついているというのがしっくりくる顔にまでなっている。
そう、彼の手に渡ったのは他でもない〝メンズナックル５月号〟だった。
発売が延期となり士道が待ちに待ち、空間震を差し置いてでも買いに行こうとした、彼れにとっての聖書（バイブル）である。
そして士道は腕を組ながら不遜な態度で口を開いた。
「じゃあ、話を聞こう」

「うわっ…私のお兄ちゃん、現金すぎ…！」
琴里がツッコむのも無理の無いほどの、現金な手のひら返しであった。

†　†　†

「士道にやってもらいたい仕事ってのは、その空間震に深く関わるものなのよ」
「ほう」
神無月の巧みな仕事により、士道になんとか話を聞く姿勢を持たせた琴里は、余裕を持った態度で士道に対して話始める。無論、士道が謙虚な態度になるわけではない。
「改めまして。私達は〝ラタトスク〟。精霊との対話による空間震災害の平和的解決を目指し結成された秘密結社よ。因みに私はその司令官。神無月は副司令で、令音は解析官を勤めてるわ。士道が知り合いだった川越も中津川も幹本も、箕輪も椎崎もみんな精霊の保護の名の下に集まったってたわけ」
琴里の言葉と同時に、艦橋にいる乗組員全員の視線が一斉に士道に向けられる。司令の言うとおりだ、と言わん張りに視線を注いでいた。
士道は余裕の態度を崩さず、少し考えて口を開いた。
「精霊…生き様を例えるなら、妖精姿の可憐なる野獣。ということか」

「へえ……」

ここまでの経緯とこの状況から導きだした答えにしては、かなり的を得ている士道に思わず感心する琴里。

何も考えていないように見えた兄が、思いの外理解が早いことに安心していたのだが、その後の士道の言葉に度肝を抜かれた。

「つまり、俺のことだな？」

「違うわ」

やっぱり解っていなかった。

琴里は少しでも期待した自分を戒めて、士道に対して説明を始めたのだった。

†　†　†

琴里の話を要約すると――

精霊とは〝隣界〟に存在する特殊災害指定生命体である。発生原因も存在理由も共に不明であるが、こちらの世界に顕（あらわ）れる際に空間震を発生させ、周囲に甚大な被害を及ぼす。

まず人類は武力による殲滅を試みた。先程空を飛んでいた陸自の対精霊特殊部隊

〝ＡＳＴ〟などがそれにあたる。しかし精霊は非常に高い戦闘能力を持つため達成は困難である。

そこで異なる対処法を思案した。それが精霊との対話による平和的解決であった。

――――ということだそうだ。

「そして士道が昼に出逢ったのが、私達が《プリンセス》と呼ぶ精霊よ」

「プリンセス…精霊……なるほど」

士道は琴里の話を聞いて、頷きながらフフンと鼻をならした。だがこの男、ここまで聞いて一切理解していなかった。

士道の脳裏に浮かんできたのは紫の絶世の美少女の姿であり、精霊のように可憐なるお姫様、それがあの娘。といったものが伊達ワルな士道の認識だったのだ。

「ラタトスクの目的は、精霊とデートして、デレさせて、封印することよ。そのためのフラクシナス。そのための士道。あなたがこの作戦の要なの」

「封印…」

「ああ、別に壺に閉じ込めたり、縛り付けたりするわけじゃないわ。ただ……そうね、普通の女の子に成るだけよ」

真剣な顔で話をじっと聞いていた士道の姿を見て、琴里は確信した。間違いなく心優

しいお兄ちゃんはやるはずだ、と。
「それで、やってくれるわね士道？」
「意味がわからないな」
琴里の問いかけをバッサリと切り捨てる。またもや予想を裏切る士道の答えに琴里は二の句が止まらない。
「なんでよ!?やりなさい!!」
「なんでって言われてもなぁ」
琴里の鬼気迫る追及にもどこか要領を得ず、あっけらかんと答える士道。
暖簾に腕押しな状態に段々と琴里は興奮していく。
「士道がやってくれなきゃ空間震の被害はこれからも増え続けるのよ!!」
「おい琴――――」
「これは只の遊びじゃないの、この国を……いえ、この世界を守るための戦い。いえ、戦争なの!!」
士道の言葉すら遮り、琴里は叫ぶ。本来ならば冷静に、一方的に会話にのせて、半ば強要してやらせようとしていた。
だが士道の想像を超えるマイペースに呑まれた琴里は感情のままに言葉を紡いでしまっていたのだ。

「だから、助けてよぉ……お兄ちゃん…!!」
琴里の激しい感情の揺らぎは怒りを通り越してしまった。力なく涙声で懇願するまでに心が弱り過ぎていた。
「琴里、俺を見ろ」
士道はそう言って琴里の顎を右手でそっと掴んで、クイッと持ち上げる。ほのかに涙の滲む瞳が士道の力に満ちた瞳を捉える。
彼は話の流れが解らなかった訳ではない。只、琴里が強制してやらせようとしていたことの意味が解らなかった。
「御神木のようなスピリチュアルな佇まい」
士道は全身から放つオーラで答えを示す。彼の表現はどこまでも他人には伝わりにくい独自のものだったが。
――そう、士道は言っていない。
「この神秘性に落ちない女はいない」
「やって…くれるの……?」
士道にとって女に愛を囁くことなど、やって当然のことだった。
犬が吠えるように、魚が泳ぐように、鳥が空を舞うように、特別理由がなければやらないほうがおかしい。それくらいに当たり前のことなのだ。

故に、それを頭を下げてやってくださいと言われても意味が解らないと思っただけの話だ。

――――彼は一言だって言っていなかった。

「足掻いても、この色気の罠からは逃げられない」

琴里の眼から零れ落ちそうな雫をそっと指で拭いながら、彼は言い切った。

――――やらないとは、一言だって言っていない。

士道と精霊の、世界を賭けた一騎討ちが、始まる。

第４話　もっと強気でいい、俺にはその価値がある

薄暗い部屋の中、男は厚手のカーテンに手をかけた。真横に引くと、シャっという小気味良い音と共に窓から柔らかな朝陽が差し込み、男の身体を照らす。

陽射しによって明るくなった部屋に立つのは、上半身裸の五河士道だ。

士道は慣れた手つきで煙草に火を着けながら、窓の外を眺める。陽に照らされ写るのは漂う雲。そしてその遥か下に小さく見えるのは、彼が日々過ごしていた天宮の街並みだった。

士道は後ろからもぞりと動く音に気が付き、ゆっくりと振り向いた。

「起こしちまったみたいだな」

「ん…その匂いがするときは、いつもシンがいなくなる時だから……」

ベッドの上で身体を起こして微睡んだ声で話すのは、薄手のシーツだけを身に纏う令音だった。

なぜこんなことになってしまっているのか。事の発端は前日に遡る――――

†　†　†

「――――足掻いても、この色気の罠からは逃げられない」
顎に手を添えられたままの琴里の瞳を、士道は吐息がかかりそうな距離で、尚もじいっと見詰めていた。
「し、士道…？」
次第に冷静さを取り戻していく琴里だったが、今度は急に恥ずかしくなり顔を真っ赤にしていく。それでも士道は瞳を逸らさず、穴が開くのではというくらい義妹の眼を見詰めていた。
「お兄ちゃん……」
耳まで真っ赤に染まった琴里は、右へ左へ上から下へと目が回りそうな程に眼を泳がせて……最後には覚悟を決めたようにそっと瞳を閉じた。
「話はまとまったようだね？」
「ひゃう!!?」
突如真後ろからかけられた声に、琴里は驚いて跳ね上がった。そこにはジトーっと滑

り気を帯びた視線で琴里を眺める令音がいた。
ＭＫ５（マジで恋する五秒前）だった琴里は慌てて士道から離れる。そして、バクバクとざわつく心臓を抑えながら覚束（おぼつか）ない足取りで艦長席に戻るのだった。
「さ、さあて。じゃあ士道の同意も得られたことだし、明日から早速訓練を始めましょうか！」
動揺の抜けきらない声で話す琴里。どうにか仕切り直しにして、出来ればなかったことにしたい、というのがまるわかりだった。
「琴里、訓練ってなんだ？」
「それはね、士道が女の子にモテモテになるための訓練よ！」
「ふっ…」
琴里はややあざとさを見せながら、ビシッと指差して決める。突拍子も無いことを言われた士道は、済まし顔をしながら鼻で笑った。
「司令ー。士道くんには今更いらないでしょ。その訓練」
そんな声を上げたのはフラクシナスの乗組員のひとり。太っちょでメガネを光らせる中津川だった。
それに続くように「ふむ。確かにその通りかもしれませんね」と神無月が納得する。気づけば乗組員のほぼ全員が同じような意見を口にしていた。

「土道ってそんなにモテるの…？」
「モテろって囁くのさ。俺の伊達って止まらないワル魂（ソウル）が！」
「だってこんなよ？絶対！必要でしょ！」
決めポーズで話に割り込んできた土道を指差しながら、呆れ顔で琴里は訓練の必要性を説く。
これから口説く精霊たちがこの変わり者に靡（なび）くのか、と不安になってしまったことは責められないだろう――
「先程まで恋に落ちそうな顔をしていた人間の言うこととは思えないが……」
――但し、言った本人が靡いてない場合に限る。
令音の見も蓋もない一言でこのゴタゴタは終結した。あとに残るは恥ずかしそうに顔を伏せる琴里の姿だけだった。

「さて、コイツもあるし…いい加減に帰らせてもらうぜ」
土道はこれ見よがしにメンズナックルの入ったビニール袋を掲げて、足早に出口へと向かう。
帰り道は解らないがなんとでもなるだろうと思いながら歩を進めようとした時だった。

「それなら私の部屋で読んでいくといい。今から家に帰るのは大変だろう？」
「いいのか？」
「勿論、艦内に私室を設けてもらっているから直ぐだよ」
　令音は流れるような動きで士道の隣に並び、そのまま部屋に招待したのだ。あまりの早さに俯いていた琴里は気づけていない。
「いや、転送すれば家まで一瞬なんじゃ――――ひっ!?」
　口を挟んだ椎崎を令音の鋭い眼光が射ぬく。長い前髪で隠れている片目の奥すら見抜かれているような圧力に、出来る限りの早さで顔を逸らし口をつぐむ。
　実際、秘密結社ラタトスクが用いる超技術である顕現装置（リアライザ）を使えば、上空一万五千メートルに存在する戦艦フラクシナスから地上までは瞬時に移動が出来る。
　しかし、令音はその事実を意図的に士道に伏せたのだ。
「コーヒーでも淹れようか。まあ飲みながら久々にゆっくりするといい」
　穏やかな口調で話ながらも、ぐるりと周囲を見回して、ざわつく周りを眼で殺す令音。
　士道はオモチャを買ってもらった少年のようにメンズナックルに夢中だったので、その視線に気付くことはなかった。
　そして、ふたりは揃って艦橋を立ち去っていった。

「怖かったですねえ、村雨解析官」
「目がマジでしたよ。おぉ怖っ！一途な女って怖い怖い」
「箕輪さんがそれ言うんですか…保護観察処分中なのに」
令音と士道が去った艦橋では、睨まれていた一同が緊張から解かれ談笑していた。
因みに琴里が復活したのはこれから更に二分後のことであった。

†　†　†

「お待たせ、ブラックでよかったね？」
「ん、ああ。ありがとう」
士道はベッドに腰掛けながら、令音から渡されたコーヒーを受け取り、一口含むとサイドテーブルに置いた。そして再びメンズナックルに眼を落とす。
士道は部屋に案内されベッドに座るよう促されると、そこからは口を開くことなくメンナクの世界に潜り込んでいった。
女性の部屋に上がり込んでおいてそれでいいのかと問いたくなるが、部屋の主である令音は満足げな表情でそれを見守っていたので、ふたりの間ではこれが正解なのだろう。

それから士道はメンズナックルを読んで読んで、読み尽くした。時折コーヒーに口を着け、また読み、途中に出された軽食に手を出して、また読み耽る。一ページ一ページを味わうように士道はゆっくりとメンズナックルを読み込んでいった。

「……やはり、ローランド様は神だ…」

パサリと雑誌が閉じられる。士道は読み終わったメンズナックルを片手に、背筋を伸ばしながら天を仰ぐ。

気がつけば夜も遅く、窓の外はすっかり暗くなっていた。

「終わったかい、シン」

少し離れたところからかけられた声に反応して士道はそちらを向く。

そこにはバスローブだけしか着ていない令音の姿があった。シャワー上がりでまだ上気した白い肌が妙に艶かしく輝いていた。

「随分と長居しちまったな。いろいろありがとうな、じゃあそろそろ俺は――――」

目的を終えた士道は令音に手を振りながら、部屋を去ろうと立ち上がって歩き始めた。そして令音の横を通り過ぎた瞬間、後ろから急に抱きしめられる。

色めいた四肢を絡め、身体全てを使って令音が彼を引き留めたのだ。

「これだけ待たせておいて、ハイさよならなんて言うと思ってたのかい？」

問われた士道は無言のまま、己の身体を縛る令音の掌を優しくほどく。そのまま振り

返ると、そこには今にも泣き出しそうな顔でこちらを見上げる令音がいた。
「今夜は……ひとりになりたくない…」
零れる落ちるようなか細い令音の言葉。それは彼女の心からの本心だった。
士道は深呼吸をしたのちに、令音の柔らかな身体をそっと抱き締めて、耳元で囁いた。
「このまま朝までオマエを抱き寄せて過ごそうか」
令音は何も言わずに壊れそうなほど士道を抱き返した。それが彼女なりの返答だったのだろう。
そして夜は更に更けていく……
ここで語れるのは、士道によって令音が夢のような時間を過ごしたということだけだ。

† † †

――――そして現在に至る。
「よく眠れたみたいだな」
「本当に……本当に良く眠れたよ」
ニヒルに笑う士道に、一呼吸おいてから令音は朗らかに笑いかけた。顔に目立ってい

た隈がいつもより大分薄くなっていたのは、きっと気のせいではないのだろう。
士道は煙草を吹かしながら「ところで」と話題を変えた。
「これはラタトスク的にオッケーだったのか？」
士道が疑問に思ったのは、秘密結社という組織の中でこのような関係に成って良かったのかということだ。
尚、抱いたこと自体にはなんの後悔も憂いもなかった。
「ああ、精霊は繊細で初な存在だからね。シンが先走らないように私が身体で引き留めただけだよ」
令音は淡々とした口調でビジネスライクな言葉を紡ぐ。だがそれは自分の中でそう思っていただけだ。
実際には声は震えている上に眼も泳いでいたので、他人から見れば嘘を言っているのがすぐにわかる。
それでも令音は言葉を止めずに、嘘を続けた。
「シンは本当に手が早いからね。こちらから手を打ったのさ」
積み重なっていく大人びた言い訳。素直になれない彼女だったがそれを見逃す士道ではない。
「そう、これはあくまで仕事の――――」

そこまで話したところで令音の唇が塞がれる。蓋となったのは他でもない士道の唇だった。驚きに眼を見開いた令音だったが、すぐに瞳を閉じて甘美な妨害に身を委ねた。

重なる唇と唇。令音が口付けを堪能したのち、遠さがる互いの唇にはきらめく糸が引かれた。

息を切らしながら瞳を蕩けさせる令音から眼を逸らさずに士道は口を開く。

「もっと強気でいい、俺にはその価値がある」

士道はそれだけ言い残すと、黒のアウターを羽織ながら部屋を後にする。そして、惚けたままの令音だけが部屋に残された。

令音はベッドに倒れて、まだ湿り気を帯びた自らの唇に触れる。

「シン……本当に君はズルい。やはり…私だけのモノにしたくなってしまうじゃないか……」

令音は微かに残る彼の温もりと香りをシーツから感じながら、火照った身体をひとり冷まし続ける。

† † †

士道は昨日までの非日常など無かったかのように、普通に高校に登校していた。
いつも通りに教室へ向かい、いつも通りに自分の席に着く。そしていつも通りのホームルームが始まったのだが――――
「新学期二日目ですけども、このクラスに副担任の先生が就いてくれることになりました」
「村雨令音だ。担当は物理。よろしく」
――――全てがいつも通りとはいかないようだ。
令音は白衣姿にメガネをかけた装いで、生徒たちに向かって軽く笑顔を振り撒く。その視線は特にあるひとりに向かっていたが。
突然の報告にざわつきだすクラス。そんな中でも士道はニヒルな笑みを絶やさず、クールに振る舞うのだった。
少しだけ変わった士道の日常だったが、当の本人は特に気にすることなく、騒がしくも平穏な日々を過ごしていく。

†　†　†

そして一週間の時が過ぎた。

日常を謳歌する士道は殿町と共に昼飯を食べながら駄弁っていた。
「士道さん、俺は決めましたよ。今から先取りして……夏を頂く!!」
食事が終わるや否やそんなことを言い出す殿町。今は四月の頭、夏はまだ先だというのに気の早いことだ。
「というわけで士道さん、何か夏モテの秘訣。ありませんかねえ?」
「んー…悪いなヒロト、あまり力になってやれそうにない」
「ええっ!?何でですか!!?俺には教えてくれないってことですか!?」
まさか士道がモテの秘訣を知らないとは思っていなかった殿町は、悲しそうに夏モテを連呼しながら膝を着く。
だが士道はそんな殿町の肩を、そうじゃないと言わんばかりに力強く叩きながら言う。
「夏モテ?悪いがオレは一年中モテだ」
士道は夏限定のモテなど知らなかった。彼のモテは３６５日年中無休で営業しているのだから。
「流石は士道さん…根底からして違う…!」
感動にうちひしがれる殿町。士道はそんな殿町を優しく見守りつつ、席を立ち教室を後にする。

シンプルにお手洗いに行きたくなっただけだが、それを感じさせない立ち振舞いで堂々と彼は歩くのだった。

†　†　†

「待って欲しい」
トイレから出た土道を待ち受けていたのは、学年一の才女鳶一折紙だった。
「どうした折紙？」
「その格好、今日もいい感じでカッコいい」
「おう？まあな」
唐突に土道の改造制服を誉め出す折紙に、疑問を抱きつつも当然のごとく返す土道。
土道と彼女の会話はわりとこんな感じの始まりが多いので、土道はあまり気にしていなかった。
「土道さん、実は私は前から貴方のことを知っていた」
「そうか」
「二年で同じクラスに成れてとても嬉しい。だから授業中はずっと貴方のことをずっと見ている」

「そうか、授業はちゃんと受けとけよ」
「問題ない。それに放課後貴方の体育着の匂いを嗅いだりもしている」
「そうか、盗むなよ？」
「問題ない。あと、良かったら私と付き合って欲しい」
「そうか、いいぞ」
淡々と繰り返される問答。あまりの急展開に並みの人間なら着いていけないだろう。だが伊達ワルを極めた士道がこの程度の速度に振り落とされるわけはなかった。
その代わりに、並みの人間が置いていかれるわけだが。
士道は何か思い付いた顔をした直後、素早くスマホを弄って何かを始める。すると電子音と共に折紙のスマホが震え、士道は折紙にスマホを確認するように促した。
「俺のブロマイド、送っといてやったぜ」
一見して迷惑千万な行為だが、士道がやるとなると話は別だ。
現に折紙はスマホが壊れるのではないかと思えるほど強く握りしめながら、送られた写真を必死でスワイプしていた。
「それと折紙、お前は――――」
士道が何かを折紙に伝えようとした瞬間、空間震警報が鳴り響きその言葉を止める。
折紙は苦虫を噛み潰したような顔でサイレンを鳴らすスピーカーを睨み付けていた。

「私はこれで。士道さんは早く避難を。じゃあまた」
それだけ告げて折紙は士道の前から走り去っていってしまった。それと入れ替わるように今度は士道のスマホが鳴り出した。
「俺だ」
「〝士道、プリンセスが現界するわ！出現予測地点は……来禅高校…!!士道の近くよ！フラクシナスで回収するから移動して、早く！〟」
電話口からは琴里の焦りを含んだ声が響く。だが士道はゆったりと歩幅で歩きながら移動を始める。
「底抜けに優雅にクレイジーってのは大アリだな」
「〝言ってる場合!?空間震に巻き込まれるわよ!!〟」
相も変わらず空間震を恐れない、何処までもマイペースな五河士道だった。

†　†　†

「〝士道、プリンセスが現界したのはグラウンドの中心だったみたい。ついでに校舎の一部を呑み込んでね。でもそのおかげでプリンセスが校舎に入った。これならＡＳＴの邪魔も入らないわ〟」

士道が令音から渡された小型のインカムから、琴里の状況報告が届く。士道は転移によって強制的にフラクシナスに回収され、再び校舎前に転送されていた。

「それで、お姫様は何処にいるんだ？」

「〝プリンセスは三階に居るみたいね。ナビするから向かって頂戴〟」

士道は不敵な笑みを浮かべたまま、琴里の案内のもと校舎へと足を踏み入れた。

彼を待ち受けるは、最強と名高い精霊《プリンセス》。再びの邂逅の行方は――――

「さあ、私たちの戦争（デート）を始めましょう」

第５話　千の言葉より残酷な俺という説得力

「士道くん、校舎に入ります」

宙に浮かぶ近未来的なモニターには、優雅に歩きながら壊れた学舎に立ち入る士道の姿が映し出されている。

空中戦艦フラクシナスの艦橋では皆が精霊《プリンセス》と士道の様子を常にモニタリングしていた。

「さあて、プリンセスか…ここ一年ほど天宮市一帯で広がってる微弱な霊波の元凶とも言われてる精霊ね」

「プリンセスの霊波とは波長（パターン）が違うみたいですけどね」

「プリンセスのこの街への出現時期と微弱な霊波の発生時期は合致してますからね。関係は皆無とは言えなさそうです」

別のモニターに表示されるデータを見ながら琴里を始めとした乗組員たちは見解を口にする。

「士道くん、約１０秒でプリンセスと接触します」

「最強の精霊プリンセス。士道、彼女を頼んだわよ。あんたがどうやって彼女を落とすのか…全部士道にかかってるんだから」

† † †

士道は空間震によって歪んだ教室のドアに手をかける。軋んだ音を立てて扉が開かれると、壊れた教室の中に佇む絶世の美少女の姿が見えた。

「よお」

「ん…？またお前か……何者なんだ、お前は？」

士道の軽い挨拶に訝しい視線と殺気を送りながらプリンセスは答えた。

士道が二の句を紡ぐ前に、左耳に入れたインカムから通信が入る。

「〝待ちなさい士道。今フラクシナスのＡＩが選択肢を表示したわ！〟」

† † †

フラクシナスに搭載された超高性能ＡＩが精霊の精神変化を機敏に捕捉、解析しその場にあった会話内容を選択肢としてモニターに表示する。

①俺は五河士道。君を救いに来た！
②通りすがりの一般人ですやめて殺さないで
③人に名を訊ねるときは自分から名乗れ

「うーん、③かしらね」
「②は論外ですね。というか指示しても士道くんが言うとは思えない」
「どうでしょう、①は一見鼻につきますが士道くんならうまいこと使えると思いますね」
表示された選択肢を各々が意見を述べながら精査していく。これらの選択肢に沿って会話を進めることで、まるでギャルゲーのように精霊を恋愛的な意味で攻略していくのだ。
これこそが、秘密結社ラタトスクの誇る数多の超技術を無駄に全力で活用した、平和的な精霊対策なのである。
「それじゃ総員！選た――」
「司令!!士道くん、既にプリンセスとの会話を開始しています！」
「――なんですって!?」
川越の報告に驚きながらモニターを確認する琴里。そこには謎のポーズを決めながらプリンセスに話しかける士道の姿があった。

†　†　†

「この身に宿した前人未到の快楽領域。ストリートという劇場に舞い降りた黒騎士。人は漆黒の世界に生きる帝王と呼ぶ…」
　土道の独特過ぎる自己紹介に、プリンセスは只でさえ殺気に満ち溢れた眼光を一段と鋭く尖らせる。
「ルールルル、怖くないよ…おいで子猫ちゃん」
　土道は続けておどけるようにプリンセスを手招く。直後、プリンセスの掌から紫の光が迸り、土道の顔の直ぐ傍をすり抜けて背後の壁に風穴を開けた。
「冗談はいらない」
　次は当てると言わんばかりにプリンセスの掌は紫の光球を生み出していた。哀しみを押し込めたようにも見える苛ついた視線で土道を居抜きながら。
　しかし土道は身動ぎひとつせずに悠々と立ち続けていた。
　そして変わらぬ調子でプリンセスと会話を続けていく。
「冗談なんて言ったつもりはないぜ?」
「ならばお前はなんだ?…私の敵か?」

「敵も味方も超越した存在だ」
予想だにしなかった答えにプリンセスの目が少しだけ見開かれる。だがその敵意は消えておらず、依然士道はプリンセスにとっての敵だった。
「では何をしに来た…！」
「お前を愛し、お前に愛されに来たのさ」
士道は恥ずかしげもなく歯の浮くような台詞をつらつらと述べる。
「ふざけるな!!」
プリンセスは拳を固く握りながら地団駄を踏む。彼女の強大な膂力によって、床はクモの巣状の罅（ひび）をたてながら陥没していた。
「俺の言葉ひとつひとつ、全てが真実だ」
士道は言い淀むことなくハッキリと言い切った。自信に満ちる士道の態度に、プリンセスは瞳をギラギラと光らせながらも、なんとも言えぬもどかしさを感じていた。
プリンセスは一度眼を伏せると、再び士道を睨み付けながら口を開く。
「見え透いた嘘を……お前も私を殺しに来たのだろう!?私の前に現れた人間は皆、私は死なねばならないと言っていた！…つまり、お前も私の敵だ!!」
プリンセスは行き場のない感情を爆発させて、士道向かって手刀を振り抜いた。紫の力の塊を携えたそれは、空を切るだけで周囲に衝撃を撒き散らした。

壁は吹き飛んで崩壊し、残っていた窓ガラスはひとつ残らず粉々に砕け散る。
しかし、そんな中でも士道には傷ひとつなかった。
「当てるつもりのない拳なら下げておけ。お前の掌は俺に包まれるためだけにある」
士道は振り抜かれたプリンセスの手刀を両手で握ると、指を絡めながらゆっくりと包み込んだ。
「は、離せ……！ホントになんなのだお前は……」
プリンセスは握られた掌を力任せに振りほどき、士道から視線を逸らしそっぽを向いてしまった。だがその頬がやや赤らんで見えるのはきっと夕陽のせいなどではないだろう。

† † †

「プリンセスの感情バロメーターは？」
「困惑…といったところでしょうか。少なからず先程までの敵意は無くなったようです」
「ここまでは上手くやれてるみたいね……」
フラクシナスの艦橋では琴里がデータと現場の映像を見比べながら安堵の息を吐い

ていた。
「話の展開が早いのと、士道くんの答えが突拍子もないせいで、プリンセスの感情が変化し続けてますね。おかげで解析ＡＩの処理が追い付いてませんよ」
「あんな滅茶苦茶な会話を予測なんて出来るわけないってことね。我が兄ながらやってくれるわ」
フラクシナスの管理ＡＩを振り切る速度で会話を進める士道に、琴里たちは手をこまねく事態に陥っていた。
だが気を抜くことは出来ない。有事に備え、周囲とプリンセスの監視を厳に琴里たちは士道を見守っていく。

†　†　†

「それで結局お前は何者なのだ…？」
「俺は五河士道。溢れるカリスマ、人呼んでモードロックの騎士」
士道は掌で半分だけ顔を隠しながら、誰からも呼ばれていなさそうな二つ名を添えて名乗りを上げた。
彼のことをモードロックの騎士と呼ぶ人がいたら是非とも連れてきてもらいたいも

のである。
「イツカ…シドー……なるほど、シドーだな」
「そうだ、お前が何よりも優先して覚えるべき俺の名だ」
「何故そこまで自分を……」
堂々とした士道の決定に、プリンセスの顔にはよりいっそう濃く困惑の色が浮かぶ。
何故この目の前の人間はここまで堂々としていられるのだろうか、とプリンセスが思うのは自然なことであった。
「それでお姫様。君の名前は？俺になんて呼ばれたい？」
士道が問うとプリンセスは口をつぐむ。暫しの沈黙の後、プリンセスは顔をしかめながら答えた。
「名などない。これまで必要になったことも、ない」
「でもこれからは違う」
「…なぜだ？」
「この俺が必要としているからだ。名前を…お前という存在の証明をな」
その一言で途端にプリンセスの紫水晶のような瞳が大きく見開かれる。
ついに敵意と困惑以外の感情が彼女の中に芽生え始める。
士道の気障（きざ）な言葉の弾丸が、プリンセスの蕀に包まれた心を撃ち抜いたのだ。

「お前は私を、必要だと言うのか…？私を…否定……しないのか…？」
プリンセス…否。少女は少し震えた声で士道に訊ねる。幾ばくかの願いをこめて。
――――どうか、私を否定しないで。
だが士道の答えは少女の望みを裏切るものだった。
「答えはいらないな」
「…なんだと？」
士道の言葉にプリンセスは綻んでいた顔を、再び敵意に満たしたように引き締め、彼を睨み付ける。その腕にはあの紫の光が滲み出していた。
だが、プリンセスが行動を起こすよりも早く、士道は次の言葉を紡ぎ始めていた。
「千の言葉より残酷な俺という説得力」
自らの胸に手を当てて全身で己を表現する士道。これが伊達ワルなのだろうか。
あまりにも不遜な態度と言葉の連続にプリンセスは唖然とさせられる。しかし、それと同時に士道に対して深い興味を抱いているのも事実だった。
「はぁ…本当にお前はなんなのだ……でもお前に興味が湧いた。確かシドーとか言ったな？マトモに私と会話をしようとした人間はお前が初めてだ。この世界を知る手始めにお前のことを知るとしよう」
プリンセスは呆れたようにため息をつくと、それまでの刺々しい雰囲気は鳴りを潜

め、軟化した態度で士道に話し始めた。
「俺という存在感の海に溺れるなよ。それと俺にどう呼ばれたいかは決まったか？」
「名か。ならシドーが決めてくれ。もうそれでいい…ばーかばーか」
刺々しさが抜けたプリンセスは急に子供のような態度をとり始めた。先程までの冷淡な性格よりも、もしかしたら純粋な子供のような性格のほうが彼女の本質なのかもしれない。

†　†　†

「〝名前か…そうだな……〟」
「便宜上プリンセスって呼んでたけど、まさか名前が無いとは思わなかったわ」
士道をモニタリングしている琴里が、チュッパチャプスを舐めながら呟く。
そして、ここで下手な名前をつけると後々困ることになりそうだ、と密かに考え始めた。
「よし、こっちで名前を決めましょう。士道、聞こえる？私たちが名前を考えるから、ちょっと待ちなさい」
「〝決めたぞ。１０日に延期したメンナクの発売日に出会ったから……〟」

「待てって言ってるでしょ!!!なんでそんな思いきりがいいのよ！」
士道の考えた名前などきっと録な名前にならない。というかメンナクがどうのと言い始めている段階でまとな名前では無くなりそうだ。
琴里は慌てて止めようとするが士道の早さについていけてなかった。
「十香だ。そうだろう、シン」
令音が颯爽と士道に無線通信を送り、琴里の、いや、プリンセスの窮地を救った。あとは士道がこの指示に従うかどうかが問題になってくる。
「〝よく解ってるじゃないか令音。お前も俺の領域に近づいてきたな〟」
士道の好意的な返事に琴里は胸を撫で下ろした。ホントにそう考えていたのか、それとも令音に合わせたのかはわからないが、ナックルメン子や伊達ワル美みたいな名前に成らなくて良かった…と。
その間、令音は普段は一切しないようなドヤ顔で、士道のことを解ってます感を振り撒いていた。

†　†　†

士道はひび割れた黒板に歩み寄り、チョークを一つ手に取ると何かを書き始める。コ

ツコツと小気味よい音を響かせながら書き出したのは〝十香〟という漢字だ。
「十香。これがお前に授ける名前だ」
「とーか……十香。これが私の名前か…」
土道の書いた文字に倣うように、プリンセスは指先から微弱な力を放出しながら黒板を抉っていく。そして十香という名前を黒板に刻み込んだ。それは同時に彼女の心の中にも深く刻まれた。
土道の導きによって名も無き精霊《プリンセス》は、十香というひとりの少女に成ったのだ。
「十香。良い名前だろう、シドー?」
「まあこの俺が名付けたからな、当然さ」
「ふふっ…ばーか」
土道と出逢ってから初めて十香が笑った瞬間だった。
その太陽のような笑顔は、美しくも冷酷で寂しげな表情よりもずっと彼女を可愛らしく際立ていた。
「…シドー」
朗らかな顔で十香は嬉しそうに土道の名前を呼ぶ。
「おう、十香」

慈愛に満ちた笑みで士道もまた十香の名前を呼ぶ。

夕暮れの差し込む教室。所々壊れて、壁も窓も無くなっていたが、それでも二人の間には穏やかで優しい雰囲気が流れていた。

壊れた世界で今だけは、十香と士道のふたりぼっち――――

――――の筈だった。茜の空から鈍色の弾丸の雨が降り注ぐまでは。

第6話　迷うな！悩むな！俺という正解だけを見ろ！

夕暮れの教室に降り注ぐは、茜色の斜陽と鈍色の弾丸の雨。
それは精霊の反応を検知し校舎上空で待機していた、陸自の対精霊特殊部隊〝ＡＳＴ〟による、精霊《プリンセス》の炙り出しの為の攻撃だった。
ババババッと途切れることなく銃声が鳴り、巣穴に逃げ込む獣を追い詰めるように、崩れた校舎の一角へと発砲し続ける。
「炙り出しの許可は下りたわ。引き摺りだして機動戦に持ち込むわよ」
ＡＳＴの隊長である黒髪ロングのポニーテール女性、日下部遼子（くさかべりょうこ）は隊員たちに指示を出しながら、構えたアサルトライフルのカートリッジを交換していく。
「出てこい精霊……今日こそ……必ず殺す、仇を討つ……！」
隊長の言葉に従い打ち続ける隊員の中でも、一際鋭い殺意を滾らせるのは白銀髪の少女。士道のクラスメイトで、つい小一時間程前に恋人に昇格した鳶一折紙だった。
まさか自分が放つ弾丸の先に、自身の恋人がいるなど知る由もなく、彼女はひたすらに引き金を引き続けるのだ。身を焦がすような憎しみに燃えて……

†　†　†

士道と十香に降り注いだ弾丸は、半透明のバリアのような何かによって防がれた。
その膜はやや紫がかった光が滲んでおり、十香の精霊としての力によるものであるというのが一目で解った。
「早く逃げろシドー。私と一緒に居ては同胞に撃たれる」
十香は士道に寂しげな顔でそう告げながら、迫り来る銃弾の雨粒を力の傘で弾く。
十香にはこうなる事が解っていた。しかし、士道と話してみたいと思ってしまった。思ってしまったが故に巻き込んでしまったのだ。
「問題ないさ、気にするな十香」
「私が気にするんだ…」
ほんの僅かな時間の会話だったが、十香は嬉しかったのだ。この世界には自分を殺しに来る人間だけでなく、自分と話すためだけにノコノコと現れる人間もいると知れたことが。まあ少々変わり者ではあるけれど。
そんな人間を、士道を巻き込むわけにはいかないと思えたのだ。それは彼女にとって初めての経験だった。
だから彼女は武器を手に取ることを選ぶ――――

「来い！塵殺公（サンダルフォン）!!」

†　†　†

――――少女が初めて誰かの為に剣を振るおうと決心していたその時。五河士道という男は、サンダルフォン？最新機種のスマホか？　などと全くもって的外れなことを考えていた。

十香が木目調の教室の床を軽く踏みつける。すると床から光が溢れだし、その中から黄土色の石材からなる神秘的な玉座が現れるではないか。

士道はそんな光景を前にしても、考えを改めることはなかった。

「デカいな、流石は最新スマホだ」

「すまほ？とやらは知らんが、これは違うぞシドー」

いつぞやのように十香は玉座の背に伸びる柄を握ると、一思いに引き抜く。そして現れるのは、あの美しい幻想的な大剣だった。

少女の声に呼応して召喚されたのは玉座ではなく、大剣の鞘だったというわけだ。

これには流石の士道も考え直したであろうと思われた。だがしかし、一筋縄ではいかないのが伊達ワル士道だ。

「ハハン、なるほど。タブレットだったわけか、そりゃデカいわな。そっちはスタンドだな?」
「〝んなわけないでしょ!それは天使よ!!〟」
「今どきの学生はそういう言い方するのか。サンキュー琴里、勉強になったぜ」
「〝違うってんでしょこのウスバカゲロウ!!〟」
琴里は士道に怒濤のツッコミをいれまくるが、彼はそれがスマホないし、タブレットだと信じて疑わなかった。
自分がこれと思ったらその考えを容易く変えることなく、信じぬく。それが五河士道という漢の考え方なのだ。
例えすっとんきょうな勘違いを重ねていようと、彼が信じる以上彼の中ではサンダルフォンは通信端末にしか成り得ないのだ。
「じゃあ十香、ＬＩＮＥ交換しようぜ」
「らいん?何を交換するというのだシドー。そんなことより、メカメカ団を迎え撃たねば!」
士道は自らのスマホを取り出すと、サンダルフォンに視線を落としながら近づく。十香は不用意に剣に触れようとする士道に驚きながら、誤って触れないようにさっと剣を引いていた。

彼の的外れな言動のせいで忘れがちだが、彼らは現在進行形でＡＳＴから襲撃を受けている真っ最中である。十香が精霊の力で弾丸を防いでいなければ、精霊である十香ならまだしも、人間でしかない士道はあっという間に蜂の巣にされてしまうのだ。

だが士道はそんなことお構い無しに、スマホを片手にアプリを起動していく。

「おい十香、コード読み取りにくいから動かすなっての」

剣を振り上げようとする十香の手を掴み、士道はサンダルフォンを手繰り寄せてスマホを近づけていく。

「ここか？……それともこれか」などと呟きながらサンダルフォンの刀身に刻まれた模様や鍔に埋め込まれた珠にカメラをかざして、連絡先を交換しようとしていた。

「〝何やってんの！そんなの読み取れるわけ――〟」

「出来たぜ」

「〝――いや読み取れるんかい！どうなってんのよ!!〟」

インカムから飛び込む琴里の必死の叫びを他所に、士道は慣れた手つきでスマホを操作して読み取ったと思わしき情報を登録し終えていた。

もしかしたらこの漢の辞書には不可能という文字はないのかも知れない。

「シドー、もういいか？私はいかねば…」

「外野なんてほっとけよ、今は何より大事な俺との時間だぜ」
「しかしそれではシドーが…!」
　十香は困惑していた。自身の巻き添えという形で今にも同胞である人間たちに撃たれようとしているにも関わらず、悠々と、そして堂々とした振る舞いをまったく崩さない目の前の男にだ。
　だからこそ、私が護らなくてはと思っていた。やるべきことも解っている。簡単なことだ。いつものようにこの身に宿った力を使って、戦って追い払えばよいのだ。
　でも目の前の男はそれを望んでいない。彼が望むのは私と話すこと、共に居ること…それだけのことだった。
　出逢うもの全てから拒絶されてきた私のような存在に、初めて手を差し伸べてくれた者の想いに答えたいと思った。それと同時に、こんな私が理由(わけ)も解らないままこの優しさに触れても良いものなのかと怖くなった。
　せめぎ合う感情の波に呑み込まれ、十香は今、悩んでいた。
　その最中、士道の言葉が十香へと届けられる。
「迷うな!悩むな!俺という正解だけを見ろ!」
　それは彼女が欲しがった答えだった。十香の心の中を見透かすように、士道が放った驚くほど迷いのない言の刃は、ジレンマによって苦しめられていた十香の悩みをスッパ

リと断ち切る。
銃弾が奏でる喧騒すら十香の耳には届かない。士道の言葉だけしか聴こえない。
――十香の瞳には、もう士道だけしか映らない。

† † †

士道が十香の心をガッチリと掴み取った時から、もうそこはふたりだけの場所、ふたりだけの時間だった。いや、正確に言うならそこは士道の独壇場と言えるだろう。
士道が口を開けば十香は嬉しそうに微笑み、胸踊らせる。十香が話せば士道が十香の考えを超越した言葉の群れで返す。
士道と話せば話すほど、十香は士道に深く惹かれていった。

その様子は空中戦艦フラクシナスでもしっかりとモニタリングされていた。
「好感度、更に上昇を確認!」
「凄いですね…士道くん。十香ちゃんのご機嫌メーターがうなぎ登りで上がってきますよ」
浮かび上がるモニターには十香の精神状態が表示されており、それが士道によっても

たらされた結果を如実に表していた。
「我々がサポートすることありませんね、これは…」
「ＡＩの解析もギリギリでさっきから選択肢も出てこないですしね」
「もう全部土道くんひとりでいいんじゃないかな」
乗組員の間には諦観にも楽観にも似たムードが漂っていた。だがそれを素直に受け止めきれない者も居たのだ。
「油断しない!相手は精霊よ、何が起こるかなんてわからないわ!」
土道の義妹であり、フラクシナスの司令官でもある琴里だ。彼女は弛み始めていた艦橋の雰囲気を一蹴すべく、声を張って喝を入れる。
「当人たちは気にしてないみたいだけど、ＡＳＴの襲撃はまだ終わってない。それに本来不可視の精神状態を数値化出来るのは私たちの最大の強みで、決して無くなった訳じゃないのよ。だからこそ現状できるサポートはいくらでもあるわ!各自計器から目を離さないこと!いい!?」
「了解!!」
琴里の言葉に乗組員たちはキレイに揃って返事した。それを確認すると琴里は艦長席に深く座り直し、大胆かつ不敵に脚を組み換える。
このまま傍観して終わるなど自らのプライドが許さない。そう思った琴里は自分の

職務を全うすべく、士道への通信回線を開くのだった。

† † †

「〝士道聞こえる？〟」

十香と楽しくお話をしていた士道のインカムに、琴里の声が飛び込んでくる。

「ちょっと待て」と十香に告げると、士道は通信に耳を傾けた。

「〝十香の好感度が十分に上昇したわ。そろそろ仕掛けていきなさい〟」

「なるほど、任せろ」

小声で呟いたためか、まるで耳元で囁くような低い声で了承の返事をした士道。それがこそばゆかったのか通信の向こうの琴里は「ひゃうぅ…！」というなんとも情けない声を上げていた。

「〝デートに誘えという意味だよ。その先じゃあない。わかってるね、シン？〟」

「……任せろ」

「〝今の間は何い!!?〟」

釘を指す令音への意味深な返事に思わず琴里がつっこんでしまった瞬間だった。

さて、先程からそんな様子を不審な目で眺めるのは、待てを言い渡された十香だ。
他でもない士道に待てと言われたからには待ってるつもりだったが、何やら士道の様子がおかしい。頻りに耳に手を当てて何かボソボソと呟いている姿に不安を覚えてしまったのだ。
そしてざわざわとする胸の騒ぎが抑えられず、彼女は意を決して口を開いた。
「さっきから何をボソボソと言っている!まさか…この期に及んで私を謀ろうというのではないな!?なあシドー…?」
「そんなわけないだろ。そうだな……十香、お前に伊達ワルの真髄を教えてやろう…!」
「なん…だと…!?」
「〝違う、そうじゃない〟」
鈴木雅之もびっくりなほど訳の解らないデートの誘い文句だった。
不安こそ消えたものの、士道には驚愕させられてばかりの十香に、琴里は同情を禁じ得なかった。そんな琴里もそろそろツッコミ疲れた頃なのではないだろうかと思えるが。
兎に角、伊達ワルに染まった士道に周りは振り回されてばかりだった。
「シドー……だてわるとはなんだ?」
「ああ、それを今から二人っきりで教えて――――」

純粋な十香の疑問への答えは、突然の爆発音によって掻き消された。士道たちは十香の力によって無事だったが、辺りは爆炎で包み込まれていた。

「ＡＳＴが本格的な攻勢に出てきたわ！一旦引きなさい士道!!」

爆発の正体はＡＳＴが放った攻撃だった。銃弾による炙り出しを諦めて、ミサイルによる周囲の破壊を始めたのだ。

いくら十香の力によって怪我などをしないとしても、こうもドカンドカンと激しい爆発の音と空気を伝播する衝撃が酷いと、最早話どころではなくなってくる。何せその話し声すら掻き消されていくのだから。

士道は露骨に不機嫌な顔になると、騒音の元凶の方へと歩き始めた。

「俺に構って欲しい女が騒がしいのはスタンダード。でもな……今は大人しく順番待ちしてる時だぜ！」

「シドー！危険だからあまり離れるな!!」

「〝士道!?何するつもり!?!!いいからさっさと逃げなさい！〟」

その場で十香が、通信に越しに琴里が、無闇に鉄火場へ赴こうとする士道を止めようとするが、士道は歩みを緩めることはない。

崩れた校舎の外、ＡＳＴを姿がよく見えるような窓際まで行くと、士道は天を仰いで言い放った。

「圧倒的な美しさの恐怖、味あわせてやる」

†　†　†

銃弾での炙り出しから、ミサイルによる波状攻撃に戦闘手段を切り替えてから暫くすると、破壊の広がる校舎からひとりの人影が現れる。

遂に精霊が姿を現したかと、折紙は思った。しかし現れたのは彼女が予想だにしなかった人物だった。

「あれは……士道さん!?」

「シン様!!なんでこんなとこに!?」

「……は？」

折紙が士道の姿を確認すると同時に、隊長である日下部の口から聞き覚えのない名前が聞こえてくる。だが明らかに知っている人物だという口振りだった。

「総員打ち方止めーーー!!シン様…じゃなくて、一般人がいるわ！一時待機！これは命令よ!!!」

隊長の指示により、成りやまなかった銃声と爆音がピタリと止まった。折紙も引き金から指を離し、状況を整理するためにその天才的な頭脳をフル回転させていく。

――何故士道さんがここに…？逃げそびれて学校に残っていたの？というか隊長の言うシン様とは…？それよりもどうして精霊がいる筈の所から士道さんが現れた？まさか精霊に襲われている…？

不可解すぎる状況に、折紙の頭の中は疑問符に包み込まれる。

「何あれ、超イケメンじゃない!?あっ、こっち見――――」

オープンチャンネルで悠長なことを言っている同僚の通信が半端なところで途切れる。不埒なことを言った同僚睨み付けてやろうと視線を送る。だが、気付けばその同僚は戦線から消えていた。

何が起きたのか理解する間も無かったが、その時何か光が走るのを折紙は見ていた。

彼女は光の軌跡を辿って出所へと視線を動かす。其処に居たのは他でもない士道だった。

「いったい何が……きゃあ!?!!――――」

瞬間、士道から煌めきが走った。その煌めきは光のような速さで突き進み、魔術師（ウィザード）の最大の防護障壁である随意領域（テリトリー）を瞬く間に食い破り、空を舞う為の要であるCRユニットを貫いた。

制御を失いフラフラと墜落していく隊員。幸いなことに煌めきは隊員の身体を傷付けることはなく、再び随意領域を生じさせて事なきを得ていた。

信じられない光景に折紙は頭の中が真っ白に成りそうだった。だが驚く折紙を尻目に、先程と同様の煌めきが次々と走っていく。

「うわぁぁあ――――！」「嫌ぁ――――!?」「嘘でしょ!?」「助けてください隊長！日下部隊長――――!!」

次々と断末魔が空に木霊していく。陸自のエリートであり、対精霊特殊部隊である魔術師たちが成す術もなく地に落ちていく。

突如襲い来る脅威と認めがたい現象に、折紙の頭は混乱し、心の中は混沌を極めていた。

†　†　†

「〝何をしたのだ!?ピカッとしたらメカメカ団が墜ちていったぞ!?〟」

「〝この流し目はレーザーガンより破壊力があるぜ〟」

「〝おお！凄いなシドー！〟」

「〝ふっ、当然だ〟」

モニターには、はしゃぐ十香とスカした土道の姿が映し出されている。

ＡＳＴを襲った驚天動地な出来事はフラクシナスでもしっかりとモニタリングして

いた。
「今のは何!?」
「現在ＡＩが解析中です！でも今のって…！」
琴里は艦長席から身を乗り出して驚き、箕輪が信じられないといった様子で返事をする。
混乱していたのはＡＳＴだけでなく、フラクシナスでも同じだった。
「――結果、出ます！」
「な…！士道くんから霊力を検出!!なんだこの数値!?」
「まさかイフリートが…？いや、でもこんなの知らない…！そうだ、識別反応は!?」
「パターンアンノウン！……いや、これは……嘘っ!?」
「椎崎！状況報告は正確に!!」
「も、モニターに出します！」
艦橋中央の巨大な空中モニターに映し出される情報に、琴里は度肝を抜かれてしまい、目を見開いて唖然とする。
ポカンと開かれた口からチュッパチャプスが滑り落ち、乾いた音を発てて床を転がった。
「天宮市一帯に広がっていたあの微弱な霊波とパターンが一致してます…」

「そんな、嘘でしょ…?只の近似の可能性は?」
「解析ＡＩによると、９９．８パーセントの一致。ほぼ間違いないでしょう。つまり…士道くんがこの霊波の発信源だったということに……」
神無月の粛々とした説明に琴里は言葉を失った。
琴里の発する雰囲気につられ、慌ただしかった艦橋の空気は静まり返り、モニター越しの十香の愉しげな声だけが響き渡る。
モニターに映っている、いつものように不敵な笑みを浮かべる士道を、琴里はじっと見つめて呟いた。
「いったいどうなってるの……ねえ、お兄ちゃん…」

第7話　伊達ワル・マイスターはただ君臨するのみ

仲間は次々と落とされた。あの煌めきは精霊が放ったに違いない。そして何より…最愛のあの人を、私の全てを捧げるあの人を盾にして、襲いかかってくるなんて……

「……絶対に殺す…!!」

激昂した折紙は身を焦がす衝動に任せて、光剣を抜いて突貫した。黒鉄の翼は空を切り、あっという間に精霊との距離を詰める。

そして彼女は雄叫びと共に剣を振り下ろす。しかし、憎き精霊を両断する筈だった光剣は、精霊の大剣によって軽くいなされてしまった。

為されるがままというわけではなく、折紙は身を翻して士道と精霊の間に立ちはだかるように着地した。

「彼を盾にとるなんて…赦(ゆる)せない!」

あくまでも士道は自分の意思で精霊である十香と共にいたため、全ては彼女の勘違いなのだが、それを説明している隙はなかった。

「おいおい、ちょっと待――――」

「はあぁぁ――――ッッ!!」

「てやぁ――――――ッ!!」

士道が止めに入るよりも早く折紙は光剣を上段の構えから振り下ろす。十香も横凪ぎの振りでそれを迎え撃った。

折紙の光剣と十香の鏖殺公（サンダルフォン）が、互いの力と力が正面からぶつかり合う。

せめぎあった力の奔流は周囲へと巻き散らかされ、強烈な光が辺り一面を包み込んだ。

そして光が収まる。そこにはもう十香の姿はなく、残されたのは無作為の力によって傷付いた折紙とかすり傷ひとつない士道だけだった。

流れる血と埃と煤に塗（まみ）れながらも、折紙は覚束ない足取りで振り返って士道に近寄る。

「おい、大丈夫か？」

「平気…うっ……」

折紙は傷の痛みからふらついて倒れそうになる。しかし、士道が当然のように折紙の身体を引き寄せて、彼女は士道の胸に速やかに収まった。

「ごめんなさい…貴方の服を汚してしまった」

「気にするな、元より俺は穢（けが）れを纏いし堕天使さ。お前は俺の胸に居れる悦びに堕ちていけばいい」

「んっ…ありがとう。士道さんは無事？」

士道の胸の中で赤らみながら縮こまる折紙。身体は傷で痛んでいても、この時この場所は彼女にとっての極楽浄土に違いないだろう。

いつもより少しだけ抑揚のある声で問う折紙に、士道は力強く笑いかけながら答えた。

「肩で風を切って生きる男は摩擦熱には強いんだ」

たぶんではあるが、怪我はなかったと言っているのだろう。

だが折紙にはしっかりと伝わったようで、彼女は安心したように「良かった…」と呟くと、士道の腕で安らかな顔をしたまま眠るように意識を失ってしまった。

士道は一度しゃがんでから、所謂お姫様抱っこで折紙を抱えて立ち上がる。

さて、どうしたものかと士道が考え始めた時、空から空気を裂く音が近づいてきた。

「折紙ぃーー!!無事なの!?!!」

大声を上げながら砕けた壁から突入してきたのは隊長の日下部だった。

因みに、やや来るのが遅かったのは、《プリンセス》の消失（ロスト）の確認と、上層部との交渉に手間取っていたからである。

「ハッ!?やっぱりシン様!!……じゃなくて、えーと、その…」

「よお、遼子ちゃん。元気してたか？」

「えっ……？」
　慌ただしく来たものの、士道の姿に動揺を隠せない日下部だったが、士道の気さくな態度に呆然としてしまう。
「あの、私のこと覚えて――――」
「それじゃ折紙のこと頼むわ、じゃあな」
「――うぇ!?お、折紙！大丈夫!!?」
　士道は抱えていた折紙を手早く日下部に渡す。為されるがまま日下部は折紙を受け止め、傷だらけのその姿に驚きを隠せなかった。
　しかし、よく見ると深手を負ってる様子もなく、すやすやと寝息を発てる折紙に、安堵の息をもらした。
「あの、すみませんが我々と一緒に――――って、いない？」
　折紙の無事を確認して、顔を上げるとそこにはもう士道の姿は影も形もなかった。そう遠くにいける時間も無い筈なのに、近くに気配すら感じられない。
「シン様、覚えててくれたんだ…」
　日下部が士道もといシンに会ったのは一度きり。溜まりにたまった日頃の鬱憤を晴らすため、ボーナスを使いきって夜街で大盤振る舞いをしたかつての日に、ホストクラブで一回接客して貰っただけだった。

まあ、その一回で日下部はシンに夢中になってしまったのだが。

激務と金欠を乗り越えて、次のボーナス支給日に店に行った時、シンは既にいなかった。そのため、彼女にとっては一回切りの伝説のような存在だったのだ。まさかその一回で名前を覚えられていたとは、日下部は夢にも思わなかった。

そんな思い出を振り返りながら呆然とする日下部とその腕で幸せそうに眠る折紙を残し、士道は壊れかけの校舎から去っていったのだった。

† † †

その頃、空中戦艦フラクシナスの艦橋では、司令官である琴里がうんうんと頭を悩ませていた。悩みの種は勿論兄の士道のことである。

「士道の過去について解らないことが多すぎる……これは徹底的に調べ上げるしかないわね」

「お任せ下さい司令！この神無月、士道くんとの出会いから彼が巻き起こした伝説まで、事細かに説明致しましょう！」

「んー、ちょっと不安だけど今は少しでも情報が欲しいわね。いいでしょう、話しなさい」

勢いのある神無月の提案に、悩みながらも琴里はゴーサインを出す。
だがそこに待ったをかけた人物がいた。士道のことなら誰にも譲らない女、村雨令音である。
「シンのあの性格を考えれば最適解はひとつ。本人に語ってもらうのがいいだろう」
「呼んだか？」
「士道？！いつの間に…」
何処からともなく現れた士道に琴里を筆頭に一同が驚く。神出鬼没の伊達ワル……という訳でもなく、ただ単に令音が転送してフラクシナスに回収し、その足で艦橋まで来ただけの話なのだが。
士道がユーモアを交えた大言壮語は吐けど、細やかな嘘を吐く性格ではないのを理解していた琴里は、令音の助言に肖ることにした。
「じゃあ士道、教えてちょうだい。私の知らない貴方の過去のことを。ね？」
琴里は視線を一度落としてから、真剣な顔で士道に訊ねた。
義妹の真剣さを感じ取った士道は、珍しくあの不敵な笑みを消して、キリッとした真面目な顔になる。
「いいぜ、教えてやろう。俺という生き字引の引き方をな」
尚、言ってることは何時もと変わらなかった模様。

†　†　†

――――昔話をしよう。少年が青年になるまでの……五河士道という男の子が、シンという漢となり、再び五河士道という漢になるまでの話を。

夏の始まり、5年前の7月の終わりに。少年はソレに出逢った…出逢ってしまったのだ。彼の運命を変え、自らの導きとなる一冊の本へと。

その本の名は〝メンズナックル〟。伊達ワルを志す漢の聖書（バイブル）だ。

そして運命の日を迎える。8月3日、その日に何が起こったのかを彼は今では断片的にしか覚えていない。

燃え盛る街。泣きじゃくる妹。空に浮かぶ輝き。絶望に沈む白銀の髪をした少女。

そして■■■■■■との邂逅。

■■■■■■は今日という日の彼の記憶を封印した。

その影響で彼の自我は、一時的にではあるが揺らいでしまった。そこまでは■■■■■も想定しており、ただちに問題が起こることもないと高を括っていたのだ。

思春期の少年の精神に影響を及ぼす程の力を持ったその本の存在を彼女は知らなかった。メンズナックルという漢の導（しるべ）の存在を。

本来ならばそれは少年にとって一時的なブームにしかならない筈だった。時が経てば薄れていき、思い返せば恥ずかしくなる、そんな思い出になる筈だった。

不安定になった自我が元に戻ろうとする際に、彼の心に刻まれていた不完全な伊達ワルの精神が融合し、彼は完全な伊達ワルの誇りを持った漢として生まれ変わってしまったのだ。

それは■■■■■にとって想定外の出来事となる。だが最大の想定外はその直後に起こった。

『寂しいけど今日はこれでお別れだ。また会いに来るよ、必ずね…』

『伊達ワル・マイスターはただ君臨するのみ』

『は…？いったい何を言い出すんだい、シｎ――――』

言葉の先は紡がれなかった。いや、彼の唇が■■■■■の唇を塞いでいたために、紡げなかったのだ。

朧気な意識の中でも彼は、熱く情熱的に、濃艶で情欲的に、その唇を貪り尽くした。

それが彼の初めてで、女というモノの入り口を知った瞬間だった。そして流れ込む■■■■■の一部に、彼は己の使命を半端に思い出したのだ。

女に愛を注ぎ、愛されることで、女から何か大切なモノを受けとるという、自らの存在理由を魂から喚び起こす。

逃げ帰るように■■■■■がその場から消え去っても、彼は止まらず衝動のままに走り出した。

泪(なみだ)に溺れる赤を慰めて、燃え上がる焔を奪い鎮めた。

絶望に堕ちそうな白銀を抱き締め、己が存在を刻み、心を預かった。

そうして彼の意識がはっきりと戻る頃には全てが終わっていた。

これが8月3日、大火災の起きた天宮市における彼の記憶だ。

それからは早かった。彼は「やりたいことが見つかった」と高校休学の意思を義両親に伝えた。それを告げられた時、彼の両親はとても驚いたが、きっと災害に巻き込まれたショックでそうなったのだろうと納得。

自分達が家をあけがちなこともあり、まだ幼かった琴里の面倒を見ることを条件に、休学を承諾したのだ。

自分のすべきこと、その答えは彼を変えたあの本に有った。女を愛し愛される究極の境地……即ち、ホストに為ること。

――そうして彼は、夜の世界へと脚を踏み入れた。

だが、そう上手くはいかなかった。まだ伊達ワルに目覚めたばかりの彼に非情な現実が降りかかる。

『俺をここで働かせてください！』

『帰んなー・ここはガキの来るトコじゃねーんだよ』

彼は門前払いを食らった。それもその筈、この時の彼はまだ１６歳の少年でしか無かったのだ。そこはホストクラブ、大人たちの饗宴の場は彼などに用はなく、夜の街は彼を受け入れることなどない。

来る日も来る日も、何軒も店を回り頭を下げて頼み込んだが、彼を雇ってくれる店は一軒も無かった。

しかし、それでも彼は諦めなかった。自分が思ったのなら貫き通す。幼いながらもそこには伊達ワルの精神が宿っていたからだ。

そんなある日、彼はひとりの人物に出逢う。

『あら、可愛い子。こんなところで何してるの？こんな時間まで出歩いてちゃダメですよ』

『…貴方は?』
『私はカンナ。この先のオカマバーで働いてます。ここは君みたいな若い子がくる場所じゃないんだ』
『そうかも知れないですね……でも、俺はやるべきことがあるので』
あまりにも真剣な彼の表情に、カンナと名乗るオカマは何やら事情があるのだと察した。そして気になったカンナは彼の話を聞くことにした。彼は事情を話し、カンナは黙ってそれを聞き続ける。
彼の話の意図も理由も理解したとは言いがたかったが、それでもカンナは彼が嘘を吐いているようには見えなかった。
『今からいう住所の店に行ってみてください。私の名前を出せば話くらいは聞いてもらえるでしょう』
『え、いいんですか?』
『やるべきことがあるのでしょう?なら使えるものは何でも使っとくべきですよ。こんなオカマでもね』
『カンナさん…恩にきます!』
カンナから住所と店の名前を聞くと、彼はすぐに駆け出してその住所に向かおうとする。しかし、振り返って一言だけ訊ねた。

『どうして見ず知らずの俺によくしてくれるんですか？』
『その眼が気に入ったから…ですかね。さあ、行きなさい！』
『ありがとうございます…！カンナさん、また必ず…会いましょう！』
カンナは走り行く彼の背中を見送った。このカンナこそが現在ラタトクスで副司令を勤める、神無月恭平その人であった。
暫く逢えなくなり、感動の再会を果たすようなような感じだが、この３日後に普通に会う。

彼は教えてもらった店に辿り着き、カンナから紹介されたという話をすると、まだ開店前の店の中まで入れてもらえた。本当に話を聞いてもらえることになったのだ。
『それで、何しにきたの君？』
『俺をこの店で雇ってください』
『いや無理っしょ。いくらカンナさんの口添えとは言え、高校生はちょっとね…』
『そこを何とかお願いします！それに高校なら行ってません！』
『あんね、高校いってようがいってまいが、無理なモンは無理なの。法律って知ってる？ガキは働かせらんねえの！』
だが結果は変わらない。かのように見えた、ある男が現れるまでは。

『何を騒いでんだ？』
『あ、先輩！すいません、直ぐに追い出すんで！おい、わかったらさっさと帰れ！』
『まあ待てよ。おいお前、なんでこの店で働きたいんだ？』
『ホストに為るためです…！』
『お前が想像してるほどホストってのは甘い世界じゃないかも知れないぜ。華やかな裏には泥にまみれることもあるし、楽しいだけの仕事じゃねえ。モテたいからってんなら辞めとけ、ホストだからモテるんじゃない。ホストで在ることが出来るからモテるんだ』
先輩と呼ばれたその男は、その店のナンバーワンホストだった。それどころが天宮の夜の街でナンバーワンとも言われていたカリスマホストだ。そんな男の重みのある言葉が彼にのしかかる。
『それでも俺はホストにならなきゃいけないんです』
『なんでそこまでホストに為りたい？』
『それが……俺の生きる理由だから…！』
男は彼の中に光る本物を見た。こいつは何かを持っている、と。
『面白い…採用だ』
『ええ？！まずいですよ先輩！サツにバレたらしょっぴかれちゃいますよ！』

『解ってる。おい、お前。今いくつだ』
『１６です』
『なら１８になるまでは雑用兼ボーイだ。そんで毎回２２時には帰す。地味な下働きを二年間…耐えられるか？』
『勿論、やります！ホストに為るためならなんだって！』
『成功したいなら　やるか、やるか　だぜ』

こうして彼は昼間は琴里の面倒を見ながら家事を完璧にこなし、夜はボーイとして働きながら漢を磨き続けた。
カンナからは夜の街の生き方を教わり、彼は夜街を己の庭の如く歩けるようになった。
メンズナックルを読み続け、伊達ワル漢としての知識を頭に叩き込み、すらすらと人を惹き付ける台詞を吐けるようになった。
そした彼を見初めたあの先輩からは――――
『いい女の条件って知ってるかい？それは、俺が「いい女」だと思うかどうか』
――――女とは何かを説かれ、挑む相手を知った。

『ホストが売れる方法を教えてやる。まず出勤して、女性の隣に座って、最後にウインクをする。簡単だろ？』

――――ホストとしての仕事のいろはを聴き、勤めを理解した。

『ＮＯが言えないヤツのＹＥＳに価値はない』

――――漢としての価値観を魅せられ、必死に同じ視点を得ようとした。

『俺来た道戻らないから、覚える必要ない。自分の来た道突き進むだけだから』

――――己の貫き方を感じ取り、己を貫き通す心を鍛えた。

そうして多くを知り、学び、時は流れ行く。

彼の１８歳の誕生日前日に彼は先輩に呼び出された。

『お前、明日から遂にホストとしてデビューだな』

『はい、ここまでこれたのは先輩の力添え有ってこそです』

『そんなお前に朗報だ。俺、今日でこの店辞めるから。明日からはナンバーワンの座が空くぜ？』

先輩はいつもの不敵な笑みを浮かべ、嬉しそうに彼に語る。彼は突然の報告にショックを隠しきれなかった。

『ホスト辞めるんですか、先輩…？』

『いや、俺は歌舞伎町へ向かう』

『歌舞伎町……ソレってつまり……』

『ああ、俺は日本一のホストに、いや…俺は神に為る』

『俺、応援しますよ。それがせめてもの…』

『いらない。俺、ナンバーワンの為り方以外知らないし。だからお前はお前の路（みち）を行け。それがお前に出来る一番の恩返しだ』

『…はい！』

先輩は止まらなかった。更に上へ、自らを高めるため、広い世界へと旅立つのだ。

愛を求める彼と、頂点を極める先輩。ふたりの路は此処で分かたれたが、彼が先輩から受け継いだモノは喪（うしな）われることなどない。

二年の月日を過ごし、伊達ワルと、夜の街での経験と敬愛する先輩から託された想いを胸に、遂に彼は完成した。

そして彼の１８歳の誕生日。ひとりのホストが産声を上げた。
彼の源氏名は〝シン〟。魂から滲み出た真名とも言える彼の新しい名前だ。
伝説が今、幕を開けようとしていた――――

第８話　この瞬間、世界の中心は間違いなく俺

彼が〝シン〟となってから三ヶ月の時が過ぎた。シンは店のナンバーワンホストに為っていた。

女を口説くために生まれたと言っても過言ではない漢は、店を訪れる姫――ホスト業界でのお客様のことである――に愛を注ぎ極上の瞬間（ときめき）を提供し、彼女らが持ってきた大切なもの（お金）を受け取り続けた。

『一身上の都合によりこの世界のトップ貰います』

ホストに為った最初の一言がこれだった。それは妄言ではない。

瞬く間に売り上げを伸ばしていき、一月目の締め日には上位に食い込み、二月目の時にはトップと為っており…そして三月目、再びトップの業績を上げた彼は紛れもなくナンバーワンに登り詰めたのだ。

シンの快進撃は止まらず、その名は店だけには留まらない。天宮の夜の街に彼の名と衝撃が駆け巡り、半年もしないうちに彼の名を知らない者はいなくなっていた。

誰が言い始めたのかはわからないが、彼は二つ名とも言える別の名で呼ばれるようになる。彗星の如く夜の街に現れた新星、突如として君臨した夜ノ都ノ神…《ヤトガミ》

と。

現フラクシナスの乗組員と出会ったのもこの時期からだった。

女性陣である椎崎、箕輪は当然姫として店に来たことで知り合った。だが二人ともシンの担当の姫に連れて来られただけで、別のホストが担当に付き直接は接客を受けていなかった。相談に乗ったり悩みを解消したりはしたが、シンとしては貢がれることはなかったのだ。

尚、ホスト界隈では店の中で他のホストから姫を奪うことは御法度、犯してはならない禁忌（タブー）なのである。

フィリピンパブに通い詰めていた社長（シャチョサン）こと幹本の耳には噂が届き、とあるフィリピーナの嬢を巡るトラブルをシンが解決したことにより交流を持つ。

早すぎた倦怠期（バッドマリッジ）川越は元嫁のひとりがシンに貢いでおり、それを聞き付け乗り込んできた川越とシンが愛を語らう恋愛勝負を行った。勝者は云わずもがなである。

次元を超える者（ディメンションブレイカー）中津川とは、ギャルゲのイベントにて、どちらが早く女の子を攻略できるかというコーナーで、特別ゲストとして招待されたシンと直接対決を果たした。二次元限定ではあるが互角の戦いを繰り広げたふたりは、強敵と書いて友と呼ぶ関係になった。

因みに令音はホストに為った初日からの極太客だった。極太客とは業界用語で、金払いのめちゃくちゃいいお得意様のことである。

勢いに乗るシンはこのまま天宮のナンバーワンホストの座へと駆け昇っていく。だがそのシンの前に立ち塞がる者がいたのだ。

『まさか君がこんなとこで、こんなことをやってるなんてね。なら私が君の望みを止めてみせよう』

それは先輩の居なくなった天宮で直ぐ様ナンバーワンと為った、夜ノ魔術師《ウィザード》と喚ばれるホストだ。

その源氏名は〝アイク〟。異邦より突如現れたにも関わらず、圧倒的なカリスマを持って名を上げた新人ホストであった。

ツンツンと逆立った白い髪に蒼玉（サファイアブルー）色の瞳、日本人には無い美しさを備えた容姿と独特の威圧感にも似た掴み所のない雰囲気に、女性たちは直ぐ様虜になった。

見た目三十代というホストにしては遅咲きの華は、新参ながら大物のオーラを纏って夜の街に咲き誇っていたのだ。

『メタファーの魔術師が魅せる艶密な佇まい』

アイクもまた、メンズナックルに魅せられし伊達ワル漢だったのだ。ふたりの伊達ワ

ルはホストとして衝突を始める。
天宮の夜を舞台に二人は常に凌ぎを削っていた。その壮絶な戦いは正に戦争、夜街は戦場と化していた。
担当する姫の数も太さもほぼ互角、だが夜都神(ヤトガミ)と魔術師(ウイザード)の対決はほんの僅かにアイクへ軍配が上がっていた。
『いや、悪いね。今回も私の勝ちのようだ』
『くっ……』
シンがアイクに半歩及ばなかった理由。それはシンが酒を一滴も呑めなかったからだ。
いくら伊達ワルを極めしシンといえど、法律のいう枷からは逃れられない。無論、無視することなど容易だが、法を犯して売り上げを伸ばすなど、ホストとして言語道断である。
つまり、アイクは自分が呑んだ分だけシンよりも稼げていたのだ。この一滴が勝敗を分けていたが、周囲も、そしてアイク自身も己が勝っているとは思っていなかった。
『君とは最高の状態で戦いたい。その上で叩き潰させてもらうよ』
『その余裕の面、必ず歪ませてやるぜ、色男…』
『楽しみだ、さあ戦争を続けるとしよう。これからもね』

この酒で酒を洗う戦争は二年もの間、続いていく。

そして迎えたシンの二十歳（はたち）の誕生日。アルコールの解禁、即ちここからが本当の勝負。

『俺の誕生を祝って…乾杯』

『『乾杯――――!!』』

彼の誕生を祝うため、店には老若男女問わず多くの人が訪れた。記念すべき日を飾るように、彼の為だけに次々と酒を入れていった。

シンは祝いにきてくれた全ての人と杯を交わす。更に彼のグラスに酒が残ることはなく、彼が呑めると思えばその分だけ酒が注がれ、消えていった。

ここは饗宴の場、ホストクラブ。酒は只グラスに注がれるだけな筈がなかった。

シャンパンタワーがドバイの高層ビル郡のように積み上げられていき、ドン・ペリニヨンが湯水のように開いていく。

ドンペリの白だけでなく、ロゼであるピンドンが、さらにドリペリ黒が次々と開けられていき、高級品であるＰ２やＰ３に、更にはドンペリゴールドすら飛ぶように売れてゆく。

当然店の在庫は直ぐに尽きてしまう。問屋や近隣の店から買い取っても尚足りない

程に酒が流れ行き、巨額の金が渦巻く狂喜の世界が広がっていく。
人々は後にこの出来事を振り返り、こう呼んだ……ドンペリ（ドンペリオン）の反逆の日と。
『この瞬間、世界の中心は間違いなく俺』
シンはこの夜だけで、ライバルであったアイクの一月分の倍の売上を稼ぎ、圧倒的な差をつけて完勝した。この日、シンは名実ともに、天宮ナンバーワンホストに為ったのだ。

――――この日を最期にシンはホスト界から姿を消した。ヤトガミの名はドンペリベリオンと共に伝説となり、天宮の夜の街に語り継がれていく…

†　†　†

「とまあ、こんな感じのことがあったのさ。そんでもって復学して今に至る。おしまい」
自らの過去を語っていた土道は、パンパンと手を叩いて軽い調子で話を締めた。
琴里は疲れた表情でこめかみに手を添えている。そして大きなため息を吐いたあと、土道に対して訝しげに訊ねた。
「ちょっと待ってもらっていい？色々と突っ込みたいのは山々なんだけど、まずひとつ。

なんでそこまで入れ込んでたホストを辞めたの…？」
「実は途中から薄々気づいてはいたんだ。俺のやるべきことってこれじゃないのかも知れないってな。それで先輩が居た頂点まで登り詰めれば何か見えてくるかも知れん、そう思って続けてたんだが……いざ見えた景色は違うものだったわけさ」
　士道は少しだけ寂しいそうな表情を浮かべたが、すぐにニヒルな口で自傷的に笑い飛ばした。
　僅かに哀愁を見せた兄に対して琴里は憂いを覚え、少しだけ優しくなった口調で続けて訊ねる。
「それじゃあ、士道のやるべきことって何だったのよ？」
「それはな……女（お前）を愛し、愛されることで、大切なものモノをいただくことさ」
　士道はバッと腕を伸ばすと琴里の頬に優しく添えて、眼を見詰めてキザな台詞を真正面から投げ掛ける。不意打ちでそれを喰らった琴里はドキリとさせられ、胸の奥から沸き上がる熱に浮かされた。
　頬を上気させながら惚けていた琴里だったが、周囲から生暖かい目で見守られていることに気付くと、「コホンっ」と、わざとらしく咳払いをして仕切り直す。
「そ、そう！……じゃあ二十歳の誕生日から復学するまでの一年間は何してたわけ？」
「女を口説きながらブラブラ～っと。まあ女の方が俺に寄って来てたってのは言わなく

てもわかるな？」
「はあ。呆れた……」
士道が当たり前のように言った答えに琴里は呆れてしまった。その一端は先程のチョロ過ぎる自分にもあると解っていたので尚更だ。
「さて、俺は帰るとするか。琴里、夕飯何がいい？」
「え、あー？ハンバーグかなぁ…」
「了解、んじゃ遅くなんねえうちに帰ってこいよ」
「はーい」
話し終えて満足した士道は何気ない会話をして去っていく。その雰囲気に流され思わず返事をしてしまった琴里は、我にかえって恥ずかしがっていた。
フラクシナスの艦橋から去る士道の後ろをさも当然のように令音が歩いていったことに突っ込む者は最早いなかった。

士道が語った衝撃の過去と、自由奔放な態度に振り回され続けた一同が、士道に話を聞いた当初の目的を忘れてしまったのは仕方のないことだろう。

† † †

表向きには空間震の被害ということで臨時休校となった来禅高校。
その校門前に一台の真っ赤なオープンカーがハザードランプを点滅させて停まった。
そして降りてくるサングラスをかけた漢は――――
「早く着きすぎたか。いや、世界の方が遅すぎるんだな」
――――勿論、五河士道である。士道はサングラスをダッシュボードにしまうと、崩れた校舎に向かって悠々と歩き始めた。
†　†　†
何故こんなところに一人で現れたのか。そんな疑問は四六時中、空から士道を監視しているフラクシナスの乗組員にも広がっていた。
この監視は、昨日士道が霊力を発現したことを考慮したラタトクスとして当然の処置である。決してどこぞの解析官の趣味ではない。
「士道、なんでわざわざ休みになった学校に…？てかあの車何!?私見たことないんだけど…！」
「あ、アレ！フェラーリの４８８ＧＴＢじゃないですか!?」
一緒に暮らしていた筈の琴里が見たこともないような車に驚いていると、その車種を見ただけで特定した中津川がさらに大きな驚きの声を上げる。

この段階で琴里は嫌な予感がとまらなかったが、一応中津川に訊ねた。
「……もしかして、高いの…？」
「高いなんてもんじゃないですよ、司令！家買えちゃうくらいのもう超超々高級車ですって！」
琴里の顔色はどんどんと青ざめていき、額には冷や汗が滲む。
前の方で「レボリューション！」とか言っている中津川をスルーしながら、琴里は震えそうになる手でスマホを取り出して土道に電話をかけた。
「もしもし、土道！聞こえる!?」
「〝俺だ〟」
「俺だ。じゃないわよ！その車どうしたの!!今モニターしてるけど、めっちゃ高いって聞いたわよ！いつ買ったの!!?」
突然の電話で、更に電話口の先でキャンキャンと叫ぶ声に、スマホを耳から離して土道は一瞬顔をしかめる。だが直ぐに余裕の表情に戻ってスマホを耳に当てた。
「〝これは貰った。勿論、買えないこともないがな〟」
「貰っ……」
「私が買って上げたんだ。格好いいだろう？シンにピッタリの車だ」
「やっぱりそうか……」

うっとりとしながらも周囲へのドヤ顔をやめない令音に、琴里は頭を抱えながら大きなため息を吐いた。

私の右腕はどうしてこうなってしまったのだろうか、と。

†　†　†

壊れた校舎まで辿り着いた士道は、まだ比較的綺麗な壁に向かって腕を伸ばして手を着いた。

偶然かはたまた狙ってやったのか、そこは昨日十香と士道が語らった教室の真下だった。

士道の不可解な行動を見た琴里がすかさず通信を入れた。その届き先は先程の琴里の指示でしぶしぶつけた士道のインカムである。

「〝何してんのよ士道？〟」

「俺クラスになると逆算して先に壁ドン。ココに女のほうから来る」

「はあ？あんたふざけたこと言ってんじゃ――――」

なんとも冗談染みた発言だが…伊達ワルを極めし士道が言った場合はその限りではない。

琴里の台詞が終わるより前に突如として、士道の腕の中が光りだし、そこにひとりの少女が出現する。

きらびやかな紫の鎧衣裳（アーマードレス）に美しい宵闇色の髪。精霊《プリンセス》こと、十香が現れたのだ。

†　†　†

「霊波照合！プリンセスの静粛現界を確認しました！」

「そんなの見れば解るわよ！問題はなんでそのプリンセスが士道の腕の中に収まったのかってことよ!!」

突然事態に琴里は動揺し、思わず機器の並ぶデスクを叩いて叫んでしまった。

落ち着きのある司令官でいるべきなのに、士道が絡むとどうもこうなってしまいがちだ。

けれど分かってあげてほしい。常にフルスロットルな伊達ワル士道を相手にしているのだから、ちょっとヒステリックになってしまうのも仕方ないことなのだ。

「ったくなんなのよ…！士道には解ってたっていうの!?」

「〝まあ、ＬＩＮＥで待ち合わせしてたからな〟」

「いや、ＬＩＮＥ繋がるんかい!!」
偶然にも繋がってしまった通信から飛び込む士道のトンデモ発言にも、しっかりとツッコミを入れられる辺りかなり適応出来ているのではないだろうか。

†　†　†

「ち、近いなシドー……何やらむず痒いではないか」
士道の腕の中で十香は頬を染めながら、しどろもどろに呟く。
そんなしおらしい十香の姿をじっくり眺めた士道は、顔をぐっと近付けて彼女の耳元で吐息と共に囁いた。
「さあ、俺たちの戦争（デート）を始めよう」

第9話　伊達ワルに性別は関係ない！

　士道の腕の中、耳元で囁やかれた十香は、背筋をぞくりと走る快感に身を震わせてから、訝しげに士道に訊ねる。
「シドー、デェトとはなんだ？」
「お前が俺に酔いしれることさ。まあ、改めて言うと当然すぎてアクビがでちまうぜ」
「シドーに酔う？その身には酒精でも宿っているのか？シドーの言うことは難しいな…」
　十香は士道の言うことの意味を真剣に考え始めた。無論答えは出ないだろう。
　士道は壁ドンに飽きたのかはたまた十香が考えるのを邪魔しないためか、壁から離れて満足げに腕を組んで立っていた。
　十香は頭がクエスチョンマークで満たされるより早く、考えるのをアッサリとやめ士道の方へと向き直した。
「ん？昨日とは装いが違うなシドーよ！なんというか、獣のようだぞ！」
　十香が気が付いたように、今日の士道の格好はいつもの全身黒ずくめの制服ではない。

ダメージ加工のされたデニムを履き、上にはド派手なヒョウ柄のシャツを羽織る。そして首から下げるのは猛獣を繋ぎ止める大きな鎖のネックレスだった。

溢れ出過ぎた野生を表現した士道は、ワイルドに歯を見せながら笑う。

「俺はもうすでに本物のヒョウなのかも知れない」

そうかも知れない。士道がそう思うならそうなのだろう、士道の中では。

士道の発言の意図が解らない十香は、それとは別にひとつ疑問を抱いた。

これまで十香が目にしてきた人間、つまりＡＳＴは皆同じような格好をしていた。そして昨日初めて出会ったＡＳＴ以外の人間である士道は、彼女らとは違う格好をしていたのだ。では何故……

「何故シドーは服装を変えるのだ？」

「それがファッションってもんなのさ。俺が俺であることを表す最高の手段だ」

またしても士道が可笑しなことを言っている……とは言い難いだろう、今回に関しては。

服装とは古来より身分を表す物として重宝されてきた。偉い者は豪華な衣服を纏い、権威を形にしてきたのだ。

身分を表すという部分は現代においても変わらない。特に制服と呼ばれるものはそれが顕著だ。例えば学生服であればその学校に籍を置くものとして最もわかりやすい

証となり、警官も消防士も救急隊員も、全て服装を見ればその人がどんな職に就いているかが一目でわかるのだ。

では私服と呼ばれる部類の服は何を表すのか。それは先程士道が言ったように、自分を示すのだ。

流行りに乗ってみるのもいいだろう、誰とも被りたくないと個性を爆発させるのもいいだろう。お金を存分に使うも良し、無頓着に着飾らないのもまた良いのだ。それらは全てその人がこれで良いと思って着ているのだから。

服装には人それぞれの想いが乗っているのだ。装いにはその人の想いが浮かび上がるのだ。

服なんかに拘りなんてない、と思っている人もいるだろうが、それもまた〝拘りがない〟という想いが乗っかっている何よりの証拠だろう。

人は今日も服を着る。明日も明後日も、服を着るのだ。時に自らの証明に。ある時は自らの想いを込めて。服を楽しもう、それが人に与えられた自由だ――――

さて、話が大きく脱線してしまったが、十香は士道の言葉に疑問符がそのまま顔に出たような表情になっていた。

「ふぁっしょん…？シドーのそれがふぁっしょんなのか」

「俺の隠しきれない伊達ワルが滲み出てるだろ？」
「お？おお！そうだ、だてわるだ！そのだてわる、とやらを教えてくれると言っていたではないか！なあシドー？」
「俺だけ見てれば必ず解る。ファッションも、伊達ワルもな」
　自信に溢れた士道の言葉には、よくわかっていない十香ですら本当に解る気がするような凄みがあった。
「さあいこうぜ十香」
「行く？何処かに移動するのか？もしや、それがデェトなのか？」
「あながち間違っちゃいない。でもそれだけで終わらないのが、制御不能の止まらぬ伊達ワルスピリッツ」
「デェトでだてわるなのか……奥深いな」
　微妙に噛み合わない会話を交わしながら二人は車へと向かって歩いていく。
　あのオープンカーの前に歩いてきた士道は、助手席のドアを開け紳士的な振る舞いで十香をエスコートしていく。
「こちらへどうぞ、プリンセス。ヘヴン行き快速急行、発車します」
　どこまで本気なのかわからない士道の冗談に、十香はなされるがままおずおずとシートに座っていく。

ベルトを締めて、ドアまで閉めてくれる紳士っぷりはあの傲慢ちきな漢とは思えないが、こういった細やかな気遣いができるからこそ士道は激モテの道を走れているのだろう。

そうして士道も運転席に乗り込み、二人を乗せた車は天宮の街へと走り出した。

† † †

車を走らせること数十分、車内では会話が恙無く盛り上がっており、十香の楽しそうな声が響いていた。

そんな十香の精神状態を空中戦艦フラクシナスの艦橋ではしっかりとモニタリングしていた。

「ご機嫌メーター緩やかに上昇。精神状態も安定しています」

「なかなかいい走りだし、流石は士道。おまけに話の流れで大半の人間が精霊に敵意を持ってないってことも教え込むなんて…伊達にホストはやってなかったってわけね」

モニターに表示されるグラフを見ながら、琴里は軽く感心していた。義兄がホストだったと聞かされたときは驚いてしまったが、こうもいい調子で結果が出るならそれは想定外の収穫となる。

「それで士道は何処に向かってるの？」
「ＡＩによる予測では８５パーセントの確率で国道沿いの高級ブティックと出ていますね」
「ふぅん。因みに残りの１５パーセントは？」
「１０パーセントでブティックホテル、５パーセントでファッションセンターし○むらと予測されています」
　幹本の報告に琴里は黙り込んでしまう。その理由は語るまい。
　だがそんな琴里をおいてフラクシナスの乗組員たちは好き勝手に話を始めていた。
「しま○らも悪く無いんですけどね、安くて品揃えもいいし」
「箕輪さん○まむらとか行くんですね。保護観察中なのに」
「保護観察関係無いでしょッ!!」
　弄る椎崎に箕輪が冗談混じりに怒鳴り込んでたり。
「初デートで初手ホテルとかトンだビーストですね。俺でもしませんよ」
「確かに。でも士道くんなら、なんとかしてしまいそうじゃ有りませんか？」
「いや副司令、さすがにそれは……無いとも言えないのか…？あのお堅いアイツすら簡単に手懐けてたし…　」
「シンは簡単にホテルに行ったりしない。いいね？」

「でも士道くんなら――」
「い・い・ね？」
「……はい」
アダルティな話をしていた川越と神無月が令音に叱られたりしていた。
全くもって弛みきっている。琴里はそう思わずにはいられない。
無論、皆職務を全うし計器から目を離すことはないが、最前線に立つのはあの伊達ワル士道。
ほとんど丸投げにしても問題ないのではと考えてしまったとしても、現状のデータはそれを裏付けする証拠にしかならないのだ。
「士道くんの車が高級ブティックの駐車場に入りました！」
「予測通りか。フラクシナスＡＩも士道の行動パターンをなかなか読めてきたようね。さあデート本番よ、ちょっとは気を引き締めてかかりなさい！」
琴里の発した号令に、一同は「はい！」と揃った返事を返す。
乗組員たちの士気は決して落ちてはいなかった。精霊を救うべく集った者たちは、琴里への忠誠を無くしてなどいない。
精霊と伊達ワルの対決に介入すべく、今フラクシナスの底力が試される。

†　†　†

「いらっしゃいま……せ？」

店の自動ドアが開いたと同時に甲高い挨拶をした女性店員は、一瞬のうちに困惑と衝撃に支配される。

それも当然。ド派手を通りすぎて目に痛いヒョウ柄の男と姫騎士のような紫のコスプレイヤーのカップルが突然襲来…もとい来店してきたのだから。

店員は直感した。このお客様（強敵）との接客（バトル）はただでは済まない、と。

「おお！服が…服がいっぱいだぞシドー！」

「ここは自由の楽園。人は天使にも堕天使にも為れる」

「よくわからんが凄いな！お？アレはなんだ？アレも、こっちも！」

見た渡す限りの服、服、服。十香は初めてみる光景に不思議と心踊らされた。そして無邪気な子供のように店内を駆け回り始めたのだ。士道は微笑ましいものをみる目でそれを眺めていた。

その時、店員はじっくりと士道たちを観察し、ひとつの推測を立てていた。

一見、ただただイタイだけに見える男の方はよく見れば、ブランド品のアイテムでしっかりと身を固めている。ボトムのポケットからはみ出る財布も高級ブランドの逸

品だ。

そしてコスプレ美少女の衣裳はどのパーツも本物と言われても違和感の無いほど完成度の高い物に見える。まあなんのコスプレかはわからないが。

持っている…！このカップルは間違いなく持っている…ッ！この店に相応しいだけの、金…ッッ!!

有名な高級店だからとたまに来る――とはいえ駐車場付の店舗であるため少ない――冷やかしのチンピラカップルとは確実に違う。自らの手腕次第で買わせることができる、この高価な逸品を。

ベテランである店員は考える。ブランド品に目が効きそうな男の方は難易度が高い。身に纏う雰囲気が有名なスポーツ選手などの勝負師のオーラに似ている……この男は間違いなく本物を解っているだろうし、拘りも強そうだ。

だが、少女の方はどうだ。まるで初めて洋服を買いに来た子供のようなはしゃぎよう…紛れもなく素人ではないか。変わった子ではあるようだが、たかが小娘。

１８からアパレル業界に勤め続けて、はや幾年。この磨き上げた話術を持ってすればアイテムをひとつ買わせることなど容易い。それどころが売れ残りの在庫処分をしてもらうことだって出来る筈だ、と。

店員は十香に狙いを定め、狩人のように虎視眈々と獲物の隙をひっそりと息を潜めて

待ち続ける。
だが狩人はそのせいで気付いていなかった。自らをしっかりと捕捉する猛獣の視線に……

†　†　†

「十香ちゃん、店内を物色中。初めての服屋に興奮気味です」
「特に問題はなさそうね……ん、ちょっと待って！」
十香の精神状態をモニタリングしていたフラクシナスだったが、琴里がその中の不審な点に気付き声を上げる。
「ご機嫌メーターは高いままなのに、不快指数が上がってる…？感情値は…どうしてこんなに困惑してるのよ」
不可解な十香の精神状態に琴里は首を傾げる。様子を見るに士道が嫌になったわけでも、この場所が嫌な訳でもなさそうだ。
そしてその理由は直ぐに明かされる。十香は士道のもとへとてとて歩き始めて、不安げな顔で訊ねた。
「〝シドー…服がありすぎて、どうすればよいのかわからんぞ……これがだてわるなの

か?どうすればシドーのようなだてわるになる?〃」
「そうか…!十香ちゃんにとってはこれが初めての買い物、だからこそ楽しい。でもどれも選べなくて悩んでいたんだ!」
「感情値に大きな変化が。お!選択肢出ます!」
「何ですって!?士道、ちょっと待ちなさい!今度こそあんたの為の選択肢が来たわ!」
十香の精神状態の変化を読み取ったフラクシナスのＡＩが久々に選択肢を展開する。ラタトクスの誇る超高性能人工知能が遂に士道の発言の先読みに成功したのだ。

①黒い服を探せ。黒だ、黒。とにかく黒に染まれ。
②赤だけは辞めておけ。アレは俺とシャア専用だ!
③露出しておけばいい、肌色がワイルドさを際立たせる。

「なんかめっちゃ士道っぽくなってるぅ――――っ!!?」
「なんというか…フラクシナスＡＩが士道くんに染まってますね」
「なんでこうなるのよ!どういうこと!?」
ＡＩが提示した選択肢の内容に一同は驚愕し、原因不明の暴走を不思議がっていた。
ただ令音だけは何か納得したような顔をして、「あっ」と一言だけ洩らした。

琴里は令音のその一言を聞き逃しはしなかった。直ぐ様鬼のような形相を浮かべ令音に噛みつく。

「いま〝あっ〟って言ったわよね令音！〝あっ〟って何か知ってるわね！話しなさい!!」

「いや、昨日の一件から少しでもシンのことを知ろうと、盗さ…監視していただろう？それで足しになればと思ってフラクシナスのＡＩの空いていたリソース全てをシンの思考の解析に当てていたんだ。どうやらその影響でＡＩの思考回路がシンに近くなってしまったのだろう」

令音は悪びれた様子もなく、淡々と語っていく。洩らしかけた一言を除けば、理にかなった行動なので琴里は怒るに怒れなくなってしまう。

「まさか、私の育てたＡＩがこれほどシンに似るなんて…フフッ」

「なんでちょっと嬉しそうなのよ！我が子の成長を見守る母親!?」

「まだ母親は早いんじゃないかな、義妹（ことり）ちゃん」

「なに勝手に義姉（あね）面してんの！私は認めないからねっ!!」

気が付けば琴里と令音は小姑と嫁の対立のような会話（コント）を繰り広げていた。本人もいないのに実に勝手なことであるが、これも伊達ワル士道の影響なのだろう。

士道のことで頭がいっぱいな女性ツートップを他所に、神無月を始めとしたフラクシ

ナスの乗組員（クルー）はＡＩの変化を前向きに考えていた。
「ＡＩの思考回路が士道くん寄りに為ったということは、この中に効果的な選択肢があるということになりますかね」
「そうか！それなら②なんていいんじゃないですか？実際十香ちゃんの雰囲気に赤は似合いませんし」
「①も捨てがたいです。士道くんもよく黒い格好してるじゃないですか」
「逆に③もありな気がしてきますよ。なんでもありの士道くんならいけるのでは？」
盛り上がる乗組員たちだったが、そこに冷や水を浴びせるように士道の返事の通信が入る。
「〝どれも微妙だな。伊達ワルの鍛え方が足りん、出直せ〟」
ピシャリと選択肢を一蹴する辛辣な意見だった。だが士道の言葉はそこで終わらず、続けてこう言った。
「〝だが、筋は悪くない。これからも修練に励めば俺に近づける筈だ〟」
①わかりました、ありがとうございます。
士道に返事をするようにモニターにはひとつだけの選択肢が表示される。
「ＡＩと会話が成立してる…!?」
「ＡＩの自立進化って凄いですねぇ。まさか返事まで出来るとは」

「我々も負けていられませんね！」
　驚きこそすれど、その変化を簡単に受け入れてしまう乗組員たち。これがツッコミ不在の恐怖である。
　そのツッコミ役はというと――――
「あなたに跨がせる敷居は家には無いわっ！」
「そんな…！どうして…!!」
――――未だにコントを続けていた。

　ここは空中戦艦フラクシナス。持てる技術の粋を存分に振る舞い、最高司令官五河琴里を中心に精鋭たちを集結させた、秘密結社ラタトクス最高の対精霊部隊である。
　もう一度言おう、精鋭たちを集結させた最高の対精霊部隊である。
　これでいいのかラタトクス……フラクシナスは絶賛迷走中であった。

†　†　†

　フラクシナスの迷走と同時刻。ブティック店内では女性店員が商品を売り付けるべく、十香を狙っていた。

虎視眈々と狙いを定めいたが、ここで絶好の機会が訪れようとしていた。
「シドー…服がありすぎて、どうすればよいのかわからんぞ……これがだてわるなのか？どうすればシドーのようなだてわるになる？」
少女が悩みを見せたのだ。アパレル店員としてこれほどの好機はない。
店員はチラリと訊ねられた士道の方を見る。なんとあの厄介そうな男は俯きながら考え込んでいるように見えるではないか。
返事に困っているのか、話を聞いていなかったのか……とにかく少女の問いに答えず、黙しているだけだった。
今しかないッ！ここが攻め時…ッ！
店員は意を決してふたりの間に割り込んでいった。
「何かお困りでしょうか？」
「おまえに用はない……おい、シドー！聞いているのか!?」
「まあ、そういわずに。きっとお客様のご迷惑にはなりません」
「うーん。確かに害はなさそうだが…なにをどうすれば……」
「それでしたら私がお客様にピッタリな品をご紹介しますよ」
「うむむ。だがシドーがだな……」
「お連れ様は何やらお疲れの様子ですし、少しお時間いただけませんか？」

店員は困惑する十香にかなり強引に迫る。後ろの士道にまだ動きはない。

備(つぶさ)にふたりの関係を精査する店員。この少女は優柔不断な性格とみた。そして、財布を握っているのは後ろの男なのだろう。だが決定権はこの少女にもある…いや、この少女の選択が男の決定になる。そう分析した。導き出される結論は――――

「ささ、こちらをどうぞ。これ、春の新作なんですよ～」

――――押して圧して推しまくる。強引にでも商品を紹介し、流れのままに売り付けることだった。

店員は春物のアイテムを上から下まで、これでもかというくらい十香に紹介していく。小物やバッグに到るまで売りたいものをいいように説明し、どれかひとつでも興味を持たせようと必死に攻め続けた。

「――――なんですよぉ！いいかがですか？これは買いですよ！」

「うう…わからん。さっぱりわからんぞ……！」

ファッションのフの字もわからない十香に、言葉攻めの如く最新鋭のワードを並べていく店員。初めて聞く単語のオンパレードに十香の頭は混乱し、爆発寸前だった。

そして脳裏に過るのは己が信じている唯ひとりの人間のことだ。

「私はただ…シドーのようなだてわるを知りたいだけなのに…」

「だてわる…ああ、伊達ワル。あんな派手好きなだけの野蛮なモノ、貴女のような可愛い

女の子には似合いませんよ。女の子ならもっと――――」

瞬間、背筋が凍てつくような寒気。押し潰されるようなプレッシャーに店員の言葉が止まる。

店員は油の切れたブリキ人形のようにギギギと後ろを振り返った。

そこに居たのはド派手なヒョウ柄シャツの男。威圧感を振り撒く伊達ワル、五河士道だ。

「シドー！」

「違う、それは違うぞ…！」

「も、申し訳ないございませんッ！決してお客様を侮辱するつもりは…」

「そうじゃない。別にあんたが伊達ワルをどう思おうが構わない。バカにしたければすればいいさ。でもひとつだけ間違っていることがある」

震えながら頭を下げようとする店員をさっと手で制し、士道は腕を組ながらカッと目を見開く。そして胸を張って堂々と大きな声で言った。

「伊達ワルに性別は関係ない！」

士道は過ちを犯した店員に、そして迷い戸惑う十香にこの言葉を届ける。

男だから伊達ワルなのではない、伊達ワルだから漢なのだ。と、恐らくは言いたいのであろう。

「十香、ここでのルールは単純だ。選べ、そして纏え。思うがままに、最高の自分を、魅せたい自分を」

「好きなモノを着てよいのか？何も分からぬのだぞ？可笑しなことモノになるのかも知れないぞ？それでいいのか…？」

「関係ない。好きなモノを着るといい。大事なのはどう見られるかじゃない、どう魅せたいかさ。でもただひとつ…恥じるな、装いを誇れ。ファッションに必要なのはそれだけでいい」

　困り惑っていた十香の頭の中がすっきりと晴れ渡っていく。士道の導きによって最初の一歩を踏み出す勇気を貰ったのだ。

　そしてこの言葉が届いたのは十香だけに留まらない。隣で呆然としていた女性店員の耳に、心に届けられる。彼女は士道の言葉によって胸を撃ち抜かれ、頭には走馬灯のように思い出が過ってていった。

　――いつから私は忘れてしまっていたのだろう。この業界に入った時、いや入る前から、私はオシャレが好きで服が大好きだったということを。

　いつから私は変わってしまったのだろう。年月を重ねるごとに責任が増えていき、オシャレが知識となり、ファッションは記号になった。数字だけを気にして、服は売上を

作るための無機質な布へ。店を訪れる客は財布に見えてしまった。
初めはただ大好きな服に携われるだけで良かった。買って貰えなくても、同じオシャレが好きな人と話せるだけで楽しかった。服が売れることより、誰かが笑顔になることが嬉しかった。
そんな筈だったのに……なぜ忘れていたのだろう――――
女性店員の瞳から一筋の涙が零れた。

「ふーむ。これをこうして…これと…!うむ!いい感じだ!」
目の前の少女は楽しそうに服を選んでいる。それはかつての初めて服が好きになった自分を見ているかのようだった。
――ああ、そのワンピースはそれとは合わないのに…!そのアイテムなら、差し色はそれじゃないのに…!!
組み合わせはめちゃくちゃで、サイズ感も色づかいもまるで合っていない。それでも純粋にオシャレを楽しむ女の子がソコにはいた。
「愉しそうだろ?俺はアイツのああいう姿が見たかったんだ」
「はい…とっても楽しそうで、輝いてます。でもあれじゃあ……いえ、私にはもうあの子になにか言う資格なんてないですね」

「そんなことはない」
「え…？」
「好きなんだろ？ファッション。教えてあげたいって顔に書いてあるぜ」
「でもオシャレは自分が着たいものを着るのが一番なんじゃぁ……」
何か言いたげな店員に向かって、片目を閉じて「しぃー」っと人差し指を立てて士道は囁く。
そして言葉を止めると、軽くすかした態度で何処か遠くを見つめて言った。
「数多のセレブに俺の着こなしをパクられたよ」
士道は彼なりの言葉で店員に伝えたのだ。ひたすらに分かりにくくはあるが。
誰かの為にオシャレを教えてあげることは決して　間違いではない、教わった者がそこから自分の中のオシャレを見つけられる、と。
「私…私、彼女を手伝ってきます！あの子の表現したい自分を最大限に引き出せるように!!だから、見ててください。私の…仕事をっ!!」
店員は士道に告げると返事も聞かずに十香に駆け寄っていった。
それはきっと彼女の覚悟の表れだろう。誰に何を言われようと、自分の仕事を全うしオシャレを共に楽しむという、彼女の本当にやりたかったことに対しての、だ。
士道は満足げに微笑むと、腕を組んで壁に寄りかかって待ち続けた。

†　†　†

そしてふたりが土道の前から居なくなってから暫しの時が経つ。
「シドー」と緊張に満ちた声に彼がゆっくりと振り向く。
そこにいたのは紫の鎧衣裳を纏った精霊《プリンセス》などではなかった――――
爽やかな空色のジャケットは春の陽気を感じさせる。
真っ白なフリル付の膝丈ワンピース、だが胸元だけは黒い布地で可愛らしさの中に引き締まりが生まれている。
そしてちょっと差し色。太めのカーキのベルトと、少しだけヒールの高い同じくカーキのブーツが映える。
首元にはピンクゴールドのシンプルな飾りを取り入れ、透き通った白い肌を際立たせる。
春らしさと可愛らしさを抜群に魅せる装い。
――――そこには、オシャレを楽しむひとりの少女の姿があったのだ。

第１０話　来いよ、何処までもクレバーに抱きしめてやる

「〝ありがとうございました～！〟」
「〝世話になったぞ！ではな～！〟」
モニターの向こうでは頭を下げる店員に向かって十香が大きく手を振っている姿が映し出されている。
その格好は先程買った春らしい洋服で、どこからどうみても普通の美少女にしか見えなかった。
くだらないやり取りを終えて、冷静になった琴里は生まれ変わったような十香を見て思ったことを口にしていく。
「霊力がなかったら只の女の子にしか見えないわね」
「それにとびきりの美少女ですからね、隣を歩くのが士道くんじゃなかったらかなり見劣りするでしょう」
「そうね…士道ならなんとかしちゃうのよね…」
琴里は気を落としながら平坦な抑揚で神無月に返事をしていく。士道さえいれば自

分たちがいなくても、精霊をデレさせることなど簡単なのではないかと思ってしまったからだ。

実際問題、ここに到るまでフラクシナス、ひいては琴里たちは大したことは何もしていなかった。

勿論、超技術を活かした転送や、精神状態のモニタリングなど、決してゼロでは無かったが想定していたサポートに比べれば微々たるものだったのだ。

「〝シドー、先程あの女から渡されていた紙はなんだったのだ？〟」

「〝ん、ああ。これか……ＬＩＮＥのＩＤだなこれ。この俺と連絡先の交換がしたいんだろ〟」

「〝なんだと!?〟」

士道がポケットから折り畳まれた紙を取り出し、開く。それだけのことで十香の感情値に変化が表れた。

「十香ちゃんのご機嫌メーター急下降！」

「これは、やきもち妬いてるってことかしら」

「そうみたいですね。どうします、司令？」

「少し様子を見ましょう。必要ならこっちから指示を出すわ」

琴里は神無月の問いに答える。そして誰にも聞こえない程度の声で「といっても、ど

うせ聞かないんでしょうけど」と自棄になっていた。
「〝えい！・寄越すのだ！・こんなもの、こうだ!!〟」
十香は士道の手からメモを奪い取ると、ビリビリに破いて捨ててしまった。対する士道は慌てる様子もなくやれやれといった態度をとる。
「〝ふん！・らいんの連絡先なら私と交換したではないか。なら要らぬよな、シドー？・〟」
「〝ああ、今は俺とお前のデートだ。俺は他の女なんて見ない。だからお前も俺だけを見ていろ。俺を独り占めできるなんてお前は今、世界一幸せなんだからな〟」
「〝し、シドー……〟」
途端に十香は頬を染めながらモジモジと士道に寄り添って歩く。つい先程までの勢いは何処へいったのやら。
「ご機嫌メーター上昇を確認。え、さっきより機嫌が良くなってる!?」
「雨降って地固まる。一度不機嫌になった反動で先程よりも機嫌が良くなったのだろう」
「不安の種が消えちゃえば問題無いってことなのかしら。士道の言葉ひとつでここまで気分が変わるってことは、十香はかなり士道にのめり込んでるわね」
機器が表示する数値よりも、目の前に映し出される十香の笑顔が琴里にそう思わせた。十香には士道さえ居れば何ともでもなるのではないか、と考えることに然して抵抗

が無くなってきていた。
「〝さて、一休みしにカフェでもいくか〟」
「〝かふえ?なんだそれは?〟」
「〝大人の一時の憩いの場さ。十香には感じ取れるかな?〟」
「〝よくわからんがきっとシドーと一緒なら楽しいだろう!参るぞ!〟」
和気あいあいと車に乗り込むふたり。十香はひとりでシートに座りベルトを締め、ドアを閉じていく。
つい先刻まで車が何かも知らなかった筈なのに、既に助手席に手慣れた様子で乗り込んだのだ。
まるで無垢な子供のような存在でありながら、その適応能力は恐らく人間のそれを遥かに凌駕するだろう。

琴里はそんなふたりの様子を見ながら、肘掛けに身体をもたれていた。
「ほんと、私たちいらないかもね……」
琴里は誰にも聞こえない呟きを洩らす。考えないようにしてした筈の本音が零れて、落ちた。

†　†　†

駅前のカフェに到着した士道たちは店員に案内され席についた。

因みに車は駅前のコインパーキングに停めている。伊達ワルはモラルに反することなどしないのだ。

「ご注文は御決まりでしょうか？」

「ラテをふたつ。それと――」

「シドー何やら甘い香りがするぞ。なんだこれは!?」

「――そうだな、季節のパンケーキをひとつ。以上で」

店員が注文を復唱している間も、十香はすんすんと鼻を鳴らしていた。十香は店内に漂う食べ物の匂いが気になるようで、しきりに士道へと質問をしては、落ち着きがないままだ。

士道が十香の質問の山を相も変わらず堂々と捌いていると、暫くして注文した品が運ばれてくる。

テーブルに置かれたカップの中には、絵柄が描かれていた。これは所謂ラテアート呼ばれるもので、世の中の女子に大人気の代物だ。そしてそれ見た十香の感想は……

「シドー、なんだこれは！らてとは飲み物ではなかったのか？なにやら柄が描いてある

だけではないか」
「飲めるさ、その為のモノだからな。そんで描いてあるのは…ハートだな、中々いいじゃないか」
「はあと?それはなんだ?」
「ハートってのは愛の心ことさ」
「愛の心…?むぅ…わからん」
「お前が俺を想った時に胸の奥が疼くだろ?そこが心だ。そして俺を想うその気持ちこそ…愛だ。ほら、簡単に解ったろ?」
土道の言葉を反芻(はんすう)しながら、胸に手を当てて十香は考え始める。暫く目を閉じたのち、ゆっくりと開けた。
「解った。わかったぞシドーこの気持ちが愛なのだな!そしてこれがはあと…うん、素敵ではないか」
十香は朗らかな表情でうっとりとラテアートを見詰めている。きっと、胸の底に宿る心、その想いに気が付いたのだろう。
その様子を眺めていた土道はおもむろに砂糖を二杯カップにいれると、スプーンでラテを混ぜ始めた。当然、描かれたラテアートはぐちゃぐちゃに混ざって消えてしまう。
「おい!何をするシドー!!はあとが…はあとが消えてしまったでないか!私の想いが…

!!」

「消えてなんてない。目には見えなくなっても、愛は消えない。混ざりあって溶け合って、お前の中に残るんだ。さあ、飲んでみな」

未だにラテアートを消されたことに不満を抱く十香だったが、士道を訝しげに睨みながらおずおずと混ぜられたラテを口にした。すると十香の目が驚きで大きく見開かれる。

「甘い、そして旨い！」

「だろ？それが愛が溶けたラテだ。まあ、俺と居るだけでなんでも旨くなっちまうのは仕方ねえことだがな」

「うむ！シドーの愛は旨いな！」

コーヒーが甘くなったのはただ単に砂糖を多めに入れたからなのだが、それをワザワザ指摘するのは野暮というものだろう。

優雅に士道はラテに口をつけ、十香は満開の笑みを咲かせて、ふたりの間には甘い甘い空間が広がっているのだから。

†　†　†

「士道くん、カフェですら口説くの上手いんですね」
「十香ちゃんの好感度も更に上昇中、やはりデータは嘘をつきませんね、司令」
「んー、そうねえ…」
相も変わらずフラクシナスの艦橋では士道たちをモニタリングしていたが、琴里はどこか上の空な様子だった。
それもそのはず、士道の起こす自らの想像を遥かに超える行動の数々は、結果としてはいい方向に物事が進んではいたが、琴里のプライドをズタズタに引き裂いてしまっていたのだ。
無論、士道にそんなつもりはないし、琴里もそれは解ってはいるのだが、どうしてもこのただ見ているだけの状況が受け入れ難かった。
手を加えようと手段を講じたが現状は変わらず、いまも尚、士道主体で全てが動いていた。
「〝シドー！これはなんだ!?〟」
「〝それはパンケーキだ。このフォークとナイフで食べるんだ、こんな感じでな。ほら、口開けな〟」
「〝あーむ…！旨ーい!!〟」
ストロベリーとブルーベリーのパンケーキを俗にいう〝あーん〟をしながら十香に

食べさせる士道。もうどこからどうみても熱々のカップルにしか見えない。
全く動じずに人目があるところで手慣れたように〝あーん〟をこなす士道には流石としか言いようがないだろう。
「〝これを、こうして……よし、いける！〟」
十香が自分でパンケーキを食べ始めた時、異変は起こった。
誰もが油断しきっていた一瞬の隙を突いてそれは起きたのだ。
「パンケーキ、消失（ロスト）！」
「バカな！確かに十香ちゃんの目の前にパンケーキはあったはず……！」
「録画映像を再生します！……やっぱり消えてる…？」
「映像を拡大してください。何かわかるかも知れません」
神無月の指示のもと、十香の手元がズームアップされていく。だが皿の上にパンケーキはない。表面に残ったソースがソコに間違いなくパンケーキが有ったことを示すが、そのパンケーキは無くなっていたのだ。
ゆっくりと拡大した映像を上へとスライドさせて細かな変化も逃さないように確認していく。そして神無月が気付いた。
「ここです！やはり…十香ちゃんの口元にソースが一瞬にして付いている」
「つまり……食べたって言うんですか。あの一瞬で…!?」

「そう捉えるしか無いでしょう。誠に信じがたいことですがね」
何やらシリアスに分析していくフラクシナスの面々だが、起こったことは至極単純。
十香が目にも止まらぬ早さでパンケーキを食べただけである。
その証拠に、一部始終を見ていたであろう士道は追加の注文を山ほどしていた。

「司令！これまた想定外ですね、どうしますか？……司令？」
「えっ…うん。まあ監視を続行して頂戴。士道がなんとかするでしょ」
神無月の呼び掛けに遅れて反応した琴里は、ややなげやりに指示を出してから、深く腰掛けて項垂れる。
――――私たちが何かしなくても、どうせ士道が解決してしまうでしょう。私なんかが手を出さないほうが…きっといい。
琴里は追い詰められていた。人一倍真面目で、優秀だからこそ。この状況下において誰よりも何かしようともがいていたからこそ、自分で自分を追い詰めて……そして折れかけていた。
――――こんな筈じゃなかったのに。士道の力を借りて、私たちの力で、私みたいな精霊たちを救いたいだけだったのに。
士道を掌で転がしてなんとかしてやろうとしてた。だからこんな私に神様が罰を与

えたのかなぁ……

誰かを…おにーちゃんを利用しようとしたからダメだったのかな。

『ことり、ちゃん？これからよろしくね』

昔からお人好しで誰かの為に動けるおにーちゃんならって甘えてたからかな。

『ことり！平気か？お兄ちゃんがいるから大丈夫だぞ』

おにーちゃんにとって私ってなんだったんだろ。やっぱり頼りになんてならないのかな。

『琴里、俺がなんとかしてやるからな。今、助けてやる』

あの日から頑張った…ことり、すごい頑張ってきたの。いつかおにーちゃんを助けられるようにって。

「琴里。大丈夫か？」

でも全部無駄だったのかな。ことりの想いなんて、おにーちゃんには届いて無かった。ダメな妹でごめんね、おにーちゃん……

「おーい、琴里ー？」

いつも私を助けてくれるおにーちゃんの声が聞こえる。優しくて強くて、ちょっと変になっちゃったけど、私の大好きな――――

「〝おい、琴里！聞いてんのか？〟」
「えっ!?ひゃっ!?おにーちゃん!?どしたの!?」
突然耳に飛び込んでくる士道の声に琴里は肩から跳び跳ねて驚く。幻聴だと思っていた声は実際に通信を通して飛び込んできていた士道の呼び掛けだったのだ。
「〝どうしたのって観てたならわかんだろ？あのお姫様、とんだカロリークイーンだぜ〟」
「えっ……ってなにその状況!?」
ぼんやりとしてモニターを見ていなかった琴里は映し出されるテーブルの上にある山のような空き皿の数に驚愕した。
しかも十香はまだまだ食べ足りないといった様子で、両手にはしっかりとフォークとナイフが握りしめられているではないか。
「〝超一流の店ならいくらでも知ってるが、あの量となるとアテがねえ。琴里、お前の方で手配出来るか？〟」
「わ、私の方で…？」
思いがけない士道の言葉に琴里は困惑する。まさか士道の方から自分に振ってくるとは思っていなかったからだ。
だが琴里の表情には先程までの影が無くなっていた。それどころか笑みすら浮かん

でくる。
　決して士道に無理なことがあったのが嬉しかった訳ではない。ただ士道が自分を頼りにしてくれたことがどうしようもなく嬉しかったのだ。
　自分でも現金なやつだと琴里は思ったが、士道の神がかったタイミングでの恐ろしいほどピンポイントな要求に、落ち込んでいた気持ちは急浮上し、折れかけていた心が眩しいくらいに輝いて立ち直っていった。
「ったく、仕方ないわね。士道、こっちでなんとかするわ」
「おう、頼りにしてるぜ、ラタトクスの司令官サマよ」
「３０…いえ１５分だけ間を持たせなさい士道。そしたら駅の南側に来て。それでどうにかなるはずよ」
「余裕だ。任せとけ…愛してるぜ、琴里」
「私もよ、士道。愛してるわ、それじゃね」
　士道との通信を終えた琴里は視線を感じて辺りを見回す。そこには若干一名を除いてフラクシナスの乗組員たちがにやつきながら暖かい視線を送っているのが見える。
　なんとも恥ずかしいところ見られたものだと考えながらも、なぜだか悪い気分でもない。心はやる気で満たされていた。
「ニヤニヤしてないで早く準備に移りなさい！ショップタイプはＢ―５９６３。ラタト

クスの底力、士道に見せてやるんだからねっ！」

琴里は立ち上がり腕を大きく振るって乗組員たちに指示をだす。皆からキレイに揃った了解の声が返ってくると、悠々と脚を組みながら彼女の為の席に腰掛けた。

チュッパチャプスを咥えて、凛とした眼で前を向く。そして琴里は、まるで士道のような不敵な笑みを浮かべるのだ。

「さあ、私たちの戦争（デート）を始めましょう」

† † †

突如として住宅街に現れた謎の商店街。食べ歩き食い倒れ天国と化した天宮の一角で、十香はそのブラックホールのような腹を満たしていった。

簡易的とはいえ、限られた時間で商店街と膨大な量の食料を用意したラタトクスの本気にはあの士道ですら感心していたほどだ。

十香が食べることに満足したのを見ると、士道は再び車を走らせた。日が沈み始めた頃に着いたのは天宮の街並みが一望できる丘の上の公園だった。

「綺麗だな、この世界は……」

十香は夕陽に照らされる街並みを眺めながら、感慨深そうに呟いた。
「ああ、でもお前の方がよっぽど綺麗だぜ」
「シドー…またそんなことを言って」
歯の浮くような土道の台詞に十香は照れて唇を尖らせながらも、しっかりと土道の瞳を見詰めていた。
「〝土道、十香の好感度はとっくにマックス状態よ。振りきれる前に封印しちゃってちょうだい〟」
土道のインカムに呆れたような琴里の声が飛び込んでくる。
琴里の言う通り、今日一日のデートで繰り出される土道の巧みな話術と伊達ワルの前に、十香の心はとっくのとうに陥落していたのだ。
これまで十香は知らなかった。この世界が美しく、そして優しいことを。
なりよりも傍に土道がいることが堪らなく嬉しいかったのだ。
だからこそ、思わずにはいられないことがあった。
「なあ、シドー。世界はこんなにも美しい、でも私はそんな世界に居てもよいのだろうか。こんな壊すことしか出来ない私が……」
「いいに決まってんだろ。他の誰でもない、この俺が許す。この世界にそれ以上の肯定はないからな」

「ふふっ…シドーは強いな」
右も左もわからないまま、襲い来る敵を払うことしか出来なかった未知の世界。そんな世界で十香は士道と出逢った。
剣を振るうことしか出来ない彼女自身と比べて、天上天下唯我独尊を極めた彼の生き様は鮮烈で、何よりも眩しかった。
それに加えて、女性を誑し込む彼の技術と性分は純粋無垢な彼女の心を掴んで離さず、愛の底無し沼へと引き摺り込んでいった。
愛も知らなかった初な十香が士道に恋い焦がれてしまったのは当然の帰結だろう。
「シドー…もっと近くに寄っても、いいか？」
士道は無言で頷いた。十香はそれを確認すると、士道に肩を寄せて、そっと頭を預けた。
「もっとこの世界のことを知りたい。もっともっと士道のことを知りたい。教えてくれるか？」
「ああ、いくらでもな」
十香の声は次第に大きくなっていく。同時に胸の鼓動も早まっていき、大きくなっていく。
十香は初めて感じる心地よい焦燥に身を任せて、心のままに話続ける。

「もっとシドーと……！もっと、ずっと！そう、ずぅぅぅと、シドーと居たい！シドーと共に在りたい！私は…シドーと共に生きていたい……ダメか…？」

張り裂けそうな胸を押さえながら十香は悲痛な声をあげる。

死ななければならないと言われ続けたこんな自分が、ただ生きていたかっただけの自分が、誰かの為に生きていたいと願ってしまった。想ってしまったのだ、士道の存在がそうさせたのだ。

十香の胸のうちを聞いた士道は、くるりと身体を捻る。そして士道が動いたことでバランスの崩れた十香の肩を掴むとそのまま向き合う形に引き寄せて、不敵な笑みを彼女に向けて言い放った。

「来いよ、何処までもクレバーに抱きしめてやる」

それは士道の中でも最大級の肯定の台詞だった。

十香は衝動のまま士道の胸に飛び込んでいく。溢れる感情は涙となって飛び散って、オレンジの光が涙をキラキラと輝かせていた。

胸を差し出した士道も十香を力強く受け止め。優しく、そして深く抱き締めた。

沈み行く陽の光がふたりを照らす。伸びた影はひとつ。

見詰め合う士道と十香。広い世界にふたりだけの世界が生まれる。

恋は始まった。愛は満たされた。少女の孤独、その終わりが近づく。

潤んだ瞳がモノをいう前に、士道はゆっくりと十香に顔を近付けていく。
「眼を閉じろ」
士道はただ一言だけ十香に囁いた。その言い付けを守り、十香は固く眼を瞑る。
顔と顔が近づく。吐息と吐息がぶつかる。心と心が繋がる。そして唇と唇が近付いていく。

風を切る音だけが、響く。

気がつけば十香は地面に投げ出されていた。
「何をする！・シドーッ!!」
尻餅をつきながら、怒気を含んだ疑問を投げ掛け、十香は見上げた。
しかし、そこに件(くだん)の男の姿はなかった。
頭の中が疑問で埋まっていく最中、地に着いた掌の指先に生暖かなナニかが触れる。
十香は自分の掌をマジマジと見詰め、そこに付いていたのは少しドロッとした真っ赤な液体だった。

突如として溢れる不可解な液体の正体を確かめるべく、十香は流れ来る出所に向かってゆっくりと視線を送った。

「シドー…？」

赤に沈みゆくは物言わぬ人形（ヒトガタ）。彼女が何より求めたモノ。

左胸を穿たれた士道が、血溜まりの中に倒れ伏せていた。

――孤独な少女が幸せを掴む瞬間（とき）はまだ来ない。ハッピーエンドは、まだ来ない。

第１１話　圧倒的な包容力でオマエの全てを包み込む

――精霊《プリンセス》が消失（ロスト）した夜。ＡＳＴ本部にて……

「五河士道を暫定的に精霊として特別監視対象とする。識別名は…《スパークル》。直訳すると煌めき…見たまんまね」

ＡＳＴ隊長である日下部が上層部から送られてきた命令文を読み上げながら呆れたような声を出す。

新たな精霊の登場に整列していた隊員たちの顔に緊張と困惑の色が浮かぶ。だがその中でひとりの隊員が一歩前に出て発言するため挙手をする。その娘は白銀の髪を揺らし、蒼い瞳で日下部を見詰めた。

「何、折紙？」

「五河士道は間違いなく人間。この半年共に学友として過ごしてきた。私が証言する」

上層部の決定に異を唱えるのは、士道の恋人となった折紙だ。冷静に話しているように見えるが内心は怒りで腸が煮えくり返りそうだった。

「折紙、残念だけど論より証拠よ。前例のない男性型の精霊、そして人間界に堂々と溶け込む態度。全てが異常で混乱するのはわかるわ。実際、上層部もまだバタバタしてるら

しいし」
「証拠とは何？何故彼が精霊などと言われなくてはならないの」
「あの瞬間、彼から霊力が検知されたの。私たちを撃ち抜いたあの煌めきからね」
「あれは彼の真後ろにいた《プリンセス》から放たれたと考えるのが妥当。霊力もあの精霊が出したのでは？」
　引き下がるつもりなど折紙には更々無かった。そんな様子を日下部は察すると、頭を抱えながら話を続けた。
「霊波が違うのよ…プリンセスのモノとは全くといっていいほどね」
「それは…プリンセスがこれまでと異なる攻撃によって、変異した霊波を発したと考えるべき。彼が精霊という妄言には繋がらない」
「当然上層部でもその説は有ったでしょうね。でもその霊波はここ一年程天宮市全体を包み込んでいた微弱な霊波と一致してたのよ！」
　折紙の眼が驚きによって大きく見開かれる。そして折紙が「でも…」と口を開きかけた時、日下部がそれを手で制して険しい表情で話を続ける。
「そこまでの話なら、それすらプリンセスの影響だったはずだ、と言いたいのでしょうけど、他にも彼には不可解な点が見付かったの。あのあと直ぐに後方部隊が彼について調査を開始したわ、国家権力を存分に使ってね」

「……」
「五河士道について解ったことはこうよ。十六歳までは何処にでもいる普通の学生として過ごしていたわ。でも五年前に高校を休学、天宮駅の歓楽街のホストクラブでアルバイトを始める。その二年後正社員として雇用され、同店舗で二年間の勤務。これらは納税記録からも確かなことよ。そして約一年半前、人気絶頂期に電撃引退。かなり変わった人生送ってるけど、ここまでは彼は間違いなく普通の人間だった…」
「だった…？」
「そこから復学までの一年間は空白に包まれてるわ。記録上にはないのよ」
「仕事に疲れて、自由に過ごしたかっただけかも知れない」
「そういう考え方もあるかもね。ただひとつの一般人にはあり得ない点を除けば…」
　日下部は含みを持たせた言い方で言葉を溜めた。そしてはっと息を吐き出して士道の話を続けた。
「その空白の一年間を含めて、今日に至るまで…彼は一度も空間震の際にシェルターに避難した記録がない。はっきりいってこれは異常よ」
「そんな筈はない。この一年間で空間震はこれまでの比にならない程に増えている。精霊たちが活発になってきたせいで……ハッ…まさか…？」
「そう、精霊たちが頻繁に出現するようになったのも、天宮を包む霊波が確認されだした

のもほぼ同時期。そしてその間一度もシェルターに居なかった人物。今日、その人物が精霊と共に居て、霊力を放っていた……これを無関係と言うのは無理があるわ。五河士道は精霊ないし、同等の…いえ、それ以上の存在かも……」

先刻に見た光景と繋がる情報と導きだされた推測。その事実を折紙は深く受け止めていた。だがそれと同じくらい受け入れ難い事実だった。

折紙の頭の中には幾つもの推測や考察、反論が浮かんでは消えていき、最後に残ったのはシンプルな答えだった。

「私が確かめる」

「待ちなさい、何するつもり？」

「直接会って、真実を聞き出す」

「今、五河士道との接触は禁止されてるわ。それどころか所在不明の状態よ」

「なら、探し出す」

「止まりなさい折紙！」

退室しようと踵を返した折紙の腕を日下部が掴んで、その歩みを止める。

そして耳元に口を寄せて折紙にしか聞こえない声で告げた。

「今はまだ堪えるときよ。私だって彼が精霊だなんて信じたくない…明日以降には彼の本格的な監視が上層部から指示されるはず。相手は暫定的といえど精霊、私たちに任務

が下されのはほぼ確実。そうなれば最前線に出るのは諜報能力に長けた優秀な隊員よ。解るわね？真実は自身の眼で確かめなさい…」

「…っ」

日下部は折紙から一歩離れると、今度は周りの隊員にもあえて聞こえるような声量で語った。

「詳細不明の事態に混乱する気持ちはわかるわ。さっきの発言は聞かなかったことにしてあげる。今は頭を冷やしなさい」

「了解」

「よろしい…では、各員解散!」

日下部の号令に隊員たちが一糸乱れぬ敬礼で返す。そしてゾロゾロと部屋を後にしていった。

ひとりきりになった部屋の中で、日下部は大きなため息を吐いてわかりやすく頭を抱えた。

「ほんと、どうなってんのよ……はぁ、シン様ぁ…」

陸自の特殊部隊ＡＳＴの隊長である日下部の苦労は尽きることを知らなかった。

† † †

翌日、日下部の読み通りＡＳＴに暫定精霊《スパークル》の監視という特殊任務が与えられた。

その目的は大きくふたつ。ひとつはスパークルが、人間五河士道であるのか、精霊であるかを判断すること。再び霊力が確認された場合、対象を精霊と認定し空間震警報を発令。直ちに対象を殲滅する。

ふたつめ、精霊との接触を確認した場合、準精霊と認定し監視を継続、可能であれば対象を殲滅すること。

そして対象が人間社会に溶け込んでいる為、直接的な接触や刺激を与える行動は禁止されていた。

監視役には鳶一折紙が抜擢された。非常に優秀な魔術師であり、高い諜報能力を備えている。そして部隊で唯一対象と交流を持っていたため、万が一勘づかれた場合に私的な理由をでっちあげられる。要は保険が効くのだ。

他の隊員や衛星カメラによるバックアップを持って、ＡＳＴのスパークル監視任務が開始された。

†　†　†

時刻は１７時３２分。夕暮れの差し込む丘に立つふたりの人影をスコープ越しに覗き込む。

ＡＳＴはその日の士道と十香のデートの一部始終を監視していた。精霊と精霊に準ずる者はまるで人間のように振る舞い、人々の営みの中で自分たちと変わらぬ人間のように楽しんでいた。

そこに普段の争いで見せる冷徹な姿はなく、閃光も硝煙もない世界で確かに精霊は生きていたのだ。

これまで自分たちが戦ってきたのはなんだったのか。精霊とは人間と何が違うのか。自らのこれまでの行いに疑問を懐く者も隊員の中には出てきた。

精霊は本当に殺さなくてならない存在なのか。そんなことすら考えてしまう。

だがそれらはほんの一部だ。精霊の別の一面を見たからといってこれまでの精霊の行いが消えたわけではない。精霊によって家族を、友を、仲間を傷つけられた過去は決して消えはしない。怒りも憎しみも消えはしないのだ。

それはＡＳＴ上層部も変わらないようで、ふたりが人気のない丘に向かうと知ると、

対精霊狙撃銃（アンチスピリッツライフル）による目標の殲滅を言い渡したのだった。彼女らは標的であるふたりから遠く離れた山間から銃を向け、その時を待っている。

そして、この監視任務の最大の不幸は、そんな精霊を憎む筆頭と言える少女がその最前線に立ち、マジマジと精霊が生きる様を見せつけられてしまったことに他ならないだろう。そう、鳶一折紙という少女に……

†　†　†

鳶一折紙は全てを観ていた。

崩れた校舎で士道の腕に収まる精霊《プリンセス》の姿を見た。

空間震を伴わない精霊の現界という異例の事態だったが、折紙が気にかけたのはそこではなかった。

――何故お前のような存在が彼の腕の中に居る…其処はお前の居場所じゃない…

ブティックで少女のように振る舞うプリンセスと笑いかける士道の姿を見た。

精霊の身を包み堅牢な守護をしていた霊装をあっさりと消して、なんの保護も持たない只の布を纏う。そんな特異な状態よりも折紙は眼を離せなかったことがあった。

――何故精霊なんかに笑いかけるの？その笑顔は私にくれる筈だったモノでしょう？なのに…どうして…

カフェで恋人のように仲睦まじい士道とプリンセスの姿を視た。

霊力を微かにしか感じさせず、只の人間と変わらぬ精霊の姿に他の隊員が動揺する最中、折紙は憎しみ燃えている。

――其処は私の場所なのに。恋人は私なのに。どうして彼は精霊と共に居るの？私は此処で何をしているんだろう…

商店街で食べ歩く精霊を見守る士道の姿を観ていた。

地図に無かった商店街の出現、常識はずれの精霊の食欲など、眼を見張る点はいくつもあったが、折紙の眼には映らない。

――精霊、憎むべき私の両親の仇。五河士道、私の全てを捧げた人間。なら、精霊に微笑む彼は……誰なのだろう…？

† † †

夕暮れの丘に立つふたりの姿をスコープ越しに覗き込む。引き金には指がかけられている。

鳶一折紙には何時でもふたりを撃つ準備が出来ていた。

上層部からの許可も下りた。あとは折紙のタイミングで全てが始まり、全てが終わるだけだ。

そして彼女の心は深い混乱と激しい憎悪に満たされていた。

――――彼に笑いかけられるアイツが憎い。彼に誉められるアイツが忌まわしい。彼の視線を、言葉を、香りを、熱を感じるアイツが羨ましい。嫉しい。妬ましい。

どうして彼がアイツに…精霊ごときに…人類の敵に、私の仇に…

『圧倒的な包容力でオマエの全てを包み込む』

かつて絶望の縁にいた私を救い上げてくれた彼が、あのときから私の全てを捧げると決めた彼が、どうして私の全てを奪った精霊と共にいるの…？

彼にアイツが近付いていく。寄り添っていく。肩を、身体を擦り寄せていく。

止めろ止めろ止めろヤメロヤメロ。彼が穢れる。腐りきった汚泥のよりも臭いそのニオイを彼にツけるな。汚物よりも汚ならしいその身を彼に触れさせるな。穢れる穢れる穢れる穢れる……なのに彼はどうして受け入れているのか。

私はなにを見せられているのだろう。何故其処に居るのが私では無いのだろう。私ではダメなのだろうか。

彼の傍に居るべきは私なのに。其処は私の居場所の筈だったのに。なのに。何故、何故、何故、ナゼ、ナゼ……？

彼とアイツが向き合う。彼を奪うなど赦されない。アイツは殺す。絶対に殺す。だから退いて…其処に居たら撃てない。

ソイツから離れて。このまま撃てば巻き込んでしまう……精霊を殺せないから、早く、離れて。

私の願いは叶わない。私の想いは彼には届かない。彼がアイツに近付いていく。こんなに想っているのに……どうして。

ああ、精霊が憎い。私の大切なモノを奪ったアイツらが憎い。私の大切な彼を奪おうとするアイツが憎い。憎い憎い憎い。

だから殺さなければ。もう奪われないように、殺す。守り抜くために、殺す。精霊は私が、殺す。

彼の顔が、吐息が、唇が、近付いていく……私の中の何がキレる音がする。何かが壊れる音がする。

ダメ、離れて、もう盗らないで、奪わないで。これ以上は……何も失くしたくないのに……

憎い憎い憎い憎い憎い。憎い殺す殺す憎い殺す殺す憎い憎い憎い憎い殺す殺す……アイツが憎い。精霊が憎い。憎い。

『五河士道は精霊……』『……識別名は…《スパークル》』『真実は自身の眼で……』

頭の中に言葉が巡る。答えは此処にあったんだ。もう、解っていたんだ。全部、全部視てきたから、確かめたから、解ったんだ。

精霊は殺す、憎いから。

精霊（プリンセス）は殺す、憎いから。

精霊（五河士道）は、殺す。憎いから、愛しているから……殺せばいい――

引き金は弾かれた。憎しみ故に、愛故に、弾かれた。

空を切り、風を裂き、真っ直ぐと飛んでいく。精霊を殺す為の人類の叡智の結晶が飛んでいく。

凶弾が男の胸を穿つ。ポッカリ空いた胸の穴。少女の想いが彼の胸を穿ち、空いた穴へと収まる。

これは彼女の愛なのだ。歪に捻じ曲がろうと、それは確かに愛だったのだ。

だから漢は受け止める。全てを包み込むと決めていたから受け止める。例えその身が滅びようとも。

差し込む夕陽に照らされて、壊れた少女の嗤い声が響いた。

第１２話　お前の失った愛の全てがこの胸にある

「シドー…？」

呆然と立ち尽くす十香。その視線の先には胸を穿たれ、真っ赤な血を流す士道の姿があった。

「シドー……！シドー!!…そんなっ…!!」

十香は慌ただしく士道に駆け寄り、膝をついて士道の手を握った。血溜まりから振り上げられた腕は血を飛び散らせ、真っ白なワンピースを赤く染め上げていく。

十香は血に濡れることも厭わず、士道の掌をそっと自らの頬に添えて優しく名前を呼ぶ。だが士道は動くことなく、なにも語らない。

大粒の泪を流す十香の慟哭が夕空に響き渡る。

「シドーさえ居てくれれば、この世界のことを好きに為れると思っていたのに……シドーとこの世界で生きていたいと、そう思っていたのに……！」

十香は士道に語りかけるが、それは虚しい独り言にしかならない。語るべき相手はいなくなってしまった。

「眠れ…シドー……」

十香は士道の身体に羽織っていたジャケットをそっと掛けて、彼に別れを告げた。

そうしてゆっくりと立ち上がり、血に塗れた拳をぎゅっと握り締め、士道を貫いた何かが飛んで来た方角を睨み付けた。

「シドー……やはり世界は私を否定したッ！――神威霊装・十番（アドナイ・メレク）!!」

十香の着ていたワンピースが、ブーツが、ベルトが、初めてのオシャレが彼女の身を包む光に消えていく。恋する少女が消えていく。

入れ替わるように彼女を包む紫の神々しい鎧衣裳（ドレスアーマー）。消えていた精霊《プリンセス》が顕現する。

「来い！鏖殺公（サンダルフォン）――ッ!!」

彼女が力強く地面を踏み抜くと紫の光が溢れだし、そこからはあの石造りの玉座が現れる。十香は何時もの如くその背からあの大剣を引き抜いた。

「私を拒む世界など、此方から願い下げだ。なにによりもッ!!」

十香はぶつぶつと呟きながら、玉座に向かって乱暴に剣を振り下ろす。その強大な力に耐えきれる筈もなく、玉座は粉々に砕け散ってしまった。

「シドーの居ない世界など要らない！最後の剣（ハルヴァンヘレヴ）!!」

砕けた玉座が大剣に纏わりついて形を変えていく。吹き抜ける風と共に十香はふわりと宙に浮く。

身の丈よりも大きな片刃の剣と為った天使を携えて、夕陽を背に十香は大きく吠えた。

頭の中には士道との記憶がぐるぐると巡っていく。想い出が、喜びが、愛が彼女を苛しめる。

「シドー！シドー、シドー、シドー！シドォォ――――――ッッ!!!」

ただただ名前を呼ぶ。もう返ってこない返事と知りながら、十香は叫び続ける。

士道は十香の光だった。十香にとって世界とは士道そのものだった。士道さえ居れば他に何も要らなかったのだ。それだけ十香にとって士道という存在は大きなモノになってしまっていた。

皮肉なことに士道は十香の心に踏み入り過ぎたのだ。本来あったであろう未来よりもずっと深くへと、踏みいってしまったのだろう。

「こんな世界は……私が滅ぼす。なあ、シドー！」

十香の身体に紫の光が溢れる。どんどんと量を増す光は徐々にその濃さも増していく。

――――足りない。足りない足りない足りない!!この程度の力では足り得ない。滅ぼさねばならんのだ。誰もが皆、わたしを拒むこの世界を！

「…その為なら私は、悪魔でも魔王にでもなろう」

十香の纏う紫のオーラが色濃く黒に近付いていく。
そして十香の心は堕ちていった。深い深い奥底へと……

† † †

闇の中に何かが見える。ぼんやりと、でもはっきりと。それは人の姿に似ている。
「お前は誰だ？」
「貴様は誰だ？」
問えば同じ問いが返ってくる。その輪郭がだんだんと浮き彫りになってきた。
「私は十香。世界を壊す、その為に来た」
「貴様は〝十香〟なのか。ならば私も……」
互いに互いが誰なのかは解っていた。ここは心の奥底、己の内側だ。ならば居るのは他でもない、自分自身だろう。
「何故世界を壊すのか？」
「世界は私を拒む。世界は私からシドーを奪う。だから壊すのだ」
「〝シドー〟とはなんだ？」
「私にとってのこの世界の全てだ。他には誰も何も要らなかった。でも…喪った。だか

ら――――」
「――壊すのか？」
「そうだ」
十香はもう一人の自分自身と淡々とした口調で言葉を交わす。
しかし、士道の名を出す時だけはどこか悲しげに語っていた。
「お前（わたし）にはその力があるのだろう？」
「有るとも。だったらどうする？奪うか？」
「いや、要らない。そう、私はもう何も要らない。剣も要らない、力も要らない……私自身も要らない。シドーが居ないなら全部…要らないんだ」
「そうか」
「だからお前（わたし）に預けようと思う。どうだ？」
提案を言葉にして訊ねる十香だったが、その答えすら解っていた。互いに互いが自分自身なのだから当然だ。
それに呼応するようにもう一人の自分も態々（わざわざ）口に出して答える。
「いいだろう…ならば全てを貰おうか。怒りも哀しみも、何もかもを力に変えて…私が世界を壊してやる」
「うむ、頼んだ」

「よい。眠れ、十香よ……」

「……ありがとう　」

十香は深い闇の底へと沈んでいく。全てを託されたもう一人が入れ替わるように闇から這い上がっていく。

そして、十香は安らかな眠りについた。それはさながら王子様を待つ眠り姫のように。

呪いを解く王子様は居ない……今はまだ。

†　†　†

十香の身体を包んでいた黒の光が収まる。そこにいたのは十香とは似て非なる存在だった。

纏う紫の霊装は、胸からへそまでざっくりと開いた漆黒のドレスへと変化する。最後の剣は黒く染まり、そこから滲み出る黒々とした光は触れた先から全てのモノを欠片も残さず消し去っていく。

宵闇色の美しい髪は闇色へと変わり、毛先だけが月の様に白くぼんやりと輝いていた。

彼女は初めて感じる胸の痛みに眼を瞑る。一呼吸してそれを呑み込むと、黒き剣をよこなぎに振り払った。
「十香……滅ぼそう、全てを。往くぞ、終焉の剣（ベイヴァーシュヘレヴ）…」
少女の想いを背負った魔王の暴虐によって、滅亡が始まる。

†　†　†

「土道くんの生命反応無し！おい嘘だろっ!?返事をしてくれ！」
「十香ちゃんのパラメーターが大幅に変化!!カテゴリーE！霊力値がマイナスを示しています！」
「まさか霊結晶（セフィラ）の反転…？恐れていた最悪の事態が起きるなんて…」
警報が鳴り響き騒然とした艦橋で、琴里は苦い顔をしながら呟いた。
義兄が撃たれ、目標の精霊が大きく姿を変える緊急事態だが、琴里は冷静さを欠くことは無い。
「いくらなんでも展開が急すぎるわ。どうなってんのよ…」
「十香は今、絶望の最中にいるよ。良くも悪くもシンの影響が強すぎたんだろう」
「令音…イヤに落ち着いてるじゃない」

「琴里もそうじゃないか。考えてることは同じさ」
「そうね、こんな状況でも士道なら…と思っちゃうわよ」
「まあシンだからね」
「またそうやって自分だけ解ってるふりして……まあいいけど」
士道なら、あの伊達ワルならばとふたりは思う。それはひとえに彼への想い故。信頼は愛に乗り、変えがたい確信へと変わるのだ。
喧騒の中、令音は誰にも聞こえないようにひとり呟く。
「その気持ちはよくわかるよ、十香。やはり君は、昔の私にそっくりだ」
令音は過去をは思い返す。自らが救われた昔の日のことを。

†　†　†

彼を喪ってから幾年。思い起こして行動してから更に幾年の時が経つ。
きっかけは些細なことだった。ただほんの少しだけ気になって、一目見て帰るだけのつもりで、令音は夜の街へと足を踏み入れた。
そこで出逢った男こそ、シン。つまり、ホストとして働き始めた18歳の士道だった。
あれよあれよと案内されて、気づけばふかふかのソファーに座らされていた。そこに

接客にきたのが士道だったのだ。

令音が士道に抱いた第一印象は〝誰だ、この軽薄な男は〟といったものだった。

『初めまして、シンです』

――…初めまして…か。どうも…

『なんか緊張してる？もしかして姫はこういうお店初めて？なら奇遇だ、俺も今日から姫に付くようになったんだ』

――確かにこういった類いの店は初めてだが……それよりも、姫とは？

『そりゃ君のことだよ。俺たちにとってお客様はみーんな可愛いお姫様だから、当たり前だろ？』

――姫は止してくれないか…柄じゃない。

『じゃあなんて呼ばれたい？名前、教えてよ』

――……令音。私は村雨令音だ。

『令音、か。綺麗な名前だね。君に…いや、お前にピッタリの名前だ』

時折ちらつく彼の残像。だが令音はシンは彼とは違う人間なのだと理解していた。というよりもイヤでも解らせられたというほうが正しいだろう。

『令音…なんか疲れた顔してるな。あー…だいたいわかった。今日だけは全部忘れて、俺に甘えていいんだぜ？』

――隈のことかい？これは随分と昔からあるんだ、気にしなくていい。

『いや、気にするね。お前の眼は愛を忘れた子犬の眼だ』

――それはどういうことなのかな？

『お前の失った愛の全てが俺の胸にある』

彼とシンは違う。彼なら決してこんな歯の浮くような台詞は言わない。しかし、見透かしたようなシンの言葉が、そこに流れるふたりの時間が、固まっていた令音の心を緩やかに溶かしていく。

『俺がホストになったのはお前を助けるためだ』

――シン、まさか覚えて…？

『ん？今日が初めましてだよな。どっかで会ったこと有ったか？まあ、どっちでも変わらないぜ、今ここに俺がいるんだからな』

仕方の無いことだろう。彼を喪った彼女がシンに対して彼を重ねてしまったことも……

『夢の終わりの時間だぜ』

――――え？もう終わり…？

『そう、閉店の時間さ。また来てくれるよな』

――――シン……その…なんだろう。えっと…

……今夜は離れたくない。そう思って、口に出してしまったことも。仕方の無いことだったのだろう。

『朝までに何回ＫＩＳＳして欲しいか決めとけよ』

耳元でそっと囁かれて、流れ流されてしまったことも。全部仕方の無いことだったのだろう。

朝を迎えた時、令音は幾年もの間忘れていた安らぎと充実感に浸り、何時振りかもわからないほど久しぶりに晴れやかな気持ちに為れた。

それから令音は変わった。シンによって変えられたのだ。
それまでの全てがどうでも良くなってしまう程に、令音はシンという漢に心を奪われていた。
お金も時間も、大切なモノもほぼ全て、シンに捧げた。自らの生きる意味も捧げたのだ。
恋焦がれ、煩い果てる。慕い、惹かれ、惚れてゆく。そんなオンナに為ってしまっていた。

村雨令音として考えるなら、きっとそれは最高の結末（トゥルーエンド）。言うなれば、令音はそんなオンナに為れたのだろう。

† † †

未だに騒然とするフラクシナスの艦橋で、過去を思い返した令音はひとり微笑んでいた。
「私を救ってくれたように、彼女も救ってくれるのだろうね」
令音は物言わぬ人形（ヒトガタ）となってしまった士道のインカムへ通信を続ける。

「君はこんなことで終わるような男じゃないだろう。私のシン？」

届く筈のない言葉を紡ぎながら、令音は自信に満ち溢れ、口角を吊り上げていく。

穿かれた土道の空洞となった胸の奥に、パチリと火花が散った。

第13話　ヤバモテミッションを抱いてナックル戦士参上

力なく倒れ伏せたヒトガタが燃えている。士道の胸の奥が燃える。魂とか心ではなく、物理的に蒼い炎が燃え盛っているのだ。

士道の胸の穴はまるで逆再生のように燃えながら塞がっていく。そして完全に穴が塞がり、炎が消えたと同時に彼は眼をパチリと見開いた。

士道は気だるげに起き上がると、ふぅっと息を吐きながら首を鳴らしている。

「士道！聞こえる？起きたならさっさと動くわよ！」

「ああ？…琴里か」

「そうだけど…なんか怒ってる？」

いつもよりワントーン低い士道の返事を聞いて琴里はなにか自分がやってしまったのかと不安になった。

琴里に思い当たる節などないが、士道は死にかけたのだから上機嫌な訳がない。

「軽く不機嫌なのは俺が無敵でつまらんからだ」

士道の怒りの矛先は常人にはやはりわからない。胸に風穴を開けられたことではな

く、それでも死ななかったことに対して怒っているのだろうか。
「シンが不機嫌なのはお気に入りの服に大穴が空いたからだろう？身体は無事でも服はそういかないからね」
「え、ああ…そっちなんだ…」
すかさず令音が解説に入り、それを理解した琴里は軽く呆れてしまう。
やっぱり伊達ワルってよくわからないと思わされた琴里だった。
「シン、フラクシナスで一旦回収するよ」
「おう、令音。アレを用意しておいてくれ」
「アレだね？了解した」
ふたりにしかわからない会話を終わらせて通信が切れる。それと同時に士道の身体が転送され、その場には血溜まりだけが残された。

†　†　†

紅く燃える太陽を背に、魔王がひとりの壊れた少女を見下ろしている。ゆらゆらと揺れる蜃気楼に少女の嗤い声だけが響く。
「貴様か？十香（わたし）の世界（シンドー）を壊（こわ）したのは」

魔王はその華奢な身の丈よりも遥かに大きな漆黒の剣の切っ先を突きつけて、壊れた少女となった折紙に訊ねた。

但しそれは質問ではなく確認だ。魔王は直感で少女が探していた人物だということを見抜いていたからである。

折紙は声を掛けられると五月蝿いくらい響かせていた嗤い声をピタリと止めて、首だけを動かして上を向いた。

その瞳にかつて宿っていた信念や怒りの炎はもうなかった。

そこにあるのは狂気。妄執に歪んだ愛の極地だった。

「コロした?殺した……そう、殺した!私が殺したっ!あなたたち精霊みたいに殺したの。人間を殺した!士道を殺したッ!!精霊だったから、愛してしまったから、だから殺したの!!……アハッ…ハハハ、アハハハッ!!」

爆発した感情を吐き出すように折紙は話し出す。瞳孔が開きっぱなしで、口の端からは涎が伝っていても気にせず叫ぶように話して、最後には再び狂気に満ちた声で嗤いだす。

「これで…ずぅ———っと私のモノ。最期は私が貰った…だから士道は私だけのモノ…フフッ」

嗤い終わると、折紙はひとり語りを始めてニヤついた表情で己の胸を抱き締めた。

やはり鳶一折紙は壊れてしまった。だがその根本にあるのは士道への愛なのだ。愛が折紙を壊すと同時に支えて、絶望の底へと沈まないようにしていたのだ。

でなければ折紙は物言わぬ人形の様に佇むだけの存在になってしまったことだろう。

一方、壊れた様を見せ付けられた魔王は静かに佇んでいた。十香の大切な世界を奪った存在がどのような物か見極めていたのだ。

そして重く閉ざしていた口をゆっくりと開いた。

「戯れ言を……シドーが貴様のモノになったとて、すぐに貴様は終わる。何故なら私が真っ先に壊すのは貴様だからだ」

「私を殺す？……なら殺せばいい。そうしたら私は士道と永遠に一緒に為れる……永遠に……アハハハ！永遠だ！永遠に士道は私のモノに！嗚呼…士道ぅ……さあ、殺せ！私の両親を殺したように！私が士道を殺したように！アハハッ、ハハハハッ」

「狂人が……いいだろう。その望み、私が手ずから叶えてやる」

狂喜乱舞する折紙の嗤いに魔王は顔をしかめながら、漆黒の剣を大きく振り上げた。

その瞳には漆黒の怒りが燃えている。十香から託された想いが炎となって燃えているのだ。胸の奥から沸き上がるどす黒い感情が力となって、黒い光が剣に纏わりついていく。

「殺して壊して消し尽くす。死んで絶んで滅に尽くせ」

漆黒の大剣は振り下ろされた。剣からは闇にも無にも似た黒い波動と斬撃が放たれる。

うねりをあげて力の奔流が折紙へと襲いかかるが、彼女が無意識のうちに展開していた随意領域（テリトリー）と衝突する。だが黒き奔流は折紙の随意領域を一撃で破壊し尽くして霧散した。

瞬間、折紙の身体にも負荷が加わり、酷使された結果が吐血という形で訪れる。

決して折紙の随意領域が脆かったわけではない。彼女はＡＳＴでも優秀な魔術師（ウィザード）で随一の実力者でもある。

ただその一撃は強すぎた。寧ろ、全てを消し去る黒き奔流に一撃だけでも耐えた時点で十分強固な随意領域だったといえるだろう。

だが先の一撃は魔王にとっては力任せに振り抜いただけに過ぎない。あくまでも世界を滅ぼすだけの力のほんの一滴なのだ。

「ほう、耐えたか。ならば何度でも叩きつけてやろう」

暴虐の歯牙は変わらず研ぎ澄まされており、大きく口を開けていた。

折紙に次の一撃を防ぐだけの力は残っていなかった。それどころか彼女にはもう生きようという意志が無い。無意識の随意領域は生きようとした身体が勝手起こした反

射的なものなのだ。
魔王が折紙の命を終わらせるための剣を振り上げた、その時だった。魔王は何かに気付いたようにハッとして、真上を見上げたのだ。
夕焼けの空から黒い何かが降ってきていた。否、誰かがこちらに向かって真っ直ぐと迫ってきていたのだ。
「奇襲とは小賢しい！貴様から消えるがいい…！」
魔王は即座に振り上げた剣を構え直し、迫り来る人物へと下から掬い上げるように薙いだ。
「俺のフェザーが鳥人拳を繰り出す！」
その男は落下の勢いに乗せて鋭いキックを繰り出した。その脚には煌めきが纏わりついており、振り抜かれた漆黒の大剣の腹を捉える。
重たい金属同士が衝突したような鈍く低い音が響き、男の蹴りが魔王の大剣を弾いたのである。
蹴りによって落下の勢いを相殺した男は、軽快な身のこなしで緩やかに着地してふたりの間に割り込むように立ちはだかった。
「貴様は…！」
「そんな。貴方は死んだ筈…」

男の姿をマジマジと見たふたりに衝撃が走る。突如として舞い降りた黒の装束に包まれたその男。

黒のレザージャケットに、黒のパンツ、おまけに胸元から覗くインナーまで黒い。そして首もとからはこれでもかというくらいフェザーのファーが主張していた。

男はジャケットを手でバサッと軽くはためかせて不敵な笑みを浮かべながら口を開いた。

「ヤバモテミッションを抱いてナックル戦士参上」

こんな状況でこんな意味の解らないことを言うのはこの世界にひとりしかいない。

宙に浮かぶ魔王と化した十香と、膝をついて涙を流す折紙の間に割って入ったその男は、ふたりが死んだと思っていた五河士道その人だった。

† † †

たったひとつの些細なきっかけによって未来は変わる。世界が変わることもある。

まだ少年だった五河士道がソレを手に取ったのはほんの気紛れだった。

厨二病が抜けかけてきていた十五の夜に、偶々コンビニの雑誌コーナーで目に入っただけだ。

奇抜な格好のモデルと理解し難いキャッチコピーの表紙に眼を惹かれ、手にとってパラパラと中身に目を通す。それだけで…その一瞬で…彼は心を動かされた。
鮮烈にして強烈。熾烈ながらも苛烈。猛烈かつ激烈だった。
怒濤の勢いで彼の心と魂に流れ込んでくる。それこそが伊達ワルだった。
その雑誌の名は……メンズナックル。伊達ワルを志す漢の聖書（バイブル）である。
きっとこの出逢いは偶然ではなく、必然だったのだろう。少なくとも、この世界では。

五河士道という漢がメンズナックルから学んだことは多岐に渡り、そこから得たものは数え知れない。
数多の事柄のなかでも士道を最も突き動かし、彼を彼足らしめるものが有った。
それはいったい何か？
ファッション誌なのだから、オシャレになったことだろうか――否。
モテ技、決め技、女性を口説き落とす技術の随だろうか――それも否。
人々を惹き付ける秀逸な言い回しだろうか――これもまた否。
五河士道がメンズナックルから得た至高にして最大、只ひとつの真理……それは己を貫き通す意志だった。
他人にダサいと言われようと、後ろ指を指されて嘲笑われようと、自分が着ると決め

た格好をする。
自らの想いを形にして、自らを魅せる為の服を装い、飾る。
決めたのなら、例え誰かに間違っていると言われようと続ける。決して誰にも媚びず、信じた我を徹し続けるのだ。
ぶれず、揺れず、折れない。絶対的な芯が己の心にあった。

五河士道は他人を評価して褒める。自分の価値観を持っているから他人の全てを比較し、どれだけ自分に近づいているかを教えるのだ。
五河士道は他人を許容する。自分が絶対と思っているが故に、他人の中にも絶対譲れないものがあることを許すのだ。
五河士道は他人を導く。迷い果てる他人に自分の背を魅せ、歩くべき標となることでその路を照らすのだ。
――――全ては五河士道が伊達ワルであるが故に。
だからこそ、人々は彼の姿に惹かれ、存在に惚れるのだろう。

もし…もしもの話だ。意志の強さが絶対的な強さに変わるような…そんな世界があったとしよう。

そんな世界に彼が現れたのなら、他に並び立つ者もない支配者に……〝王〟へと成ることだろう。

†　†　†

フラクシナスの艦橋では士道が反転した十香と対峙する姿をモニタリングしていた。
「士道くんがこうして現れたんだから、死んだと思って暴走してる十香ちゃんもきっと大人しく――――」
「十香ちゃんの霊力が更に増大！これまでにないほどの数値になってます!!」
「――何ですと!?」
中津川の安堵は椎崎の悲鳴にも似た報告によって、一瞬にして掻き消された。
計器は異常を示し、警報が鳴り響く艦橋。そこに司令官である琴里の一喝が入る。
「落ち着きなさい！この状況は訓練に無い異常事態よ。でも、だからこそ冷静に対処する必要があるの。わかるわね？」
琴里の諭すような言葉に乗組員たちの動揺が少しずつ収まっていく。それを見ると琴里は一度頷いて言葉を続けた。

「それに最前線にいるのは誰なのか……そう、士道でしょ？なら心配することは無いわ！というより、よっぽど士道が巻き起こす事態の方が異常で、想定外の連続じゃない？」

チュッパチャプスを奥歯で噛みながらニカリと笑う琴里。

乗組員たちはモニターの士道と笑顔の司令官を交互に見ると、その顔に笑みが溢れる。

「了解です！私も士道くんを信じます！」

「私も！」「当然です！」

「さあ、司令。指示をお願いします」

琴里の言葉は乗組員たちに届き、同調していく。琴里はバッと大きく手を伸ばして立ち上がった。

「下手な手出しは無用よ。ヤバそうだったら先ずは士道の回収を優先、いつでもいけるように常に捕捉しとおいて。それに間違いなくＡＳＴもいるわ。アイツらの邪魔が入らないように全力で妨害してやりなさい。広域ジャミングを忘れずにね！各員、ここが正念場よ…!!」

士気の高まるフラクシナスに琴里の声が響く。天空の船の一角、ここが彼女たちの戦場なのだ。

――――地上では、伊達ワル士道と精霊《プリンセス》。最期の邂逅と衝突が始まろうとしていた。

第１４話　俺の心を奪いたいなら死に物狂いで来な

魔王は宙に佇みながら、足下から見上げるひとりの漢を眺めては顔をしかめる。
「生きていたのか…シドーとやら。十香は死んだものだと思っていたようだが」
「まあな、死んでも死なないのが俺だ」
「理解し難いな…貴様は」
「神の視点でしか俺を理解できないぜ」
会話を交わす度にどんどんと魔王の顔は曇っていく。怒りと哀しみが入り交じっても尚美しい顔で魔王は士道を睨み付けた。
「まあよい。そんなことはどうでもいいのだ。生きているなら私が手ずから殺すのみ…」
魔王は士道に対して殺意を滾らせて、漆黒の大剣の切っ先を向ける。
「貴様は十香を哀しませた。十香にとって貴様は剰りにも眩しすぎて堪らなかった…！十香は貴様に惹かれていた。惹かれ過ぎていた!!」
胸の奥から涌き起こる感情を叫ぶ魔王。悲壮に染まるその顔は儚げな少女のそれによく似ていた。十香というひとりの少女に。

「その輝きを、光を喪った哀しみが貴様にわかるか？…私には解る。十香（わたし）にとってのこの世界は貴様と居ること…ソレだけだったんだ！それを貴様は…!!」

表裏一体だった魔王と十香は混ざり合った。この叫びはどちらのものなのか、それは言わずもがなだろう。

「喪うことがこんなに辛いのなら知らなければよかった！…想いなど！愛など！初めっから知らなければよかったんだ！シドーのことなんて……シドーなんて…！」

彼女の瞳からは衝動と共に大粒の涙が流れる。愛が溢れて止まらない。だから彼女は、止まらないのだ。

涙を流したあと、彼女は黙りこんで俯いた。時間にして五秒も経たないうちに顔を上げると、そこに涙はなく再び怒りの炎が宿っている。

身体からは黒い波動が止めどなく放たれ、全てを壊す魔王が君臨する。

「…故に。故に貴様は殺す。この世界と共に壊す。十香（わたし）を苦しめるもの全てをこの剣で破壊する！塵ひとつ残らず…消えるがよい」

†　†　†

「ああ！なんでこうなっちゃうかなぁ!!」

「中津川さん、拗らせた愛ってのはね…時に何よりも重いんですよ」
「わかります。それ」
「あんたらが言うと重いなホントに！」
フラクシナスではふたりの様子をモニタリングしながら、中津川が椎崎と箕輪に突っ込みを入れていた。
「不味いわね…話し合い。というより士道が十香を丸め込んで終わりかと思ってたけど、雲行きがあやしくなってきたわ」
乗組員たちの様子を横目に、独り言と共に琴里は考えを巡らせていた。
正直なところ今の流れは琴里の想定の外にある。理想としては士道がいつものモテ技を駆使して、暴れる前に十香を封印してしまう形がよいと考えていたのだ。
それが今の状況はどうだ。十香は殺意を滾らせているし、士道は黙して語らない。このままでは闘いになることは必須だ。
そうなれば士道は瞬く間に挽き肉に変わってしまうだろう。あの謎の霊力があろうと、相手は戦闘に特化した精霊《プリンセス》で、更にはそれが殺意を持って襲いかかるのだ。
いくらイフリートの再生能力を持ってしても限界はある。殺され続ければ、本当に士道は死んでしまうだろう。

戦うことなく穏便に済ませて欲しい。それが琴里の何よりの願いだった。
だが、そんな琴里の心配を知る筈もなく、現場では士道が動き始めていた。

†　†　†

「十香、ちょっとだけ待て。おい、折紙！巻き込まれんように下がってな」
士道は宙に浮く魔王に遠慮なく待てを言い渡し、振り返って折紙に呼び掛ける。するとボーッとした様子でふたりを眺めていた折紙が急にハッとした顔になると、目をパチクリと見開いた。
壊れた少女は瞬時に自分を取り戻した。それも当然だろう、彼女の心は愛によって破壊と再生を繰り返し続けていたのだ。その均衡が崩れれば、この結果は目に見えていた。
「士道さん…私に話し掛けてくれた…？」
「当たり前だろ、お前にいってんだ。ここから先は拳で語る喧嘩の時間だぜ？関係ないお前はさっさと離れてろよ」
「関係なくなんてない。私は貴方を殺し…いえ、殺そうとした。それには気が付いている筈……なのに何故？」

折紙は影を落とした表情で士道に訊ねる。
理屈は解らないが士道は生きている。だからといって自らが犯した罪は消えない。人を殺そうとした罪は消えないと折紙は考えていた。
だが士道は思い詰める折紙とは裏腹に、軽い調子で笑い流した。
「気にすんなよ、折紙。嫉妬に狂ったオンナに命を狙われるなんて喧嘩と同じくらい経験してるぜ」
「貴方が気にしなくても、私は…人を撃った。精霊と同じ。そんな私は死ぬべき……」
「折紙。お前にひとつ教えてやろう」
自己嫌悪と自責の念から項垂れる折紙に、士道は優しくも力強い口調で語りかける。そして指をたてて折紙に見せ付けながら続けた。
「どう死ぬかじゃない、どう生きたかだ」
短いながらも真っ直ぐに届く言葉だった。
人はいつか死ぬ。折紙も士道でさえ、いつかは死ぬだろう。だからこそ人はその時を迎えるまで走り続けるのだ。足掻いてもがいて、必死に生き続ける。
そんな命を輝きを士道は折紙に伝えたのである。
折紙の瞳から一筋の涙が流れる。それと同時に彼女の心はどこまでも澄みわたった青空のように開けた。

折紙は少し震えた声で「士道さん…」と名前を呼ぶ。士道は答えるように口元を吊り上げた。

――あぁ……やっぱりこの人は私の光だ。消したくても消えてくれなくて、それでいて私を照らしてくれる太陽と月を合わせたみたいな光。あのときから何一つ間違ってない。私はこの人に……全てを捧げよう。

折紙が士道を見詰め、士道も折紙を見詰める。二人だけの時間が流れる――

――わけがなかった。

肌を刺すような殺気がふたりを包み込む。その発信源は宙に浮かぶ魔王と化した十香だった。

「…死ね」

魔王は疾風のように速く、剣を振り上げて距離を一気に詰める。そしてふたりを真っ二つにするために、漆黒の大剣を振り下ろした。

だが振り切る前に剣が止まる。士道が両の掌で刃を、所謂真剣白羽取りで抑え込んでいたのだ。

全てを消し去ろうとする漆黒の波動と士道から溢れ出る煌めきがせめぎ合い、バチバチと音を発てて弾けて打ち消しあっている。
「おう。気が早いな……それじゃ始めよう、かっ！」
士道は大剣の腹を掴んだまま、身体を捩りながら腕を捻る。すると宙に浮く魔王は剣に引っ張られて体勢を崩した。士道の動きは止まらず、その場で回転するようにステップを踏みながら大剣諸とも魔王を空中にぶん投げる。
投げられた魔王は器用に空で踵を返して、再び士道を見下ろす。その視線の先には余裕な表情で、来いよと言わんばかりに手招きをする士道の姿があった。
「俺の心を奪いたいなら、死に物狂いで来な！」

†　†　†

「士道くんから強力な霊力を確認っ！霊波は…やはりあのパターンです！」
「でしょうね！見ればわかるわよ！でもそこじゃないの。どうして士道が精霊と、それにあの《プリンセス》と対等に力で渡り合ってんのよ!?」
艦橋中央の巨大なモニターには、漆黒の大剣を振り回す十香と徒手空拳で互角の闘いを繰り広げる士道が映し出されていた。

予想の斜め上をいく士道に琴里は声を荒げてしまうのはある種のお約束となっていた。

「いやぁ士道くん、結構腕っぷしも良いんですよ、司令。まだボーイだったときなんて夜の街の厄介者やらなんやらを、千切っては投げ、拳で黙らせてましたからねえ」

「街のチンピラと特殊災害指定生命体を並べてんじゃないわよ!!」

あっけらかんと語る神無月に琴里の鋭いツッコミが蹴りとなって刺さる。尻を蹴られた神無月は嬌声を出しながら地面を転がっていた。

琴里の平穏はまだまだ遠いようだった。

†　†　†

地上ではふたりの闘争が熾烈さを増していた。

魔王は宙から弾丸のように真っ直ぐと速い突きを繰り出す。対する士道はそれを見切って半歩だけ横に避ける。高速の突進をすかされた魔王は勢いのまま地面に突っ込み、ド派手な土煙を上げた。

一閃。土煙を裂きながら漆黒の大剣が横凪ぎに振り抜かれた。魔王は着地と同時に振り向きながら、士道を切り裂くために剣を振るっていたのだ。

だが士道にそれは当たらない。迫る刃をまるで棒高跳びのように背面飛びで軽やかにかわしていく。しかし競技でのそれとは違って背中で着地するのではなく、そのまま一回転してしっかりと両足で地を踏んだ。

次に士道を襲ったのは魔王の返す刃だ。士道はタイミングを合わせて踵落としで大剣の腹を踏み抜き、鈍い音を発てながら大剣は地面に押し付けられる。

ここで士道は違和を感じる。振り払われた剣が、軽い。

素早く視線を足下の剣から正面の魔王に移すと、彼女は左手を士道に向けて翳していた。剣が軽かったのはこれを予想して、あらかじめ片手で剣を振るっていたからだった。

「消えろっ！」

言葉と共に魔王の掌から槍のような漆黒の波動が、士道の頭を貫くために放たれた。

士道は首から上を真横に振って、紙一重で躱す。靡いた毛先が黒に呑まれ消え去るが、士道は未だに余裕の表情を崩さない。

彼女の攻撃は終らず、一撃、二撃、三撃と立て続けに同様の波動が士道に迫るが、これまた同様に上半身の動きだけで全てを躱していく。

「ちぃっ!!」

イラつきが悪態として魔王の口から溢れ、これまでよりも二回りは太い波動を掌から

放つ。しかしそれすらも士道は腰から上を大きく反らして難なく躱していった。
だがそれと同時に彼女は足蹴にされていた大剣を力任せに振り上げた。
上半身を反らし体勢の崩れた士道はその馬鹿げた膂力によって宙へと打ち上げられる。
打ち上げられた士道が重力に捕まり、落下を始める。その落下地点では魔王が大きく剣を振りかぶって待ち構えていた。
そしてタイミングを合わせての縦一閃。宙に浮かされた士道に逃げ場はなく、当たれば真っ二つに身体裂けるであろう一閃だ。
「エレガントに舞い、クレイジーに酔う」
士道の身体が煌めきに包まれ、不自然な軌道で曲がった。当たる筈の刃をヌルリと避けると、何事もなかったかのように士道は地面に着いた。
「面妖な…！」
攻撃が当たらないことに苛立つ魔王。当てたくても当たらない、その上反撃も仕掛けて来ない。まるで遊ばれているようだと魔王は思い、更に苛立っていく。
接近戦では勝ち目が無いと察した魔王は剣を片手に大きく後ろへと跳ねる。距離をとってから広範囲を薙ぎ払う斬撃を放ち、避ける間もなく消し去ろうとしたのだ。
だが士道は彼女を逃がさない。跳ねた瞬間に大剣の背を掴むと、強引に振り下ろして

魔王を地面に叩き落とす。
両足から地面にめり込んでいく魔王。離れることは不可能だった。
「ならばっ！」
魔王は両手で剣を引くと、士道の胴目掛けて突進じみた突きを放つ。一度放った技を食らうような士道ではなく、半歩だけ動いてこの突きを簡単に躱す。
この技を既に見切られていることは彼女も解っていた。だからこそ次の一手を打つ。
魔王は剣から手を離して、雄叫びを上げながら拳を振りかぶる。突進の勢いに乗り、大剣の横をすり抜ける様に近づき、士道の顔面目掛けて腕を振り抜いた。
まさか剣を捨てるとは思ってもみなかったのか、敢えて受けたのかは解らないが……魔王の拳が士道に届く。
士道の頬に突き刺さった拳。精霊の膂力を遺憾なく発揮したその一撃は士道を紙屑のように吹っ飛ばす。
錐揉み回転しながら飛んでいく士道は、地面に一回、二回と跳ねたところで体勢を立て直し、両足で地を捉え二本の轍を作りながら止まった。
「良い拳だ。やるじゃねえか、十香」
パンパンと服の埃を落としながら、相も変わらず余裕綽々の士道。だがその頬にはしっかりと殴られた痕が刻まれており、口の端からは血が流れていた。

士道は口から血を唾と共に吐き出し不敵に笑う。すると傷痕から青い炎が上がり、たちまちその傷が塞がっていった。

キレイな顔に戻った士道は手招きをしながら魔王に言い放つ。

「さて、そろそろ本気でいくぜ。ここからが第二ラウンドだ」

光と闇の衝突。士道と十香の闘争（デート）はまだ終わらない。

第15話　ガイアが俺にもっと輝けと囁いている

――ツラい。苦しい。哀しい。
もう何も要らない、もう何も欲しくない。もう何も……喪いたくない。
だから壊そう。何も無くさないようにワタシが壊そう。そうすればもう、喪うことなんてないのだから。
私の大切なシドー。もう離れて欲しくないから……壊れて。

†　†　†

魔王と化した十香は宙に浮かび、漆黒の大剣を構えていた。士道と距離を一気にとれたため、自由に空を舞うことが出来るようになったのだ。
魔王は水平に剣を引き絞り、その刃に闇よりも深い漆黒の力を溜めていく。そしてその力が解放された。
「消えろ、シドー……！」
剣を振り抜くと刃先から極大の漆黒の波動と斬撃が飛び出し、狙い定めていた士道を

含めて周囲一帯を消し去っていく。

終焉の剣で全てを薙ぎ払い消し去る。そこに残るモノは何一つとしてない。これこそが魔王本来の闘い方だ。

魔王が自らが抉りとった地面を見下ろしながら、ため息を吐く。その瞳には哀しみが宿ったままで、空虚な感情が胸を支配していた。

相手は霊力を持つとはいえ人間。先の一撃は避けられる筈もなく、防いだ形跡もない。

「終わったか……さて、次は――――」

「何が終わったって？」

「――――なんだと!?」

後ろからかけられた声に驚愕しながら魔王が振り返る。そこには宙に浮かぶ彼女と同じ視線の高さにいる士道の姿があった。

「疾風（かぜ）をまとった男こそ夏の女神に愛される」

まともに解説するつもりはないのだろう。しかし、事実として士道はバサバサとジャケットをはためかせながら吹き荒れる疾風に乗って宙に浮かんでいるのだ。

何故、どうして、どうやって、といった疑問が魔王の中に浮かぶ。だが即座に魔王は次の行動に移る。

討ち果たせていないのであれば、幾度となく刻んでしまえばいい。それが魔王の考えだ。

「貫くッ!!」

魔王は身の丈よりも遥かに長い大剣を振り上げながら真っ直ぐと伸ばして、突きを放った。地上では剣が地を摺る為に出来なかったが、互いが宙に浮いているからこそ出来る早業だ。

士道から魔王に向かって、その突きを押し返さんばかりの突風が吹く。

吹き乱れた突風に一瞬だけ眼を細めながらも一直線に進む大剣。その速さは地上での比ではない。

そして大剣の切っ先が士道の胴を捉えて、そのまま漆黒の牙が腹を食い破った。

だが手応えがない。確かになにかを貫いた感触はあったのに、士道の腹からは血すら流れず声も上げずに貫かれているのだ。

魔王は一息に突き刺さった剣を捻ると、士道の身体が甲高い音をあげながら粉々に砕け散った。

「――――氷だと!?」

魔王が士道だと思って貫いたのは、彼の形に姿を変えていた氷塊だったのだ。魔法のような現象に驚く魔王だったが、背後から感じる疾風に気が付き、素早く後ろを振り向

く。

そこにはしてやったりといった顔の士道が、傷ひとつない姿で控えていた。

「次々と…！　小癪な！」

魔王は片手で剣を握ると、空いた方の掌から漆黒の波動を数発打ち出す。士道はそれらを右へ左へと難なく躱していくが、それこそが彼女の狙いだった。

魔王は波動を陽動にして一気に距離を詰めており、剣を振り下ろしていた。

士道は煌めきを纏った両腕を交差して大剣を迎え撃つ。煌めきと刃が凌ぎを削り、低く鈍い音を発てて大剣が大きく弾かれた。

魔王は剣を弾かれた反動に乗せて、一回転して下から切り上げる。士道は四肢に煌めきを纏わせ、蹴りあげることでまたも弾いた。

一撃一振りが致命の一打になる筈の魔王の剣撃は、卓越した士道の徒手空拳の一打によって防がれる。

魔王が剣を振るい、士道が弾く。また剣を振り、弾く。二合三合と縦横無尽に繰り返される打ち合いは徐々に速度を上げていく。必死の形相で大剣を振り回す魔王に対し、士道は鼻歌を口ずさみながら応戦していた。

――この速さについてこれるのか…！　いや、速いだけじゃない。コイツ、段々と膂力が上がっているのではないか…？

魔王の考えを肯定するように、少しずつ力負けをして弾かれる剣の衝撃が強まっていく。

そして幾度目か解らない衝突で、遂に魔王は漆黒の大剣ごと弾き飛ばされてしまった。

素早く体勢を立て直して士道の方を向くと、追撃するでもなく、彼は指鉄砲を構えて彼女に狙いを定めていた。

「ＢＡＮＧ(バンッ)!!」

「何を……ッ?!」

士道がスカしたかけ声で指鉄砲を撃つと、その指先からは何も出ていないように見えるが、魔王に異変が起きた。まるで時間が止まったかのように、身体が動かなくなったのだ。

彼女が何が起きたかを理解するよりも早く、士道が煌めく拳を振りかぶりながら疾風に乗って急接近していく。

回避も防御も不可能。魔王は動かない身体にイラつきながらも、士道の拳を受け止める覚悟を決めた。だが、煌めきの矛先は彼女の急所である顔でも胴で鳩尾もなく、固く握り締めた漆黒の大剣だった。

振り抜かれた拳が剣の腹を殴り付けると、鈍く大きな音を発てる大剣と共に、魔王は

地面に向かって吹き飛ばされていく。
殴られた瞬間に身体に自由が戻り、彼女は勢いに負けながらも両の脚でしっかりと地面を捉えて着地した。
激しい衝撃に地は砕けて陥没し、大きな砂埃が周囲に舞った。
魔王は砂埃に包まれながらも、しっかりと大剣を構えて士道の襲撃に備える。その全身からはあの全てを消し去る漆黒のオーラが滲み出ていた。
そして、一迅の疾風が吹き込み砂埃が一気に晴れていく。
敵意を剥き出しにしながら見上げる少女。それを見下ろしながら不敵な笑みを浮かべる漢。奇しくも出会った時とは真逆の構図でふたりは対峙した。
「何者なんだ、貴様は……」
剣を掲げ切っ先を突きつけながら魔王が訊ねる。訊ねるというよりはぼやきに近いだろう。
「十香(わたし)の記憶には貴様のそんな姿は無かった。ああ、そうだ十香(わたし)から託されたモノには……！　貴様のこと考えれば考えるほど胸の奥が痛む。傷もないのに痛むんだ……」
吐き出される言葉と共に、魔王の身体からは漆黒が溢れてくる。彼女の苦しみを表すかのようにどんどんとその濃さと量を増して、留まることを知らずに湧き出てくるのだ。

「貴様を壊せば楽に為れるだろうか。なあ？」

†　†　†

「ホントに何が起きてんのよ！」

琴里はモニターから飛び込んでくる自身の想定など遥かに超えた情報の数々に叫ばずにはいられなかった。

士道が喧嘩が得意なのも理解できる。霊力を持っているのもの辛うじて理解しよう。だが繰り出される不思議な技の数々、あれは全くもって理解できない。というのが琴里の考えだった。

だが想定外の状況は士道のことのみに留まらない。それもその筈、十香を攻略するために作戦が始まったのだから、当然起こる問題は十香からも出てくるのだ。

「十香ちゃんの霊力、マイナス方向に更に増大していきます！」

「天使だけでなく十香にも力が逆流して……！　不味い、このままじゃ十香自身の力で十香が壊れるわよ!!」

鳴り響く計器から得られる情報は全て最悪のものばかり。このままでは人類最初の精霊討伐が、精霊を護る為のラタトスクの手で行われてしまう。琴里は焦っていた。

「このまま霊力が増大したまま、十香が倒れるようなことがあれば……暴走した力がこの辺り一帯を消し去ってしまうだろう。それこそ天宮市が地図から消える事態に為りかねない」
「それじゃあ…地下のシェルターの人々は…？」
「通常の空間震とは比べ物にならない規模の破壊の力だ。地表ごとまるまる消滅してしまうだろう…」
「そんな…！　ユーラシア大空災に次ぐ被害になるじゃないですか！　止める手立てはないんですか!?」
「ああなってしまった以上、どんなに優秀な魔術師でも彼女を討つことは出来ない。どうにかできる問題ではないよ……私達にはね」
　淡々と告げられる解析官である令音の予測に、フラクシナスの乗組員たちは言葉を失った。
　司令官の琴里ですらこの状況を打破できる方法を思案するが、有効な手段は浮かばない。奥の手である自らの力を解放しても、十香に届かず掻き消される光景しか思い浮かばなかった。
　だが令音は沈黙する一同に向かって言葉を続ける。
「信じるんだ。シンなら必ず、彼女を止められる」

短く簡潔な言葉だったが、皆の心に深く突き刺さる言葉。そこに籠められた意味とこれまでの彼の起こした出来事がその言葉の重みを増していく。
そして誰もそれを疑うことなく、彼を信じて自分の職務を果たすため行動を始める。
この街と戦艦フラクシナス、そしてひとりの少女の命運がひとりの伊達ワルに託された。

† † †

「消えてしまえ…！　全て！　全てすべて消えてしまえばいい、貴様も！　世界も!!」
魔王の叫びが響き渡り、両手で握り締めた終焉の剣からは止めどない黒き光が溢れだしてその力を高めていく。身体からも流れるその光は、彼女が纏う霊装すらも端から少しずつ消し去っていた。
何者にも止めることの出来ない破壊と消滅の力が満ち溢れて迸る。
そんな終焉が迫る中、宙に舞う漢はここまで重かった口を開く。
「なあ、もういいだろ十香。お前は十分暴れたし、俺に勝てないってことも解ったろ？　だから…来いよ」
土道はいつものように尊大な態度を崩さず、彼女に手を差しのべた。目の前の魔王、

そして心の底に眠るもうひとりに向かって手を差しのべたのだ。
「今更遅いのだ！　見ろ、私はもう止まれない！　この剣が、この黒き光が全てを破壊するッ!!　もう私にも制御することは出来ん。私は…十香(わたし)は……！　世界を壊すしかあるまい!!!」
吐き捨てるように彼女は叫んだ。全身を覆う黒い光は彼女自身を蝕んでいき、やがてその身を滅ぼす。そのことを彼女は理解していたのだ。
その上で、更に彼女は力を解放していく。
そんな彼女に士道はニヒルに笑いかけながら一言だけ説いかけた。
「知ってたか？　黒には幸福の光も宿ってるんだぜ」
全てを壊すだけだと思っていた彼女の力を士道は許していた。彼女自身すらそんなことを微塵にも思わなかったことを、いとも簡単に許容したのだ。
その言葉に十香の心が揺れる。
瞬間、士道の煌めきが全身を包み込み、彼の姿が光に消えた。

†　†　†

「あの煌めきはなんなの!?」

「士道くんの霊力が増大していきます！　…まだ増えてる……！」
警報と共に士道の霊力が異常な数値を示している。だが琴里の視線の先はその計器ではなく、士道たちの姿を捉えていたカメラの映像だった。
士道から放たれる煌めきは周囲へと広がっていき、辺りを包み込んでいたのだ。
「この光はいったい…」
「十香ちゃんの霊波に変化が！　これは……士道くんの霊波が十香ちゃんの霊波を侵食してるのか!?」
「そんなことってありえるの…？」
精霊について全てを知っているわけではなかったが、目の前の光景に思わず呆けてしまう琴里。だか直後に中津川に「司令！」と大声で呼び掛けられることで一気に現実に引き戻された。
「今度は何!?」
「解析ＡＩが反応…！　選択肢、出ます!!」
「今このタイミングでぇ!?」
剰りにも予想外すぎるタイミングでのＡＩの行動に、琴里は驚きながらもしっかりとツッコミをいれていく。
フラクシナスに搭載された超高性能ＡＩが、精霊を攻略するための台詞または行動を

選択肢としてモニターに表示する機能。それが今、発揮された。

①十香の心を照らす為、誰よりも何よりも光り輝く
②もうすぐ夜になるので、一番目立つように輝く
③特に理由はないが、とりあえず輝く

「選択肢全部輝くって!?　――――ハッ!?」

ＡＩの意味不明な選択肢にツッコむ琴里だか、別のモニターに映される士道に眼を向けると、そこには輝いているとしか言い様のない士道の姿があった。

動揺と驚愕に染まる一同を他所に、ひとり冷静な令音は静かに呟いた。

「さあ、シン。君の輝きを彼女にも教えてあげるんだ」

†　†　†

黒に染まり魔王と為った十香が終焉の剣を掲げ、目の前の漢を滅ぼさんと極限を突破した力をその刃に籠める。

もう止まれない。その言葉通り彼女は止まることなく、高く掲げた大剣を真っ直ぐと

振り下ろした。

「シドオオオオオ――――ッッ!!!」

張り裂けそうな雄叫びと共に、終焉の剣から全てを消し去る極大の波動が放たれる。周囲の煌めきを消し去りながら一本の黒光が走った。

逃げ場のないほどに大きく広がった漆黒が、宙に浮かぶ土道へと迫りくる。だが土道はニヤリと笑い一言だけ呟いた。

「ガイアが俺にもっと輝けと囁いている」

煌めきが全身から勢いよく迸り、眩い程の輝きを纏い土道は迫る波動に対して避けることなく突撃する。

土道の纏う輝きが漆黒の波動と弾け散っていき、一面の闇を掻き分けながら一直線に彼女へと突き進む。

弾けた黒と辺りの煌めきが混じり合い、夜空にかかるオーロラの如く幻想的なグラデーションを生み出していた。

制御しきれぬ己の剣を力の限り握りしめる彼女。その視界いっぱいには自らが放つ黒しか映らない。だがその黒の中から光輝く腕が伸びてくる。一本、二本と伸びた腕が終焉の剣を挟み込むように捉え――――

「邪魔だ…!!」

――――そのまま真っ二つにへし折った。
大剣が折れたと同時に剣から走っていた漆黒が霧散していき、彼女の身体は直ぐ様煌めきに包まれる。煌めきが身を焦がしていた漆黒すらも食い付くし、軋んでいた身体が楽になって彼女は脱力した。
「終焉の剣を折るとは…私の敗けか……」
彼女がスッと手の力を抜くと、半ばから折れた大剣が地面に落ちてカランと乾いた音を発てた。
「さあ、お前の勝ちだ。殺すがいい、シドー。お前も……私を殺しに来たのだろう？」
彼女は哀愁を漂わす口ぶりで、いつの日かのように土道に問う。
破壊しか出来ない自分が、ただのひとりも壊せなかった。その帰結はそれしかないと。
土道が大きく息を吐くと、周囲の煌めきが収まりいつの間にか沈みかけていた夕陽が二人を照らし始める。
土道はやれやれといった調子で頭を掻きながら、軽く笑って再び彼女へと手を差しのべた。
「邪魔だったから折ってやっただけだぜ。さあ、来いよ」
「なっ…それはどういう――――」

動揺する彼女の言葉は途中で遮られる。なぜなら彼女が話を続ける途中で、士道がさっと近寄り彼女の身体を優しく抱き締めたからだ。
「来ないからこっちから行ってやったぜ。感謝しな」
「何を……何をしているんだ…」
「さっき言ったろ、何処までもクレバーに抱き締めてやるってな」
突然の抱擁に意味が解らず彼女は身体を強張らせて固まっていた。
士道の匂いが、体温が、鼓動が伝わる。それらを感じる度、胸の奥が震えていく。未知の快感が胸を打ち、鼓動と共に高まっていく。
――こんなモノは知らない。こんな気持ちは知らなかった。なのに、この心地好さはいったいなんだ？　……あぁ、私を喚んでいる。十香(わたし)が、喚んでいる……
「シ…ドー……」
胸の鼓動に押し出されるように、彼女の瞳から一筋の涙が流れ落ちた。
強張っていた身体が解れて、彼女は士道に身体を預ける。そして耳元へぐっと唇を近寄らせて囁くのだ。
「十香(わたし)を、任せたぞ…」
それは彼女から士道へと送る、別れの言葉だった。
「いつかお前も俺に惚れさせてやる」

士道の大胆な返事を聞くと、彼女は軽く鼻で笑った後に満足げな顔で眼を閉じた。
途端に彼女が纏っていた霊装が漆黒の衣裳から、紫の鎧衣裳（ドレスアーマー）に変わっていく。
ゆっくりと眼を開くと、先程まで鋭かった目付きがまるで子犬のような潤んだ瞳に為っていた。
「シドー？」
潤んだままの瞳で士道の顔をじっと見上げながら十香がその名前を呼ぶ。
「ああ、俺だ」
「シドー……！　シドーシドーシドーシドー！　シドォ……」
十香は大粒の涙をボロボロと流しながら士道を抱き締めて、その胸に顔を擦り付けながら何度も名前を呼んだ。
何度も何度も、確かめるように名前を呼ぶ。士道も名前を呼ばれる度に返事代わりに優しく十香の頭を撫でていく。
暫くそうしてから十香は再び顔を上げる。その顔は涙でぐしゃぐしゃに為っていたが、満面の笑みを浮かべていた。
「シドー、本当に生きているのだな？　幻ではあるまいな！　本物のシドーなのだな!?」
「当然、俺は俺。これが人間を超越した先にある奇跡の世界だ」
「ああ、その意味のわからない台詞……！　まさしくシドーだ！」

土道の支離滅裂な言動。それこそが彼が彼である何よりの証拠であると十香は判断した。まさかそう捉える者が現れるとは誰も思わなかっただろう。

「なあ、シドー。もっと強く…もう二度と私を離さないでくれ……」

「ああ、もう逃がさないぜ?」

「うむ…シドー、もっと…えっと、そう。くればーに、抱き締めて?」

土道の腕の中で上目遣いで小首を傾げながら、十香は彼にお願いをした。土道の口からは返事はなく、その変わりに十香の背中に彼の両腕がそっと回される。

土道は何処までもクレバーに十香を抱き締めた。

沈みかけの夕陽に照らされて伸びる影は二人でひとつ。戦いの余波で崩壊した丘の上だったが、そんなことを構うことなくふたりだけの世界が生まれる。

顔と顔が近づく。吐息と吐息がぶつかる。心と心が繋がる。そして唇と唇が近付いていく。

――――長かった少女の孤独が今、終わりを告げた。

最終話　精霊とか知らないけど、たぶん全員抱いたぜ

窓の外には夕陽に照らされた街並みが広がっている。ここは街を一望できるほどの高層ビルの一室。そこでノルディックブロンドの髪を頭の後ろで束ねた女性が、ソファーの傍らで立ちながらタブレットを操作していた。

真剣な表情で端末を弄る彼女の横顔は、その美貌と相まってまさに仕事のデキる女といった印象を受ける。

「アイク。たった今、天宮に現れた反転体の反応が消失しました」

「そうか……報告ご苦労、エレン」

アイクと呼ばれた白髪の男は、高級そうな本革のソファーに深く腰かけて背もたれに身体を預けながら、エレンを一瞥した。

ただソファーにだらけながら座っているだけだというのに、数多の女性を虜にしてきたアイクが、エレンのような美人を傍らに置いているとそれだけで絵になるのだ。

「宜しかったのですか？　本当に天宮に向かわなくても」

「構わないよ、エレン。それにあの街には夜都神（ヤトガミ）とあの女がいる。手出しをするだけ無駄さ」

諦めにも達観にもとれる言い方でアイクが返すと、エレンはやや腑に落ちないといった表情を浮かべるが、特に言い返すことなく再びタブレットに目を落としていく。
「さてと」と言いながらアイクは、ソファーから腰を上げて軽く身嗜みを整えつつ立ち上がった。
「それよりもそろそろ出勤の時間だ。今日こそあの漢に勝つぞ」
エレンの報告を蔑ろにしたアイクは、愉しそうな声でそう言った。彼はまるで遠足に向かう少年のように、ワクワクと心を躍らせている。
かつてアイクにとってエレンが報告を上げたような事柄は最重要事項だった。それこそ何を犠牲にしてでも成し遂げようとした残酷な目標があったのだ。
だが今は違う。今の彼は〝夜の魔術師〟と呼ばれるカリスマホストだ。
その標的は世の女性たちであり、彼の目標はナンバーワンホストの座を頂くことに為っていた。
そのために彼は今日も現ナンバーワンである漢に挑む。かつてアイクは酒を得たヤトガミに敗れたことがあったが、あの漢は本当に一滴の酒も呑まずに、アイクを完封しているのだ。
「じゃあいこうか、エレン?」
「はい、アイク」

「ようし、同伴出勤といこう！」
ポケットに両手を突っ込みながら颯爽と歩き出すアイク。その一歩後ろを、喜びの感情を隠しきれず微笑みながらついていくエレン。
彼らが向かうは新宿歌舞伎町。
夜の蝶が舞い踊り、姫が闊歩して、欲望と金と快楽が入り交じっては狂喜乱舞する、日本で最大の夜の街だ。
今日もまた、長い長い宴の夜が始まる。

†　†　†

日が沈み薄暗くなった丘の上で、士道の唇が十香の唇から離れていく。
十香は名残惜しそうにしながら、未だに潤んだ目で士道を見詰めていた。
「シドー……もういっか――――」
十香が二回目のキスをおねだりしようとした瞬間、彼女の霊装が光になって端から消えていく。どんどんと十香の玉のような肌が露になっていき、五秒としないうちに丸裸になってしまった。
羞恥から十香の顔が真っ赤に染まっていき、その裸体を少しでも士道に見られないよ

う、彼を思い切り抱き締めて身体を寄せる。
だが、そんな十香の思いとは裏腹に、士道は抱きつく十香をゆっくりと引き剥がしてしまう。
「は、恥ずかしいぞ…シドー。こんなところで…！」
十香はその豊満な胸と秘部を両腕を使って、涙目になりながら必死に隠す。その顔は火が出るのではないかというくらい紅くなって、士道を何とも言えない眼で睨み付けていた。
何故こんな仕打ちをするのかと十香が考え始めた頃、士道はおもむろに着ていた黒のジャケットを脱ぎ出した。
「な、何を考えているのだシドー!!」
自らも服を脱ぎ出した士道に、十香は頭の中で自分が何をされるのかを想像してしまい、抵抗の声を上げた。
本当は何をされるかなどよく解っていないが、そうすべきだと直感で行動したのだ。尚、その顔は照れながらも緩みきっており、抵抗という抵抗はしていないので、されるがままの状態なのだが。
「女も、黒に染まれ」
士道は脱いだ真っ黒なジャケットを十香に肩から羽織らせると、そっと前のジッパー

を閉じて十香の素肌を隠した。士道の腰丈よりも少し長いジャケットは、十香が羽織るとショート丈のワンピースくらいの長さになり、隠すべき場所は全て隠せていた。

「シドー……その、ありがとう……」

思わぬ勘違いをしていた十香は、羞恥心と自己嫌悪から顔を片手で隠す。その袖はオーバーサイズな士道のジャケットを着ていたため、所謂萌え袖となっておりあざとさを増した仕草になっていた。

士道はそんな十香を優しい眼で見詰める。十香もまた、顔を隠しながら上目遣いで士道を見詰めていた。

ふたりの間に再び桃色の雰囲気が漂い始めた……その時だった。ふたりしか居なかった筈の丘に、別の人影が現れる。

「あら？　あらあら、士道さんではありませんかぁ？　いけませんわぁ、士道さん。こんなところで、まぁた女の子を誑かしてぇ……！」

ねっとりとした艶(あで)やかな声色で、士道に対する苦言を呈するひとりの美少女が現れたのだ。

黒一色のゴシックロリータのロングドレスに身を包み。その髪は艶のある黒のロングヘアーを首もとで二つのピンク色のリボンによっておさげに束ねており、長いアシンメトリーの前髪は左目を完全に隠しきる。だが、色白の肌に映える真っ赤な右目が、士

道を確(しか)と捉えていた。
「シドー、あの娘は誰だ?」と不機嫌そうに十香が士道に訊ねる。士道は少し困った顔になるが、すぐに表情を切り替えて答えた。
「あー、あいつは狂三(くるみ)。俺の命を狙う筆頭クレイジーちゃんだ」
「酷い言いぐさですわぁ士道さん。わたくしたちだって士道さんをイタズラに傷つけたいわけでは――」
そう話していた途中で狂三の姿が、サッと消えて見えなくなる。だが、次の瞬間士道の側頭部に何か固いものが当てられた。
「――ありませんのよ?」
消えたと思われた狂三はぬるりと士道の真横に移動しており、何処からか取り出したアンティーク調の短銃を士道の左側のこめかみに押し当てていた。
黒一色だったドレスには所々が鮮やかな赤橙色に変わって、不思議な力で怪しげに揺らめいている。何よりも際立つのは、隠れていた左目が露になり、時計の文字盤が浮かび上がった金色の瞳が士道を射抜いていることだ。
こめかみに銃を突きつけられ、何時脳髄が巻き散らかされてもおかしくない、常人ならば冷や汗が止まらないような危機的状況。だが、伊達ワルを極めし五河士道は動揺の欠片も見せず、余裕に満ちた態度で狂三に視線を返す。

「情熱的な瞳……あの晩から変わりませんのね。あのときは……〝今宵は俺のナイトメアに酔えばいい〟……そう仰ってたではありませんか、し・ど・う・さん？　きひ、きひひひ」

生殺与奪の権利を得て悦に浸る狂三は、口角を大きく釣り上げて狂気的な笑い声を響かせる。思い出噺を語りながら本気で士道を殺しにかかるその姿は、愛に病んだ女そのものだった。

それでも尚、士道は余裕を無くさずにいた。それどころか狂三とは反対側の右腕で、十香を大事そうに抱き寄せて庇ったのだ。士道のその行動に狂三は眉をへの字に曲げて、不快感を露にする。

「士道さん？　置かれた立場を解ってますの!?　わたくしが引き金を引けば貴方は倒れ、次はその娘ですわ！」

狂三は声を張り上げながら感情的になる。そして脅しをかけるように銃口をこめかみに押し付けていく。その指は既に引き金に触れており、どのタイミングで銃が火を吹いても可笑しくなかった。

士道の命を奪う。そんなことを口にした目の前の女に十香は怒り心頭に発するが、士道がそれを片手で制して口を開いた。

「夜は必ずやって来る。だから狂三、酔いたくなったら何時でも来いよ。この俺がおま

えを天国に誘ってやるぜ」

土道は自信に満ちた顔で囁くと、こめかみに銃を突きつけられたままにも拘わらず、狂三の腰に左腕をまわして己の胸に引き寄せたのだ。

剰りも大胆、剰りにも不敵。これこそが五河士道という漢の生き様なのである。

「きひひ……やっぱり士道さんは酷いお方ですわぁ」

抱き寄せられた狂三は銃を手から零れ落とすと、誘われた胸にしっかりと抱きつき、頬を擦り寄せて猫なで声をだしていた。

凡人には理解し難いだけで、もしかしたら先程の命のやり取りは彼らにとっては只のコミュニケーションなのかも知れない。

†　†　†

「あの娘は誰!?　いきなり現れてなんなのよ!」

空中戦艦フラクシナスの艦橋では、琴里が声をあげながらモニターを激しく指差して興奮していた。

街の窮地から一転して、想像以上のごり押しで十香を封印まで導いた士道に安堵していたら、突如として現れて士道を撃とうとする謎の少女にフラクシナスの面々は対応を

迫られる。

「解析結果出ます！　なっ!?　僅かながらですが霊力を確認!!　波長照合……これは……！　ナイトメアです!!」

「なんですって!?!!」

箕輪から上がる報告に、驚愕の叫びを押さえきれない琴里。霊力を持つことも然る事ながら、その波長が一致した精霊の名前に驚いたのだ。

ナイトメアといえば空間震とは別に人間を襲い、脅威を振り撒く人類の宿敵とも言える精霊で、その危険度はラタトスク基準で最高のSランクになる。最強の精霊が《プリンセス》ならば、最恐の精霊とも言えるのが《ナイトメア》なのだ。

そんな超々危険分子と同じ霊力を持つ人物が、士道の胸の中に収まり、幸悦に浸って顔を綻ばせている。そのブッ飛んだ光景に琴里はそれ以上の言葉を失った。

この時琴里は衝撃のあまり忘れていた。五河士道という漢は常に予想の斜め上を、打ち上げ花火のように飛んでいくということを。

「司令……！　微弱ですが新たな霊波が!!」

混沌を加速させるように、椎崎の新たな報告が艦橋内に響き渡った。

†　†　†

「……士道…さん」

消え入りそうな声で士道の名を呼ぶ新たな少女が現れた。背丈は１４０センチ半ばくらいでかなり小さい……というよりまだ幼い可愛げのある少女だった。

緩くウェーブのかかった空色のロングヘアーを深く被ったストローハットから覗かせ、同じく空色の潤んだ瞳が士道を見上げる。

一見すると、纏った白のロングワンピースと相まって、庇護欲をそそる可憐な少女だが、その左手には眼帯を着けたウサギのパペットが目立っている。

少女はパペットの顔を士道に向ける。その動作はまるでパペットが動いて、少女の腕を引っ張っていったように見えた。

「士道くーん」

ふざけたようなダミ声で士道を呼ぶ声が、少女から発せられる。だが少女の口は閉じたまま、パペットの口がパクパクと動いている。

「士道くん？　四糸乃（よしの）とよしのんを忘れて貰っちゃあ困るよ～」

自らをよしのんと呼称するパペットが喋った。正確には喋ったとしか思えないほど、巧みな腹話術で四糸乃と呼ばれた少女が話したのだろう。

四糸乃はよしのんの言うことに同意しているのか、しきりに頷いていた。

士道はそんな四糸乃とよしのんのひとり二役の会話にも、なにひとつツッコミをいれることなくにこやかに笑顔で答える。

「おいおい、俺がお前たちを忘れたことなんてないだろ？　四糸乃。よしのん」

それぞれの名前を呼びながら士道は、十香と狂三を胸に抱きながら、器用に四糸乃とよしのんの頭を撫でまわした。

帽子越しではあるが、四糸乃は気持ち良さそうに眼を細めて、撫でられることを享受していた。

よしのんは「良かったね、四糸乃！」と愉しげに四糸乃に話しかけている。

暫く四糸乃が士道のナデナデを堪能していると、「ククク……」と不気味な女の声が響く。

突然の声に驚いた四糸乃は、猫のように跳び跳ね、直ぐ様士道の後ろに隠れて、先の声の主を士道の背中から伺った。

そこには二人の美少女が立っていた。ひとりは髪を後頭部で纏め上げて、ゴシックロック調の服装をした快活そうな少女。もうひとりは髪を後ろで三つ編みにして下ろして、流行りの春物に身を包む、大人しそうな少女だ。

まるで真逆の服装をしているふたりだが、その容姿は全く同じと言っても過言ではないほどに似かよっていた。双子ないしそれに近しい何かであることは間違いないだろ

う。

快活そうな少女の方が不敵な態度で一歩前へ躍り出ると、その口を開いた。

「我が同盟者にして、モードロックの騎士よ……主は変わらんのう。颶風(ぐふう)の御子、八舞を差し置いて別の女子(おなご)を寵愛するとは――――ってまた新しい娘が増えてるし！　ちょっと！　ヤバイよ夕弦(ゆづる)！」

芝居がかった台詞と態度から一転して、彼女の言動はいかにもな今風の女子高生のような口調にかわり、慌てながら片割れの少女〝夕弦〟の肩をバシバシと叩いた。

「肯定。士道は少し目を離すとこれです。まったく手が早い。サラマンダーよりずっとはやーいです。耶倶矢(かぐや)、ここはふたりでその手を塞いでしまうべきです。ぎゅう～」

大人しいと思われた夕弦の行動は早く、彼女は素早く士道に近付くと、彼の右手を両手で包み、擬音を口で出しながら握りしめた。その半目ぎみに開かれた両の瞳はしっかりと士道を捉えて離さない。

夕弦から少し遅れる形で耶倶矢が士道の元へポテポテと近づき、頬を紅く染めながら「えいっ」と気合いを入れて士道の左手を握り締める。勿論夕弦と同じく「ぎゅ～」と口で擬音を出すことは忘れない。

お揃いの橙色の髪を靡かせながら、ひとりはクールに、もうひとりは照れながら、対

照的な態度で士道の両手を捕まえる。
「俺を捕まえようなんて、随分と大きく出たもんだ。だがお前らのその気概に免じて今だけは捕まっといてやるよ」
双子の美少女に両手を抑えられても士道は変わらず、伊達ワルらしい強気な上から目線で、可愛げのある拘束を甘んじて受け入れていた。
既に士道の周りには五人の美少女が囲んでいる。だが、それで終わりではなかった。
「だーりん――――っ！」
甘ったるい声で士道に向かって手を振りながら駆け寄る更なる美少女が現れた。耶倶矢はその姿を見つけると「げっ、美九」と少し嫌そうな声を出して、顔を歪ませる。
駆けてきたアイドル級の美貌とスタイルを誇る、美九と呼ばれる少女。紫銀のロングストレートヘアと誠に豊満なバストを揺らしながら、満面の笑みで士道の前に立った。
「まあ！　ここは楽園かしらぁ？　愛しのだーりんとカワイイ女の子たちがこんなにいるなんてぇ！　それに、初めて見た娘もいますし――――仲良くしましょお？」
美九は興奮を一切隠すことなく、のんびりとした甘い声を出しながら士道たちに突撃していき、十香と狂三の間に身体を捩じ込んでいく。そして己が武器である柔らかな双房を士道の胸板に押し付け、至近距離で顔を見上げていた。
「おい！　狭いではないか！」

「あら、ごめんなさいねぇ。でもみんなのだーりんですもの、独り占めはダメですよぉ？」
「美九さん、不愉快な塊がわたくしにも当たってるのですが……邪魔そうですし、切り取って差し上げましょうか？」
「まあ狂三さんったらぁ。狂三さんも可愛らしくて素敵ですよ？　それに触りたかったらいつでもどうぞぉ。狂三さんなら大歓迎ですぅ」
「結構ですの！」
　士道の腕の中で姦しく騒ぎ立てる十香と狂三と美九。もし士道が只の１６歳の男子高校生だったなら、この状況にどぎまぎしたり、たじたじだったりしだろう。　しかし、ここに居るのはかつてヤトガミと呼ばれた伝説のホストの経歴を持つ、伊達ワル五河士道だ。こんな状況でも尚、余裕の態度は一切崩れていなかった。
「相変わらずスゴいことになってるわね……」
　女の子に囲まれた士道に対して呆れたような声がかけられる。士道が視線を向けるとそこには見た目十代前半くらいの緑色の髪の少女がいた。
　あまり身なりに気を使わないようで、腰まで伸びたロングヘアーは手入れが行き届いておらずボサボサと広がり、オーバーサイズの灰色フード付のパーカーと短パンといった男物のような格好をしていた。

「よお、七罪。お前も入ってくか？」
「遠慮しとくわ、士道。でも流石に侍らせ過ぎなんじゃない？　まあいいけど……」
子供のような見た目と相反して、髪を手で靡かせながら冷めた様子でスタスタと歩いていく七罪。そうして一塊となっている士道たちの真横を過ぎ去っていったのだが、士道の背中を越えたあたりで急に踵を返した。
「たまには私にも構ってくれなきゃ、ダメなんだから……！」
七罪は士道から目を剃らしつつ、頬を紅潮させながら唇を尖らせて、士道の服の裾をぎゅっと摘まんだ。七罪は焼きもちを妬いていたが、素直に為れない意地っ張りな女の子だったのだ。
反対側の裾を先程から士道の背中にいた四糸乃が同じように摘まんでおり、くりっとした二つの瞳が七罪の目を見詰めていた。そして左手のよしのんが七罪の右手を握って話しかける。
「みんな一緒がいいよね？　四糸乃もよしのんもそう思ってるよ」
「そうね……私もそう思うわ。ありがとね、四糸乃、よしのん」
七罪は四糸乃たちの気遣いを感じ、笑顔を見せてよしのんの手を握り返した。四糸乃もそれを見てはにかんだように笑うのだった。
士道の前面で姦しい論争が行われている一方、その背ではこの世の天国のような平和

な空間が生まれていた。

†　†　†

「いったいどんだけ出てくんのよ！」

士道をモニタリングしていた琴里がツッコミの叫びを上げる。わんこそばの如くおかわりされる女の子の数々に、フラクシナスの乗組員たちは度肝を抜かれるも、士道ならそういうこともあるのか。と納得していた面もあった。

だが、士道の義妹たる琴里は違った。もうこれ以上自分の知らない義兄の一面を認めたく無かったのだ。

琴里はこんな時に頼れる自らの右腕に、やや興奮しながら話し掛けた。

「ちょっと令音！　これっていったいどういう状況なの!?」

「村雨解析官ならついさっき「私もいってくる。あとは頼んだよ」とか言いながら出ていきましたよ。あっ、ほら、士道くんの背中に」

「速さが足りてるッ!!」

川越が報告した通り、モニターに映る士道の背後には、ふたりのちびっこごとまとめて、士道の背中に抱きつく令音の姿があった。士道の周りは満員の女性専用車両かと思

うくらい女の子でごった返しており、最早そこに誰も入り込む隙間は無かった。
「〝士道さんはやはりモテる〟」
「って、鳶一折紙!?　いったい何処に?」
　モニターから折紙の声が聞こえてくるが、その姿は何処にも映っていなかった。右も左も前も後も、何処にも折紙が入れる隙間はない。だが、音声が聞き取れるということは士道の直ぐ近くにいるはずなのだ。
「〝よお、折紙。まさか股の下から出てくるとは思わなかったぜ〟」
「〝私も遅れをとる訳にはいかない。それに、ここはなかなか……いい感じ〟」
　折紙が身体を捩じ込んだのは女の子たちの足の隙間で、士道の太ももをガッツリと掴んで股ぐらから士道に語りかけていたのだ。それにその視線は士道の顔……ではなく、心なしかその局部を凝視しているように見えなくも無かった。
　度を超えた変態チックな折紙の登場にも、当の士道は気にする素振りもなく、平然と会話をしていた。
「また増えた…！　もうめちゃくちゃじゃない……!!」
　琴里は半分泣きそうになりながら、精一杯のツッコミを入れる。何を見せられているのか、そう思わずにはいられなかった。
「新たに異なる四つの霊波を確認。どうやら後から現れた少女たちから微弱な霊力が検

知されてるようです」
「新たに四つって…!?　波長は!?」
「そんなことより、美少女だらけじゃないですか！　あの空間、顔面偏差値高過ぎませんっ？　すごいなあ士道くんは」
「そんなことじゃないわよ、中津川！」
　霊波や霊力の検知といったラタトスクとして最大の仕事を前に、気の抜けるようなとぼけだことを言う中津川を叱咤する琴里。
　そして霊力が確認されたということは、すなわち……
「あの娘たちみんな精霊ってこと!?」
「波長照合。《ハーミット》、《ベルセルク》、《ディーヴァ》、それに《ウィッチ》。どれもここ最近反応がなかった精霊たちのものですね。そうだ！　司令も混ざってきてはいかがですか？　ここは不精、神無月が代理を――――」
「うっさいっ！　バカ！」
　愉しげな声で報告を上げ、琴里にアドバイスをしたつもりの神無月は、顔を真っ赤にした琴里の狙い済ました一蹴をその臀部で受け止める。神無月は「おぅ！」とよがり声を出して幸悦の表情で悶絶していた。
　琴里は見ているだけでは収まりが効かず、この状況の元凶に直接問い質すために、通

信用のマイクのスイッチを入れるのだった。

†　†　†

「〝士道――――ッ!!　〟」

士道の耳に入っている超小型のインカムから、つんざくような琴里の大声が響く。士道は妹からの突然の大音量コールに、思わず顔をしかめて困った顔になる。流石の士道もこの急襲は堪えたようだった。

「俺だ」

「〝俺だ。じゃないわ！　答えなさい、士道！　その娘たちは何!?〟」

「ん？　何だ嫉妬か？　安心しな、俺は大切な義妹のことも忘れちゃいないぜ」

大好きなおにーちゃんがとられて焼きもちを妬く妹をあやすように、士道は再びの余裕を取り戻して息をするように歯の浮くような台詞を連ねていく。この漢にはもしかしたら照れという概念はないのかもしれない。

「〝べっ、別におにーちゃんのことなんて…!!　ってそうじゃなくて！　その娘たちは誰なの？　私にも教えて頂戴〟」

「あぁ、こないだ言ったろ？　この一年で口説いてきたオンナたちだぜ」

「〝確かに言ってたけどぉお!!!〟」

さも当たり前のようにこの数の美少女を口説いてきたと語る士道に、通信越しでも身体が動いているのがわかるくらい激しいツッコミ入れる琴里。余談だが、ここにきて琴里のツッコミのボルテージは最高潮に達しようとしていた。

士道を囲むはどれも一癖も二癖もあるワケアリ美少女なのだが、伊達ワルの前にはそれすら大した障害にはなり得なかったというのがこの状況の真実なのだ。

まあ、そんなことを琴里はこの場では知る由も無いので、あまり関係のない話だろう。

「〝じゃあその娘たちみんなが霊力を持ってるのは!!?〟」

収まりがつく様子のない琴里が続けて質問を投げ掛ける。だが士道は答えることなく、軽く鼻で笑った。すると次の瞬間、美少女の群れの中に囲まれていた筈の士道の姿が消えた。

そして集団の一歩前に移動していたのだ。どういうわけかはわからないが、士道はなんとも羨ましい拘束からスルリと抜け出して、ポケットからスマホを取り出し歩き始める。

「〝ちょっと士道！　聞いてんの!!?〟」

「ヘイ、サンダルフォン！」

「〝…は?〟」

　士道は琴里の呼び掛けに答えず、まるでＳｉｒｉを呼ぶようにスマホに向かって話し掛ける。すると士道の前の地面が紫の輝きを放ち、その輝きの中から装飾と彫刻の施された神秘的な石造りの玉座が顕現した。そう、それは紛れもなく十香の天使、鏖殺公（サンダルフォン）だった。
　士道は悠々とした足取りでその玉座へと歩みを進める。
「〝士道！　それ天使よね!!　アンタ全部解ってたでしょ!!　その娘たちも精霊って解ってて口説いて回ってたワケ!!?〟」
　尚も琴里の質問攻めは止まらない。止まらないどころか加速していく。その問いに対する答えを士道はひとつ持ち合わせていた。否、答えるべきは一言なのだ。
　士道は玉座に腰かけると足を組む。そして尊大な態度で、いつものように不敵な笑みを浮かべて口を開いた。
「精霊とか知らないけど、たぶん全員抱いたぜ」

―　完　―